Fate/無双

アルトリア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｆａｔｅ／無双

【Ｎコード】
Ｎ４０９８Ｍ

【作者名】
アルトリア

【あらすじ】
聖杯戦争を終えた一人の弓兵。
一時の休息をと思いきや、アレの気まぐれで別の世界へと飛ばされてしまう。
果して彼はこの世界で何かを得ることが出来るのだろうか？

外史に飛ばされし弓兵（前書き）

この作品はｆａｔｅと恋姫のクロスオーバー作品です。

主人公は題名の通りアーチャーですが、物語は恋姫です。

作者の勝手な解釈で進めるので、原作とはかなり違うと思いますが、軽い気持ちで読んでいただければうれしいです。

さぁ、新たな外史の扉を開きましょう。

外史に飛ばされし弓兵

――――ああ、私も焼が回ったことだ。

自らを殺すため、過去へと遡った一人の男は暗闇の中、ふと笑った。

自らを殺すつもりが、過去の自分に救われ、己と同じ道を辿ろうとも、決して後悔する事はないと約束された。

これでもう、私は過ちを侵すことはないだろう。

そう、自分以外の衛宮士郎という男の道は私以上にひどくはならないはずだ。

これでもう、私が聖杯に望むことは何もない。

「――ケケケケ、そりゃ嘘だろ。あんたはまだ、救われてないじゃないか」

と嫌な声が頭の上からこだました。

「貴様は！」

「あんたはまだ衛宮士郎という道を修正したに過ぎない。根本的な正義の味方については解決していないのさ」

「この私に一体何をしろというのだ？」

「いや、なに。ちょっとした礼も込めてな、あんたに一時の夢でも見せてやろうと思ったんだよ。まぁ、実際、夢じゃなく一生もんになるかもしれないしな」

「何を言っている！？」

「まぁ、ようはあれだ、宝石爺と同じようなもんをやってやるってことだよ」

「ふむ、平行世界にでも飛ばす気か？」

「さぁ、ねぇ～。ただ拒否権はねえ。もうすでに発動しているしな」

と笑い声とともに、自分の下に魔法陣が展開される。

「せいぜい頑張んな。正義の味方さんよ。ケケケケ」

その瞬間、私はその場所から姿を消した。

外史に飛ばされし弓兵（後書き）

開かれた外史の扉。

そして体感したことのあるこの感じ。

――――これは聖杯戦争で召喚された時と全く同じだな。

と自分の運の無さに嘆いた。

そして私は落下した。

まさかの世界（前書き）

アーチャーの設定は、凛ルートエンドのアーチャーですが、アンリとかも知っているのでいわゆるごちゃまぜです（^＿^；）

プロローグ短いんですが、次が恋姫の世界でのプロローグのようなものなので、合わせてという感じですm（＿＿）m

まさかの世界

「ふむ、とりあえずその剣を下げてはくれないか？それとも何も武器を持たない私に対して、あえて剣を突き付けるというのであれば、こちらもそれ相応の対処をせねばならないのだが？」

「あほかお前は！いきなり落ちてきて、仲間踏ん付けられて剣を突き付けないほうがおかしいだろうが！」

とちょび髭の長身の男は激怒しながら、私に剣を突き付けていた。

ちなみに私が無事だったのは、巨漢の男の腹目掛け落下したので無傷で済んだようだ。

「まぁ、もっともな意見ではあるが、彼女に剣を向けるのは別では

ないかな？」

と私の後ろにいる少女に対しても、男達は、剣を突き付けていた。

「おや、私の心配をされるなど、ずいぶんと余裕のようですな」

とにやりと笑う少女の手には、一本の槍が握られていた。

「いやなに、わたしが落下した前から揉めていたみたいだが、周りにある死体は君がやった物だろう？」

ふと笑う私に少女は

「――――いきなり降ってきたかと思えば、即座にこの状況を判断するとは、なかなかの洞察眼ですな。では、こやつらが賊であり、私がそれを叩き潰すためにここでこんな事をしているとすれば、あなたはどちら側に付きますかな？」

と少女はにやりと笑うと襲い掛かってきた男を、一瞬にして打ち倒

した。

意識を集中させ、愛用する夫婦剣を投影する。

その刃は一瞬にして目の前の二人の男の意識を奪った。

「どうやら私は君に協力した方がよさそうだ」

とさらに眼前の敵を崩していく。

「では」

とその少女が微笑んだ瞬間、一瞬にして空気が代わった。

「賊どもよ聞けい！我が名は常山の趙子龍。貴様ら黄巾党に奪われた村人たちの命、我が槍にて償わせてもらう！」

それを聞いた黄巾党と呼ばれたもの達は一瞬息を飲んだ。

だが、黄巾党以外にもう一人息を飲んだものがいた。

「まさか！？君は性が趙、名が雲、字が子龍か？」

と前の敵を切りつける。

「これは驚いた、我が名を知っているとは…」

と趙雲もまた、敵を倒しながら私を見た。

――――これはどうやら、とんでもないことになってしまったようだ。

アンリマユめ…厄介な世界に送ってくれたな。

深く考えるアーチャーだったが、その手は留まることはなく、すでに隊を半数ほど削っていた。

隊といっても小数なので、５０人もいない。

サーヴァントとして召喚された事がある彼にとっては、たいした事はなかった。

「畜生、何でこんなに強いんだ！」
とちょび髭の男は、急いで馬に乗り
「逃げろ！」
とわかりやすい退却の合図を出し、一目散に退却した。

「逃がすか！」
と趙雲が駆けようとするが、その前を塞がれる。

「なぜ逃がす！ここで仕留めねば今度は大群でやってきますぞ！」
と趙雲の言葉にアーチャーは微笑み

「まぁ、見ていたまえ」
と剣を消し、使い慣らした弓を構築する。

「我が鷹の目から安々とは逃がさんよ」

とその瞬間、次々と逃げた男達が落馬していく。

その光景を趙雲はポカンと見ていた。

まさに開いた口が塞がらないというやつである。

「これで最後だな」

と放った矢は文字通り、最後の一人を落馬させた。

「いや～お見事ですな！剣といい、弓といいまさに神業ですな」

と趙雲は感心しながら槍についた血を拭き取っていた。

「では、そろそろ教えていただけますかな？どこで我が名を？」
と趙雲は先程とはまるで違う悪戯めいた子供のような顔でアーチャーに問い掛けた。

「どう話したらいいのかわからないが、とりあえず言えることは、私がこの世界の住人ではないということだな」

「もしや貴殿、天の使いか？考えて見れば当て嵌まることは多々…う～む」
と悩む趙雲だったが

「何だそのふざけた名前は」
とアーチャーのバカバカしそうな顔を見た瞬間。

「おや、違うのですか？」
とキョトンとした顔で答えた。

趙雲が言うには、まるで日が昇ったかのように辺り一面を照らし、流星とともに落ちて来た者は、この大陸を納める天の使いであると町で噂になっていたそうだ。

「成る程、この時代はそういった物に対し、必要以上に反応してしまう傾向があるようだな」

とアーチャーが呟いていると、趙雲は

「つもる話しもなんでしょうし、町に行きませぬか？ここで考えていてもいい案は浮かばないでしょうし…」

「そのようだな。それと私の事はアーチャーと呼んでくれないか？」

「あちゃー？」

といいづらそうに言う趙雲に対し、はぁとため息を付き、

「アーチャーだ」
と言った。

「あーちやー、あーちゃ、あーちゃー？」
と何回も言い直す趙雲に対し

「とりあえずは今の発言でいい」
とアーチャーは頭を悩ますのだった。

まさかの世界（後書き）

町に着いて、やはりそうだと確信した。

自分が飛ばされたのがあの有名な三国志の時代であり、ちょうど黄巾党討伐の目前だと言うことを。

さてさてどうしたものか。

アンリには正義の味方について飛ばされたが、この時代では寧ろなにが正義なのかすらわからないのではないか？

だが、考え込んでも答えが出ることはなく、趙雲と町で食事を取ることにした。

集いし者（前書き）

頭の中の妄想を書こうとすると莫大な量になると絶望するｏｒｚ

集いし者

「あーちゃー殿が、この世界の人間でないということに、些か疑問が残りますが、概ね間違いはないと判断しました」

と趙雲は真剣に話しをしているが、途中途中頬が緩むのが気になる。

どうやら彼女は無類のメンマ好きらしく、先程頼んだ酒とメンマを食べ、飲んだりする毎に、ほわっとした雰囲気になっていた。

こういう表情をする女の子を、何度かアーチャーは見たことはあったが、それは甘味を食べた時がほとんどで、メンマなどという、明らかに酒のつまみである物を食べてこうなる女の子…いや、むしろ男でもいない。

「それと一つ疑問に残るのだが、あーちゃー殿は妖術師か？」

「私の武器を見てそう思ったのか？」

とアーチャーが尋ねると趙雲は、メンマを口に入れながら首を縦に振った。

「まぁ、君達からすればそう見えるかもしれないが、これは魔術と言ってね、何でも出来るわけではないのだよ」

とアーチャーはメンマを摘んだ。

おっ！この時代にしては、なかなかうまい。

「何でも出来るわけではない…ということは、あーちゃー殿が使う魔術には剣や弓を出す以外になにが出来るのですか？」

「私がほかに出来るのは、強化ぐらいだな」

とメンマを取ると指で弾いた。

「この通りメンマは柔らかいだろう？これに強化をかけるとこうなる」

ともう一度指で弾くと、まるで割箸のようにパキンと折れた。

「これはすごい！まるで竹ですな」

と強化されたメンマをつっついていた。

「物質によって限度はあるが、使い方によってはかなり使える魔術でね、私の武器が壊れにくいのもこれが理由の一つさ」

「魔術…成る程。知れば知るほど面妖ですな。だが、実に面白い！――――私にも使うことが出来るのですか？」

と机から乗りだし、目を輝かせた。

「――――残念だが、皆が使えるものではないのだよ。魔術回路と呼ばれる、魔術を使うための神経みたいなものがなければ、魔術を使うことは出来ない。生憎私には相手に魔術回路があるかどうか調べる術が無いのだ」

と言ったアーチャーに対し、ガックリと趙雲はうなだれた。

それを見兼ねてか、アーチャーは

「まぁ、魔術回路がある前提での修業ならば、やれないことはないが」

と気まぐれ程度に言った。

その瞬間だった。

うなだれてたはずの体は再度机を乗りだし、手は机を大きく叩き

「――――是非とも私に教えてくだされ！」

と目を輝かせていた。

それから数日は趙雲の修業と，周りの情報を集めていた。

この付近は北平の南らしく、最近ここの領主、公孫賛が黄巾党討伐

のため、義勇兵を集めているらしい。

義勇兵になれば、生活自体に支障の無いほどの賃金が、毎月支給される。

今までは、趙雲の持つ路銀で何とかしてきたが、厄介なことにアーチャーの体はマスター無しに受肉していたため、食事が無しでは生きてはいけない。

一人分の路銀を二人で使うことになったのだ、当然財布の中身は極端に無くなっていった。

「仕方あるまい、少し稼ぐとしよう」

とアーチャーが、義勇兵募集の札を見ていると、趙雲が

「おや、義勇兵の募集ですか？あーちゃー殿は興味がおありで？」

と近づいてきた。

「生憎だが私にはこういった物に参加する意志は無くてね、見向きもしないのだが、問題が一つあるだろう？」

と趙雲の胸元を指差した。

「おや、この私の胸に問題がおありか！成る程、あーちゃー殿も欲求不満なのですな」

とニヤリと趙雲は笑った。

「……ふざけないでくれないか？生憎私はそういった冗談は好まないんだが？」

「それは残念。この身ご所望とあらば、あーちゃー殿ならば喜んでお相手しようと思ったのですが」

「――――はぁ～」

とアーチャーは深くため息をついた。

「さて、本題に入りますかな」

まさか趙子龍が、こういうタイプと思いもしなかったアーチャーは、

この先が思いやられると、またため息をついた。

「私たちにはどこかの軍に入る意識はないが、金はない。二人分を確実に稼ぐには、軍で武功をあげるしかない。となれば話しは簡単。どこかの軍の客将になればいい」

アーチャーが言いたかったことを淡々と述べる趙雲。

だが、そこには一つ大きな問題があった。

「私たちには将としてやっていける実力はあっても名声が無い、いきなり公孫賛殿のところに言って、客将として扱ってほしいなど無理があるでしょう」

「先ずはそれだな。公孫賛がどこかの黄巾党の隊と戦いが始まったら、その戦いに乱入し敵将を討つ。これが名声の無い私たちに出来る簡単なアピールの仕方だな」

「あーぴる？」

――――またこれか…

「あーぴるではなく、アピールだ。表現の仕方と捉えてくれればいい」

「成る程。では、まずは黄巾党の動きでも調べ」

と続きを言おうとした趙雲の声は村人によって掻き消された。

「黄巾党だー！」

「おやおや、とんで火にいるなんとやらですな」

「これを利用するのはいいが、既に町に何人か入っているようだ」

「この町の門は北と南、ちょうど我々が町の中心ですから、二手に別れた方がいいでしょうな」

と趙雲は槍を構えた。

「では、君はそのまま北に向かいたまえ」
と弓を構え、門を突破した者を次々と射抜く。
「では、御武運を」
と趙雲は駆け出した。
「君もな」
とふと笑い、弓で射ぬきながら、南門へと向かう。

何人か村の自衛隊のような者が対抗しているため、まだ流れ込んで来る事はないが、それも時間の問題だろう。
「なるべく被害を押さえたいが…さてどうしたものか」
と考えていると、急に門の兵が引きはじめた。
一瞬、敗走しているようにも見えたが明らかに士気がおかしい。
「…成る程、なかなかの策士がいるな」

と門近くの民家の上を見ていた。

そこには残りの衛兵らしきものたちが、弓を持ちながら待機していた。

そして、その先頭にはメガネをかけた女の子がいた。

「十分引き付けてください！」

と冷静に士気を始めた。

衛兵の一人一人が、まるで獣に睨まれたかのように息をのむ。

すると門を突破した黄巾党が獣の群れのように一直線に駆け抜け始めた。

「まだです！焦らないで！」

と射抜き始めようとしていた兵を落ち着かせる。

少女が手を挙げると一斉に弓を引き始めた。

「――――今です！放て！」

とメガネの少女の指示の元、一斉に弓が放たれた。

その矢は先頭を逃し、隊中間の横っ腹目掛け　放たれた。

矢を無駄なく討つには最も適切な撃ち方ではあるが、詰めが甘い。

先頭に対処する兵が家の路地から出てきたが少な過ぎる。

「あれでは突破されるだろう」

だが、メガネの少女の顔は全く代わらなかった。

それだけではない。

まるでアーチャーになにかを訴えているかのように、じっと見つめているではないか。

すると飛び出した兵たちは行く手を塞ぐのでは無く、路地に入られる事を防いでいたのだ。

「どこで私の事を知ったのかは知らんが、私を利用するとはな」

とアーチャーは弓を引いた。

だが、その矢はただの矢ではない。

「だが、賢明な判断だ」

全身に魔力を込め、使い慣らした螺旋剣を創造する。

体は　剣で　出来ている

「ーーーI　am　the　bone　of　my　sword.」

全身の魔力を込め、それは放たれた。

「――偽（カラドボルグ）・螺旋剣」

敵から見ればただ剣を飛ばしたにすぎないだろう。

しかもアーチャーは、すでに弓を下しているのだ。

さすがのメガネの少女の顔にも焦りが出た。

「なぜ弓を！？」

だが、これはその常識を凌駕する。

黄巾党の一人に当たった瞬間、それは爆ぜたのだ。

その威力は前方にいた黄巾党の半数を巻き込み、周りにいた者はその爆風により壁に叩きつけられた。

当然、その場にいたものは沈黙した。

それは味方も例外ではない。

とくにこの策を考えていたものからすれば、うれしい誤算であった。

「公孫賛の軍が来るまでの最も被害が少ない方法を選んだつもりで

したが、これならば！」

とメガネの少女は屋根からおり、アーチャーのところへと向かった。

同じころ趙雲のほうでも、似たような戦法で黄巾党を撃退していた。

「成程、何処の知恵士かと思えば風ではないか」

「おぉ、これは星ちゃんじゃありませんか！いやはや驚きましたよ」

と金髪の少女は驚いたような声で言うが、表情自体には変化はなく、淡々としていた。

「これであとは何とかなりますねぇ～。南門は凛ちゃんが指揮をとっているはずですから、後は星ちゃんにお任せして風は寝る事にしましょう」

とくぅ～とた立ったまま寝息を立てていた。

「ふふふ、ゆっくり休むといい。起きるころには終わらせておくとしよう」

と趙雲は意気高らかに、黄巾党の前列に突撃を仕掛けた。

集いし者（後書き）

「全軍整列！これより我等は黄巾党を」

と白馬に乗った少女が剣を掲げ意気高らかに号令をかけていたのだが…

「申し上げます！」

と先発させた伝令兵が帰還して来たのだ。

「どうした！まさか町が落とされたのか！？」

と歯を食いしばる少女に対し、伝令兵は

「それが…黄巾党は敗走！我が領内の衛兵によって勝利を収めました」

と驚きを隠せない表情で、報告を終えた。

「そんな馬鹿な！あそこに置いた兵で、黄巾党の小隊を倒すほどの実力など無いだろう！」

「それが、衛兵の中に妙なもの達がいたようです」

「誰だそれは？」

「素性は知れませんが、どうやら公孫賛様に面会を求めておいでのようです」

「私にか！？――――わかった、案内してくれ」

と公孫賛が告げると、伝令兵は町へと案内した。

白馬将軍（前書き）

お待たせしました。
あまり進展はありませんが、続きです。
次の話で三姉妹が出るはず

白馬将軍

黄巾党を撃退したアーチャーたちは、村の中心にあった義勇兵募集の看板の前で待機していた。

「いやはや、一時はどうなる事かと思いましたよ」

と金髪の少女が、相変わらず無表情で声色だけを変えながら喋っていた。

「しかし、驚いたな。まさか風と稟が、ここにいるとは思わなかったぞ」

「それはこちらが言いたいことです。まったく、黄巾党を討伐するため、森のアジトに行ったはいいものを、途中でいきなりはぐれるんですから」

と稟と呼ばれた少女が呆れた顔で趙雲をみた。

「仕方ないだろう、霧が濃くて前が見えなかったのだから。それに私はちゃんとアジトの黄巾党を壊滅させてきた」

と反論するが、あまり効果がなかった。

それもそのはず。

趙雲は黄巾党の一隊を見つけた途端走り出したのだ。

武に長けた趙雲に、普通の少女達が追いつけるわけが無い。

案の定、はぐれてしまい、この町で二人は待機することにしたそうだ。

「それで君たちは、何者かね？かなりの策士のようだが…」

「くぅぅ～」

「すまないが、起きてくれないか？」

「おぉ、あまりの日の心地よさに眠りに誘われてしまいました」

アーチャーはまた一つ大きなため息をついた。

「君の知り合いはみんなこんな感じなのか」

と趙雲に尋ねた。

すると趙雲は楽しそうに

「ええ、我が友は皆個性的な方がいい。その方が面白いではありませんか」

と言われてしまった。

その時、アーチャーは聞いて呆れていたのと同時に、稟と呼ばれていた少女にも、隠れた個性があるのではないかと、内心不安だった。

それは残念なことに的中するのだが、それは後の話しになる。

「風の性は程、字を立、字を仲徳というのです」

「私のことは戯志才とお呼びください」

何だと!?程立といえば、のちの程?、戯志才は曹操の腹臣のはず…

「君の名は本当に戯志才なのかね?」

「なぜそう思うのです?」

「いや、君の名が戯志才だというのであれば、少し状況が変わってくるのでね…」

「…何か思うようなところがあるようですが、私には少し事情がありまして、このあたりで本名を名乗るわけにはいかないのです。ですが私が名を隠しているのは、何かの罪を犯してというわけではないので、安心してください」

と表情を緩めた戯志才だったが、もう一人の存在によって簡単に暴かれてしまう。

「おいおい、兄さん。あんまり人の過去に踏み込むんじゃねぇよ。まぁ気になるなら俺が簡単にだけは話をしてやろう」

と程立が話しているようなのだが、明らかにおかしい。

「宝けい、余計なことをいうのはよくありませんよ」

…腹話術か？

「自己紹介が遅れちまったが、俺は宝けいっていうんだ、よろしくな」

と程立の頭の上で語りかけてくる日輪を表している人形。

「あぁ、よろしく頼む」

と若干戸惑いはしたが、なんだか慣れてきたところがあるらしい。

「ここはもう公孫賛の領内だから言えることだけどな、戯志才は、ここから南にある袁紹に仕官しに行ったんだよ。だけどこの袁紹っていうのがあまりにも馬鹿でな、仕官する気も失せたんだ。その時に袁紹に名前が知られちまったというわけだ」

「成程、この時代に唯一まともな手掛かりといえばその者の名。それ故に君は偽名を使っているということか…」

だがこの時アーチャーは驚きを隠せなかった。

この話を聞いてすでに確信に迫っていた。

この二人が後にあの曹操に認められた軍師なるはずの人物であることを。

「これは私の独り言だ。郭嘉奉考は袁紹の怒りをかい未だ逃げているそうだ」

「！！」

その瞬間、二人の顔は驚愕へと変わっていた。

だがアーチャーもその二人と趙雲が知り合いと言うのにも驚いていたのだ。

だが、これでアーチャーはこの世界に一つ結論が出せた。

この世界は、忠実な三国志てはなく、完全にパラレルワールドであると言うことだ。

このままアーチャーが知っている歴史道理に動いたとしても、その結果が必ず同じになるという可能性はない。

「ならば、私は私の思う通りに行動するとしよう」
とアーチャーは決意を固めながら、空を見つめていた。
その顔はあまりにも清々しく、趙雲がそれを見て赤くなっていたのをアーチャーが知ることはなかった。

「それで、いい加減話していいか？」
と桃色の髪をした少女が、ため息をつきながらアーチャー達に話しかけてきた。

「ああ、先程から気になっていたが、誰かね？」
と先程言った言葉を再度いうと、やっと話題に入れると安心したのか、大きく息を吐き、
「私が、おまえ達が会いたがっていた、公孫賛だよ」
と胸を張っていた。

「なっ！？」
「えっ！？」
「おいおい、なんだよその明らかにお前が！？冗談だろ！？みたい

な目は！わかってるよ、私が影が薄くて、領主ぽくないのは！だけどなぁ～、わざわざ出向いてやったんだから、もう少しまともに構ってくれてもいいだろ！どれだけ無視してるんだよ」

と言いたい事を言い尽くしたらしい公孫賛は、肩で息をしながら、顔を赤くしていた。

「あ～すまないがどの辺からいたのだ？」

「そこの程立？が一時はどうなることかと思ったってところからだよ」

おいおい、始めからではないか！？私ですら気が付いたのは、一分ぐらい前だぞ！？

「それで、公孫賛殿。わざわざ貴殿から来たということは、なにかを聞きたいのとではないか？」

と趙雲が真剣な眼差しで話すと呼応したように公孫賛も同じように

「ああ、まずは今回の黄巾党からの防衛をはたしてくれて感謝する。だが、いったいどうやったんだ？」

「ああ、それはこの二人の知謀のおかげだよ」

とアーチャーは、程立と戯志才に顔を向けた。

「そんなことはありません。私は賊を最小限の被害で抑える策を立てたのです。ですが、あなたのおかげで状況が代わった」

とアーチャーを真剣な眼差しで見つめた。

「それは謙遜というものだ。君は私のアレを見た上で、すぐさま別の策を考えた。それが出来るのはほんの一握りの者だけだ」

「まぁまぁ、お互い褒め合うのはいいですけど、そろそろ公孫賛さんの頭がおかしくなりそうなので、風が説明しましょう」

「すまないが頼む」

「では、少し長くなりますが、始めるとするのですよ」

時間はアーチャーが前線部隊を蹴散らした後になる。

「はぁ、はぁ」

とメガネをかけた少女、戯志才がアーチャーの元にたどり着くとすぐさま息を整えた。

「私になにかようかね？」

「今の爆発はあなたが起こしたのですか？」

と乱れたメガネを直しながら尋ねた。

「ああ私だが、あれで敵を倒せと言われても無理があるぞ？」

と皮肉めいて、アーチャーは言ったが、　は気にもとめず、考えをまとめていた。

「あなたに簡潔に二つ問います。よろしいですか？」

と鋭い目つきで　は尋ねた。

「ああ、構わない。」

「では、まず一つ。今と同じ爆発をいつでも起こすことは可能ですか？」

「それならば問題はない、あれは私が得意とする物の一つだ」

「では、二つ目。前方にいる兵を何人で足止めできますか？」

「――成る程。私があれを何人で止められるかが問題であるということか。ならば問題はない、あれは私一人で十分だ」

「冗談を言う暇はないのですが？」

「冗談だと思うのは君の自由だが、私はこんな状況で冗談を言う性分ではないんだが？」

「ならば、お任せしましょう。これから私は――――」

自ら立てた策を成功させるため、アーチャーに戦場を預け、その場から立ち去った。

精神を統一させ、夫婦剣を投影する。

「暴徒と化した獣の群れ達よ。貴様らの願は他の者を蹴落とした上で成り立つものだ。ならばいっそ――理想を抱いたまま溺死しろ！」

まさに一騎当千。

戦場をかけた赤い閃光は一手一殺で確実に向かってきた者を沈めていく。

それほど、アーチャーの動きが早く、黄巾党の動きが遅いのだ。
実際の黄巾党はほとんどが不満を抱いて立ち上がった農民で出来た部隊だ。
平行世界だからといって根本的な部分は対して変化はない。
戦場を勝ち抜き、英霊となってさらに力を得た存在にいくら人数がいようと、結果は歴然だった。
さらに問題だったのは敵の部隊を指揮している者だった。

「なにをやっている！たかが一人だろう！？」

「ですが管亥様！我が部隊は半分ほど壊滅！北門部隊も苦戦しています！ここは一度引くべきでは！？」

この時代の相手の力量を測れない指揮官は、自らの部隊を自らの手で殺してしまっているような状態になってしまう。
ただ唯一の救いが、兵の多さというだけだった。

「これで５０人。これではきりがないな」

体力に問題はないが、精神的に嫌気がさす。
人を殺す事には馴れたが、好んでしているわけではない。
１０人救うべき人間がいて、９人か１人どちらかしか救えないとし

たら9人を救い、1人を殺した。
救うために殺す行為を何千何万回と行った上で成り立ったのがアーチャーの力だ。
「そろそろか・・・聞け黄巾共！貴様らの暴挙、私が武を振るうまでもない、貴様らのような小者は寝屋に帰り震えて寝ていろ。ではな」
とアーチャーは後退し街の中心目指して走りだした。
普通の軍であれば、このような挑発、あからさますぎて追ってくることはまず無いだろう。
だが、統率もなにも取れていないのであれば話は別だ。
「・・・ふざけるな！野郎ども！逃がすんじゃねーぞ！」
「もちろんだ！追いかけるぞ！」
一斉に雪崩のようにアーチャー目がけ突撃をかける黄巾党の眼は血走り、心頭は沸騰する湯のように真っ赤に煮えたぎっていた。
「やはり統率のとれていない部隊だな。効果は絶大か…さてそろそろ見えるはずだが…」
と、アーチャーは自身の目に強化をかけ、前方を見る。
すると、その先には同じように追われている、趙雲の姿があった。

「距離にして１００ｍくらいか…ならば」
と夫婦剣をイメージする。

体は　剣で　出来ている
「―――Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ．」
狙いは前方４０ｍ、そこに干将・莫邪を投げつけ、地面に突き刺した瞬間
「壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）」
爆発が起き、前方に砂煙を発生させた。
その中へアーチャーが突っ込むと、何のためらいもなく、黄巾党も続々と突撃する。
「これで策は成った。後は彼女たちに任せるとしよう」
とアーチャーは煙の中、趙雲を捕まえると、お姫様抱っこをして、屋根へと飛んだ。
「なっ！あーちゃー殿！？」
と顔を真っ赤にする趙雲だったが、アーチャーのスキル鈍感により、なんでそうなったのか気づくはずもなく、
「すまないが急を要するのでね。私みたいなものに抱きかかえられるのは不満だろうが我慢してくれ」

などと言って、その場から立ち去った。

後は酷いやり方ではあるがお分かりだろう。

砂煙の中、敵味方の判断など付くはずもなく、同士打ちが始まり、数を半分にしたところで、将の管亥がやっと治めたが、時すでに遅し。

屋根の上では、全衛兵が弓を構えていた。

「投降するならば、命だけは助けましょう！どうしますか」

と戯志才の真剣な表情は、黄巾党からすれば命を握った悪鬼にしか見えず、ほとんどの者が投降。

現在この街の牢で幽閉中になった。

「というわけですよ」

程立ののほほんとした声で、大まかな説明が終わると公孫賛は、ぽかんと口を開けたまま、沈黙していた。

白馬将軍（後書き）

「是非わが軍に来てくれないか！？」

と大げさに言う公孫賛だったが、趙雲が

「公孫賛殿には、悪いが私たちはまだ仕官する気はないのだ」

といわれると、がっくりと肩を落とした。

「だが、私たちには金が無くてね、客将で良ければ、そうだな…この黄巾党の暴挙が鎮まるまでは、君の軍にいてもいい」

とアーチャーが言った瞬間に、公孫賛は顔を上げ、是非とアーチャーの手を取った。

「そういえば、お兄さんの名前をまだ聞いていませんでしたね」

と程立が話しかけると

「ああ、私のことはアーチャーと呼んでくれ」

「あーちゃー？ずいぶんと変わった名前なのですね？」

「私のような偽名のようですが、何か問題でも？」

と戯志才が尋ねると

「ああ、あーちゃー殿は天の御使いだ」
と趙雲が楽しげに言った瞬間
「「「えぇ〜！！」」」
と三人は唖然としていた。
「おいおい、趙雲。私はそんなものではないのだが？」
と反論したのだが
「あーちゃー殿は、別世界の人間という説明もしづらいでしょうし、なにかとこっちのほうが役に立つでしょう」
と返されてしまうと何も言えなかった。

旧友（前書き）

今回は、三人姉妹の登場です。
そして次回はいよいよ黄巾の乱前哨戦。
なかなか進まないｏｒｚ

今回はちょっと後書きが長いかも・・・

旧友

公孫賛の客将として４人は確実に将として実力を発揮し、１５日ほど経過した。

そして近くに黄巾党のアジトがあると情報を得たため、公孫賛の部屋で作戦を立てていた。

「では、お兄さんと風が右翼。稟ちゃんと星ちゃんが左翼。公孫賛さんが本陣という振り分けでいいでしょうか？」

と程立が地図を指差しながら、隊を振り分けていた。

すると、趙雲が部屋に入って来ると

「伯珪殿、なにやら旧友が尋ねてきたようですぞ？」

と公孫賛の字を呼びながらニヤニヤしていた。

この数日で最も公孫賛と意気があったのが趙雲だったらしく、趙雲もまた公孫賛のことが気に入ったらしく、字で呼ぶようになっていた。

「旧友？」

「ええ、劉備と申す者が兵を連れてきて面会を求めております。領主の間（玉座の間を縮小したような部屋）で側近を連れてお待ちで

すよ」

「劉備だって！」

と公孫賛は名前を聞いた瞬間に、部屋から飛び出して行った。

「成る程、劉備玄徳か…」

「アーチャー殿はしっておられるので？」

と趙雲はやっと言えるようになった名を口にすると、キョトンとした顔で尋ねた。

「会ったことはないが、知識としてはある」

「成る程、ということは劉備殿も我等と似たような存在というわけですな？」

と趙雲はニヤリと笑った。

「ああ、そんなところだ。今は名声がないが、後数年もすれば嫌でも聞くぐらいになるだろう。今会っておくのも悪くは無い」

「なるほど～。それほどの人物なら、風達も面会しておいた方がいいでしょう」

「そうですね、私も興味があります」

「ならば、一時中断するとしようか」

とアーチャーたちは立ち上がると、部屋から出ていった。

「それで、どれぐらいがおまえ達の兵なんだ？」

と領主の間に近づくと、公孫賛の声が聞こえた。

「えっ！？何人って？」ととぼけた少女の声が聞こえるとアーチャー達が入室した。

「いくら私だって、あれが全部おまえ達の兵じゃ無いことはわかっている。近場で雇った傭兵かなんかだろ？それぐらい見抜けなきゃ、領主は務まらないよ」

と笑いながら、公孫賛は劉備らしき少女と会話していた。

「あぅ～…あのね、全員なんだ…」

と人差し指をツンツンしながらアハハと笑っていた。

当然、一瞬にして場は固まった。

「まぁ、仕方が無いだろう。劉備はまだ名声が無い。そんな者に知

り合い以外でついて来るやつなんてたかが知れている。それよりもその両脇にいる者たちで、何千人分の働きをしてくれるさ」

とアーチャーは公孫賛の肩を叩きながら、慰めていた。

「アーチャー…程立達まで来たのか！」

「はい～。公孫賛さんがいないと軍議が進みませんし、私たちも劉備さんという人を見てみたかったのです」と程立と戯志才は劉備らしき少女を見つめた。

「貴様、何者だ？私の力を知っているようだが？」

と黒の長髪の少女が、アーチャーを睨みつけていた。

「どなたかは知らんが、我が師をいきなり睨みつけるとは、少々無礼が過ぎるのでは無いか？」

と趙雲もまた、黒髪の少女を睨みつけた。

一色触発の状況に、公孫賛と劉備がわたわたし、劉備の後ろにいる小学生くらいの少女はニャハハといいながら飽きれ、程立とぎしさいはため息をついていた。

そこへ、趙雲が

「それに、安心しろ。貴様では我が師には敵わんよ」

と言ってしまえば、完全に緊迫が解かれ、爆発した。

「ほう？ならば、一手お相手願おう！私が勝ったら、私の武を馬鹿にしたことを詫びて貰うぞ！？」

「おいおい、私は君の武を馬鹿にしたつもりは無いんだが？」

とアーチャーは呆れながら趙雲を睨みつけていた。

「ほう？お逃げになる。ならば、私の不戦勝で構いませんね！？」

その瞬間だった。

まるで空間に亀裂が走ったかのように、一瞬にして空気が変わった。

「君が人よりも武が秀でているのは、わかるが、相手の力量を計らないまま挑発するのは自殺好意だ！それをあえてまだ挑発するというのであれば、それは愚直というものだ。違うかね？」

と殺気を込め、睨みつけた。

「くっ！失礼した。だが、私の武を馬鹿にはしないで頂きたい」

「だから私は馬鹿にするつもりもなければ、そんなことを言ってはいない。だが、自信がありすぎるというのは、少々危険だな。――――仕方が無い、相手をしよう」

そして15分ほどたった後、中庭で両者は対峙していた。

「武器を持たないのですか？」と黒髪の少女は偃月刀を構えていた。

「それならば心配はいらないさ」と夫婦剣を投影し見せた。

その見た、劉備たちは驚愕していた。

「なっ！まさか貴様、妖術師か！？」

「…説明すると長くなるので、今はそんなものだと思えばいい。とりあえず確認しておきたい事がある。君の名は関羽雲長で違いないか？」

とアーチャーは殺気をぶつけた。

その瞬間、まるで場は凍りついたように固まり、殺気を当てられた関羽は冷や汗をかいていた。

（っ！！――やはりかなりの殺気。これほど強い殺気は、本気の鈴々でも出せない。これは本気でやらねば、喰われてしまうぞ！）

と関羽は内心まるで心臓を掴まれているかのような恐怖感で頭がいっぱいだった。

「それで、相違ないのかと聞いているのだが？」

とアーチャーは剣を構えることなく、未だ殺気を当て続けていた。

「相違はない。なぜ私の名まで知っているのかは、また長くなるから説明はしないと言うのでしょう？」

「ああ、そうだな。君が勝ったら、私がどういう存在なのか教えるとしよう」

とついにアーチャーが剣を構えた瞬間、関羽は偃月刀を振り下ろした。

周りから見れば目にも留まらぬ早業なのだが、アーチャーは難無く攻撃をいなした。

「あまり殺気立つのは良くない。動きが鈍り、攻撃が単調になってしまうぞ？」

「くっ！」

（私の一撃がこうも簡単に弾かれるとは・・・ならば！）

関羽は再度縦に偃月刀を振りおろした。

だが、やはり単調すぎてアーチャーに簡単にかわされた。

しかし次の瞬間、趙雲の顔が変わった。

関羽は振り下ろした瞬間、即座に持ち方を変え、振り上げる体制が出来ていた。

「はぁぁぁー！！」

ガキンという金属音が鳴り響き、火花が飛び散った。

「うまい・・・あれほどの早業、出来るものはそうはいないだろう」
「そうですねぇ～。でも相手が悪いのです」と趙雲の解説に程立は笑みを浮かべた。
「成程、やはり関羽は関羽と言ったところだな・・・。ならば私も少しだけ、手を見せるとしよう」
と不敵に笑った瞬間、関羽の視界から消えた。
「なっ！・・・後ろか！」
関羽が振り向いた瞬間、アーチャーは二連撃を放っていた。
「やはりアーチャー殿の方が上だ。あそこに回られては、攻撃には回れない」
と趙雲の言った通り、関羽は最初の二撃以外で攻撃に回れることはなかった。
「これは私が戦った事がある者の一人が最も得意としていた攻撃手段の一つでね、常に相手の視覚から外れて立ちまわる暗殺術の一つさ」
「ちっ！」
内心関羽は焦っていた。
いくら視界から外れる術を知っていても、そう簡単に出来るもので

はない。

ということは既に、アーチャーの方が身体能力が上だということを示されているようなものなのだ。

「だが、私とてこのままでは終われん！我が魂魄を込めた一撃を受けよ！」

と関羽は、アーチャーが移動した瞬間に、偃月刀を力の限り振り回した。

その瞬間、まるでガラスが割れたように、粉々になった刃物が両者の間に飛んだ。

「やった！愛紗ちゃんの勝ちだ！」と劉備は喜んだが、横にいた少女は冷や汗をかいていた。

「無理なのだ。あのお兄ちゃんが強すぎて、愛紗は本気の一撃を込めてはなったけど、剣しか破壊できなかった。あのお兄ちゃんは剣なら簡単に出せるみたいだから、この勝負愛紗の負けなのだ」

「ほう？そこのお嬢ちゃんも中々の武を持っているようだな」

「お嬢ちゃんじゃなくて、鈴々は張飛なのだ！」

「何やら外野がうるさいのだが、まぁいい。見事だよ関羽」

「私の魂魄を込めた一撃でしたが、武器しか破壊できなかった。あ

なたはいくらでも武器を作れるのでしょう？この勝負私の負けですね・・・」

「いや、普通の相手だったら君の勝ちさ。だからこの勝負は君の勝ちだ。だから最後にいいものを見せてあげよう」

と長刀を投影し、構えた。

「この技は私の国の武将が使っていた技だ。人の身でここまで出来る者はそうそういない。君に見せるのはその技の贋作。構えろ関羽、出なければ死ぬぞ！」

関羽に対し、真横に構えたアーチャーは、魔力を込めながら、真名を解放した。

「秘剣――燕返し（つばめがえし）！」

アーチャーは刀を関羽に右斜めに振り下ろした。

「速い！だがかわせない速さでは・・・！！」

一振り目を回避した瞬間、逆から振り下ろされる斬撃があった。

「バカな！」

関羽は避けきれるわけもなく、偃月刀で防いだ。

だが、それが間違いだった。

さらに真逆からの横一線の斬撃が繰り出されたのだ。

すでに人間が捉えられる速度の領域超えている剣技はまだ経験の浅い関羽で対処できるわけもなく、一瞬にして壁に吹き飛ばされた。

「愛紗ちゃん！」と劉備は砂煙の中、関羽の安否を確認するべく飛びだした。

「まさか一振りで三撃繰り出す技があるとは・・・」

と趙雲が唖然していると、公孫賛が横から飛び出した。

「おいおい！やりすぎだろ！」

と怒る公孫賛に対し、アーチャーは何の表情もせずにただ関羽を見つめていた。

「・・・なぜ、殺さなかったのですか？」

と脇腹を押えながら、関羽は立った。

その体から血は流れることはなく、押えていた部分が少し赤みがかっていただけだった。

「これは手合わせだ。君と死合をしたわけではない。それに、君は私が言いたかった事が分かったのだろ？」

「・・・はい、ご指導ありがとうございました」

と関羽は頭を下げた瞬間、そのまま地面へと倒れた。

旧友（後書き）

結局劉備はそのあと、公孫賛の軍に同盟？というような状態となり、軍の将として組み込まれることになった。

「黄巾の乱。その終わりが次第に近づいているということか・・・」

とアーチャーが月を見ていると、影が近づいてきた。

「何を考えておられるのですか？」

と暗闇の中、長髪で寝巻のまま現れたのは関羽だった。

「少しな・・・すまなかったな。怪我の方はどうだ？」

「謝らないでください。今まで自信に満ちすぎていたのですから・・・少し痛みますが、動けないというわけではないので、大丈夫です」

「そうか・・・」とアーチャーは横にあった杯を渡した。

「飲むかね？」

「はい、いただきます」

トクトクと酒が月夜に輝きながら杯を満たしていく。

「アーチャー殿でしたか？」

「ああ、言いづらいかもしれないが、私はその名前が気に入ってい

るのでね。そう呼んではくれないか？」

「ーーーならば私のことは、愛紗とお呼びください」

「愛紗？関羽雲長ではないのか？」

「愛紗とは私の真名（まな）のことです。あなたは天の御使い様ですから知らぬのも仕方ないでしょうが、真名とは親から与えられた神聖な名の事。これは相手に認められない以上、知っていても決して呼んではならない名。もし呼んでしまったら殺されても文句は言えません」

成程、趙雲たちがよく互いに呼んでいたのがこの真名のことか・・・

「でもどうして、私に？」

「あなたは私の武を救ってくれたのです。自らの武に溺れていた私を正しい道に進ませてくれた。私はその道をもう踏み外さぬよう、ここに誓いを立て、あなたに真名を預けたい」

「・・・それならば、私の本当の名を教えなければな」

とアーチャーが口を開こうとした瞬間、その手は関羽に遮られた。

「あなたの本当の名。それは真名のようなものなのでしょう。今の私にはそれを知る権利はありますが資格はない。それはこの先、あなたが私が成長したと思った時に教えていただきたい」

と関羽は澄んだ瞳ではっきりとアーチャーを見つめた。

「ふっ・・・わかった。では、愛紗」

とアーチャーは杯を関羽に近付けた。

「はい」

と関羽も杯を近づけた。

金属が合わさる音が月夜にこだまし、二人の間に契りが結ばれた。

奪還戦（前書き）

今回はオリキャラの出演です。

このオリキャラの存在も後々は、物語の重要なカギとなるはずなので、何人出るかは分かりませんが、お楽しみに。

奪還戦

「では、改めて作戦を立てるのですよ」

と程立が地図を指差した。

「私たちの街から南、ちょうど袁紹の領土。南皮の手前ですね。その村を黄巾党に占拠されているのです」

「敵兵の数はおよそ４０００。それに対し、我ら公孫賛軍は２０００。策無しでは確実に負けるでしょう」

と戯志才が説明していると、関羽が手を上げた。

「住民は無事なのでしょうか？」

「いや、すでに町から連絡は途絶えている。希望は持っていた方がいいだろうが、正直なところ可能性は低いだろうな」

と公孫賛の言葉に、関羽たちの表情は暗くなっていた。

すると、アーチャーが関羽の肩を叩き

「愛紗、被害を食い止めることも私たちの仕事だ。救われなかった者は心に受け止め、今救うべき者を全力で救えばいい」

「はい」

「ほぉ～我が師はいつ関羽殿の真名を預かったのですかな」

と趙雲は額をピクピクさせながらアーチャーに笑みを浮かべた。
他の物も当然、驚いているものばかりだ。
「いや、なんだ。昨日の夜に愛紗と話している時だが？」
「成程…お二人で夜中に…」
「おいおい、君の想像している物とは断じて違うぞ。私は月を見ながら、酒を飲んでいただけだ。そこへ関羽がやってきて話をしたときに、真名を教えてもらっただけだ」
「ほぉ、酔った勢いでですか」
と趙雲がにやりと笑った瞬間、アーチャーはため息をついた。
ようやく自分がからかわれている事に気がついたのだ。
「少し失礼ではないか？アーチャー殿はお前の師なのであろう？」
とムッとする関羽に、趙雲は
「我が師はあれぐらいの扱いでなければ面白みにかける」
と笑っていた。
「しかし、アーチャー殿は本当の名をお預けにならなかったので？」
「ああ、関羽にはまだ教えてはいない。関羽との誓いがあるのでな」

「ふむ、ならば私も真名をあなたに授けましょう。師が弟子の真名を知らないなど、よくよく考えてみればおかしいですし、何より私はあなたが気に入っている」

と趙雲が笑うと、アーチャーは

「そういうものか？」

と微妙な顔をしたが

「そういうものです」

と返されてしまうと、さすがに認めざるをおえなかった。

「我が真名は星。師よ我が真名を受取っていただけるか？」

「ああ、もちろんだ」

と握手すると、横から

「それならば私も真名を預けるのですよ」

と程立がひょっこりと顔を出した。

「何を言ってるの風！？」

「稟ちゃんには言っていませんでしたが、私も仕官しようと旅をしていたのです。ですが、英桀と呼ばれた人に会う度に私が支えたいと思うような人はいなかったのです。ですが今、私の目の前にいる

天の御使いと言われるお兄さんには、興味が湧いたのです。まだ我が主として認めるわけではありませんが、友としては認めたいと、ここ最近は思っていました。星ちゃんが真名を預けたならば、風が預けても問題はないでしょう？」

とにこやかに笑っていた程立に、戯志才は認めるしかなかった。

「私の真名は風です。お兄さん、受け取ってもらえますか？」

「私がそれに応えられるとは思えないが？それでもいいのかね？」

「はい。それに、もし応えようとして困難にぶつかった時、私がそれを助けて見せますから大丈夫なのです」

「ふっ、ずいぶんな自信だな。だがその自信に満ちている姿は私には好ましい。喜んで受け取らせてもらおう」

数時間後、作戦が決まり、アーチャーたちは、南皮に向け出発した。

先発は、趙雲と関羽率いる歩兵５００。

続く中軍に騎馬５００の張飛隊。

その左翼に弓兵２００の程立隊。

その右翼に同じく２００の戯志才隊

本陣に公孫賛と劉備の騎馬３００と歩兵３００
そして紅き弓兵は、そのさらに後方でただ一人、後続として歩みを進めていた。

「趙雲殿。本当にアーチャー殿が後続で良かったのか？」
と関羽は不安がるが、無理もない。
これから戦う相手は、自分たちが率いる軍の2倍、苦戦するのが目に見えているというのに、もっとも活躍できる人物が後方、それも補給や、後続からの伏兵に対処するための最も危険の少ない、かつ最も活躍できない場所にいるのだ。
「ふっ心配するな関羽殿。我が師は考えあって自ら後続に志願したのだ。それに後続への憂いがないのも事実だろ？要は前を見て突き進めということだ」
「お主とアーチャー殿の信頼ぶりには、うらやましい限りだ」
と関羽がため息をついた。
「嫉妬でもしたのか？」

「言っていろ。・・・そろそろだ」

と関羽の表情が変った。

「ああ、全軍停止！！」

趙雲の号令とともに一斉に歩兵が足を止め整列した。

「これより我らは、黄巾に占領された村を取り戻すため、一斉に突撃を仕掛ける」

「相手は我々より遥かに多い。だが、臆するな！我らには天の御使いの加護がある。負ける事などあり得ん」

「さらに我が軍には必勝の策がある。全軍合図の音を聞き洩らすな！鋒矢の陣を作り、そのまま抜刀せよ！」

一斉に敵軍に向かい矢印のように隊を組むと、一斉に抜刀をした。

「「全軍ーーー突撃！！！」」

「「「おおーーー！！！」」」

地響きを上げ、一斉に村に向かい突撃を開始した。

「頭！公孫賛軍が攻めてきやした！」

と家の中で横たわっていた人物に話しかけた。

「今あたいは眠いんだよ。あんたらだけで倒せるだろ。頑張んな」

「そんなこと言わないで下さいよ」

と横たわっている頭を揺らすが、起き上がる気配はない。

「ああ、わかった。もし、強い奴がいたらあたいが出てやるよ。それまでお前が指揮しな」

「・・・わかりましたよ。次呼んだ時はちゃんと来てくださいよ」

と男は家の中からでたが、横たわっていた頭はゆっくりと体を起こした。

「なんだ？この、誰かに見られている感じは！？」

と冷や汗を流した。

「全員、決して一対一になるな！一人に対し二人で当たれ！」

と関羽が次々と敵をいなしながら、周りにいる味方の兵の様子を見ていた。

「一人で当たっているものを見た者は必ず助けろ！そうすれば次は自分を救ってくれるはずだ！」

と趙雲も同じように言ってはいたが、やはり数の暴力には勝てるわけがなかった。

開戦時、さすがは攻撃に長けた陣であり、敵の対処の遅れからか、２００まではいとも簡単に減らすことが出来た。

しかし、この陣は深く切り込んだ跡が問題なのだ。

後ろからの攻撃に弱いこの陣は討ち洩らした敵の残党が後ろから攻め込んできた瞬間、陣形が狂い、現在のような混戦状態になってしまう。

すでに隊は３００ほどに減っていた。

「まずいぞ、兵の士気が下がり始めている。銅鑼の音も未だならないし・・・一度退くべきではないか？」

と関羽が不安そうにしたが、趙雲は後ろを向こうとはしなかった。

「ーーー待っていましたよ。アーチャー殿」

と笑った瞬間、その戦場に紅い閃光が着弾した。

「やはり、厳しいか」

とアーチャーは、一人単独で道を外れていた。

関羽たちが来たおかげで、兵を率いる必要がなくなったアーチャーは、一人山の中腹にいた。

実はこの付近、山脈が多く、鷹の目を持つ彼にとって遠距離攻撃は得意中の得意なのだ。

その射程距離は人の領域を超え、町一つ分の距離は優に狙える。

「地図を見たときに、程立に事前に説明は受けていたが、山を越えるのに少々時間がかかってしまった。

だが、これ以上の被害は簡単には出させんよ」

魔力をじっくりと込め、確実に着弾するように狙いを定め、紅き閃光は放たれた。

「ーーーなっなんなのだ!?昼間から流れ星が降ってきたのだ!」

と張飛はアーチャーの放った矢の軌跡を見ながら、騒いでいた。

「前方で爆発音・・・あれはもしや!?」

「はい。おそらくお兄さんが放った矢でしょう・・・相変わらず常識はずれな技ですが、これは黄巾党にとっては、天から降ってくる災厄、天罰と見れてもおかしくはありませんね」

と次々と通る紅き閃光を程立は眺めていた。

「これでは策が成功しませんよ！？」

「おいおい、策の立案者が策を潰すわけがねぇだろうが」

と宝けいが突然喋り出した。

「風、そんなことくらい私にもわかっているわよ。ただこのままで、敵を壊滅できそうな気もしなくはないと、思ってしまっただけよ」

「まぁ、お兄さんが規格外の力を持ってしまっていますからね・・・。私たちが活躍する必要もなくなるかもしれませんね」

と程立の言葉を聞いた張飛は、とっさに

「そんなのダメなのだ！よーし、みんな！今から突撃なのだ！」

と張飛の号令のもと、騎馬隊が一斉に駆け出した。

紅き閃光は着弾した瞬間、数十人を巻き込みながら、爆発を繰り返していた。

まるで、流星群の様に次から次へと降り注ぐ、閃光は確実に黄巾党の士気を下げていた。

その時だった。

「何なんだいこれは！？」とツインテールの麦わら帽をかぶった少女が、獲物を持ちながら民家から出てきたのだ。

「頭！？起きたんですかい！」

「状況を説明しな！何でこんなことになってる！」

「それが、軍の奴らを押し返しそうになった瞬間に、いきなり次から次へと降ってきたんです」

「それじゃあ、これは敵の攻撃で間違いないね」

「は！？こんなこと出来るやつがいるんですかい？」

「そりゃーあたしだって知らないさ。でもわくわくしてきたー！」

と獲物を手に取りながら、前方を突き刺した。

「さぁ、行くよ！」

「行くってまさか！？」

「もちろん！全軍突撃だ！敵本陣を一気に落とす！！」

「お頭だ！お頭が目覚めたぞ！！」

と一人の黄巾党が声を上げた瞬間、全員の目に輝きが戻り始めた。

「なんだ!?急にこいつらの士気が戻ったぞ!?」

「そのお頭というのがよほど頼りになるのだろう・・・」

「ならば、我らの陣の方もそろそろ・・・」

その時だった、鐘のなる音とともに、張飛隊が突撃を仕掛けてきたのだ。

「突撃!粉砕!勝利なのだー!」

「趙雲殿!」

「ああ、全軍張飛隊と入れ替わり後退する!退け!」

「後は任せるぞ鈴々」

と関羽と趙雲は、一斉に軍をまとめ引き上げ始めた。

それを見た黄巾党は、突撃を開始。

張飛隊と正面衝突を繰り広げた。

「数じゃこっちの方が上だ!!押しつぶすよ!!」

流星のように降り注いだ矢もいつの間にか止み、完全に好機と見た頭は強行突破を仕掛けた。

「オラオラ！死にたくなきゃ、あたいの前に立つんじゃないよ！」
手にした獲物、巨大な鉈を持ちながら、一瞬で三人を切り捨てた。
「つまんないねぇ～誰かあたいと一騎打ち出来るやつはいないのかい！？」
「それなら、鈴々が相手をするのだ！」
と自分の身長よりもはるかに長い、蛇矛を持った張飛が、現れた。
「おチビには用はないんだよ。怪我しないうちに消えな！」
「鈴々はチビじゃないのだ！怪我するのはお前の方だから大丈夫なのだ」
「へっ！！あたいが怪我する！？チビにしちゃ面白い冗談だ」
「冗談じゃないもんねぇ～。行くぞ～」
と張飛が蛇矛振り下ろした瞬間、頭の前で地面が砕け散った。
「なっ！なんていう馬鹿力だ！」
「む～外したのだ。もう一発行くのだ！」と蛇矛を横に構え一閃した。
ガキンという金属音とともに、頭の鉈と蛇矛から火花が飛び散った。
「ちっ！・・・こいつは驚いたよ。あんた名前は！？」

「鈴々は、張飛なのだ！」

「張飛・・・あんたは確かに強い。ならこっからはあたいも本気で行かせてもらうよ」

そのとたん、まるで空気が凍ったかのように一瞬にして空気が冷たくなった。

「あたいの名は周倉！この名を聞いた敵をあたいはすべて倒してきた。さぁ！始めようか」

と周倉と名乗った少女のオレンジ色の髪が一瞬にして逆立った瞬間、一瞬にして鉈を振り下ろした。

それを受けてはいけないと直感で悟った張飛が回避した瞬間、振り下ろされた鉈は一瞬にして地面を陥没させた。

奪還戦（後書き）

「まさか！」

とアーチャーは嫌な予感がしたため、戦場へと向かっていた。

相手の兵力は既に４割ほど減らしていたため、兵力差は少なくなっていた。

だがいま問題なのは、張飛が戦っていた相手の使った力だった。

「あれは、魔力だ。しかもただ単に力を上げる代物。あの張飛ですら、強化された肉体には勝てん。これはまずいな」とアーチャーは全速力で荒野をかけた。

「どうした趙雲殿！？」

と関羽と撤退していた趙雲の足が急にとまったのを見た関羽は

「早くしなければ、策が完成しませんよ？」

と趙雲に訴えたのだが

「なっまさか！いやそんなはずは・・・関羽殿、貴殿私の隊も率いてくれ」

「なっなにを言っている！？」

「私の勘違いならいいと思ったのだが、どうやら違うようだ」

とアーチャーの姿を確認した瞬間、趙雲は

「では、頼んだ」

とアーチャーと同じように張飛の元へと向かった。

趙子龍の成長（前書き）

今回はＦａｔｅの方が強い話になっています。
そして今回から恋姫の世界に亀裂が入り始めます。
お楽しみに

趙子龍の成長

時間は少し遡り、劉備たちがくる数日前

「やはり君は筋がいい。自分でもわかるのでは無いか？」

と中庭で座禅を組む趙雲にアーチャーはじっと見つめながら、魔力の流れを確認していた。

この世界に入ってから、アーチャーには二つの異変に気がついていた。

一つは、完全な過去の世界に遡ったわけではないということ。

この時代ではありえない、メガネや程立がよく食べているペロペロキャンディーなどこの時代よりも後に出来たはずのものが多数存在するのだ。

そして二つ目が異常にマナが濃いということ。

体内の魔術回路を使用する魔術師にとっては、本来そこまで気にする必要はないのだが、この世界のマナはなにかと魔術に反応しやすく、一段階レベルが自動的に上がってしまうのだ。

だからこそ、目の前にいる趙雲は、本来ならばありえないペースで腕をあげていた。

「ふぅ…なんとか魔力を体の一部分に集めて見ましたが、やはりまだ実践できるくらいではありませんな」

と趙雲は起き上がった。

「それを簡単に出来れば苦労はしない。そこが君と魔術師の違いさ。だが、そろそろ実践でも使えるものも覚えたい時期でもあるだろう」

「えぇ、せっかく自分に魔術の才能があるとわかったのですから」

と趙雲は笑った。

「ならばまずは私の魔力を感じ取れるようになればいい」

「アーチャー殿の魔力をですか？」

「ああ、私の魔力を感じ取ることができるようになれば、ある程度の魔力の流れみたいなものが掴めるようになるだろう。それを身につけていれば、何かと私と共闘している場合は便利なのだよ」

しかし趙雲は首をかしげ、いまいちわかっていない素振りを見せた。

「たとえば君が前に出ているとしよう。その時は私が後方から弓を撃つことになる。その時，真後ろから飛んできた矢を確実に反応できなければ、君が受けることになってしまう。だが、私の魔力を感じ取れるようになれば、回避は出来るだろう。私も君を狙って撃つわけではないのでな」

確かにアーチャーの放つ矢は強すぎて、この時代の者ならばあまり

反応できないのだ。

基本的に矢は上に向かって放つものであり、直線状に飛んでくることはまずない。

アーチャーの場合は、遠距離にもかかわらず、一直線に飛んでくるのだ。

上に向かって放たれたものとは、速さと威力がまるで違う。

この矢をしかも真後ろから回避しろというのだ、常識に考えて無理があるだろう。

だからこその非常識、魔力を感じ取り危険を事前予測しなければならない。

そういった意味では、アーチャーの言っていることは間違いではなかった。

「ならば、今日から訓練に取り組みましょう。次の戦では、少々使ってみたいので」

と趙雲はやる気満々で、笑った。

そして趙雲はまだ完全ではないが、ある程度、アーチャーの魔力の

流れはわかるようになっていた。
そして今、張飛と対峙している者は、自分が感じ取れるほどの魔力を発しているのだ。
「急がねば！」
と趙雲は、単身で敵軍に突っ込んだ。
それと同時にアーチャーもまた少し距離を置いたところから、突っ込んでいた。

「にゃにゃにゃ！ものすごい馬鹿力なのだ」
と張飛は目の前の地面を見ながら唖然としていた。
「よく受けなかったね！こりゃ面白い、本気を出して正解だったよ」
と髪を逆立てながら周倉は、自らの獲物を真横に構えた。
「お次はこれだよ！」
まるでバットのフルスイングのように繰り出された鉈は、一直線に張飛めがけ一閃した。
しかし、張飛も受けてはいけないことを知っているため回避したのだったが

「なっ！」

自分の前を鉈が通過した瞬間、まるで殴られたかのように腹部が圧迫され吹き飛んだ。

「二度目が同じ手な訳ないだろう？あたいの横一線は防がないと意味がないんだよ。まぁ、ぶっ飛んだ今じゃ意味がないだろうがね」

ニヤニヤと笑う周倉だったが、その顔は一瞬にして変わった。

「いててて・・・あんな攻撃なんてなのだ！こうなったら鈴々も本気出しちゃうもんね～！」

と蛇矛を構えた瞬間、張飛の威圧がさらに増したことに周倉は気が付いていた。

「行くぞー！どっかーん」

と頭上から降り下された蛇矛は、周倉の獲物を一瞬にして弾くと、そのまま振り上げられた。

「二連撃とは、なかなかやるじゃないか！」

「まだまだなのだ！うりゃりゃりゃりゃー！！」

とまるで蛇矛を槍のように無数の突きを繰り出した。

実際鉈で槍の攻撃を防ぐのはかなり難しい。

まっすぐ飛んできたものを払う以外の方法をとると、ちゃんとした武器ではない鉈では限界が来てしまう。

とくに相手の攻撃は一撃が全て必殺の威力だ。

破壊されるのは時間の問題だった。

「ちっ！・・・面倒なんだよ！！」

と一瞬蛇矛が下がった瞬間に、周倉が鉈を振り上げ突っ込んだ。

しかし、それは隙ではない。

隙があればとっくに張飛は殺られていただろう。

だからこそ周倉が切り込む前に、その足めがけ蛇棒がうなりを上げた。

「っ！けど、狙いが悪かったね！終わりだよ！」

かろうじて足を切り裂かれたが、動かなくてもすでに射程範囲内だった鉈は、張飛めがけ一瞬にして、振り下ろされた。

「張飛取ったぞ！」

と歓喜の声を周倉は上げたが、次の瞬間、一瞬にして顔が硬直した。

「ーーーまただ。何処で見て居やがる！出てきやがれ！」

と死を目前にした張飛をよそに、周倉は怒りを込めながら、どなり散らした。

その大声は一瞬戦場に沈黙の時間を作り、砂埃が止んだ。

その瞬間だった。

周倉の間横で火花が散り、一瞬にして皆唖然とした顔をしたのだ。

「お前か！？」

「何のことだか知らぬが、張飛殿の命、ここで散らすのには惜しいのでな。趙子竜がお相手いたそう」

「何だ・・・あんたじゃ役不足なんだよ！！」

と一瞬にして振り下ろされたは趙雲のわずかな反応の遅れを突破し弾き飛ばした。

「ちっ！ーーーやはり、まだ勝てぬのか・・・」

「そうだな、君にはまだ早い」

と不敵に笑った声がした瞬間に、趙雲の顔は笑みに変わった。

「真打登場ですかな？」

「いやいや、君の登場で十分周りの賊は、肝を冷やしただろうさ。

私はその後始末をするだけだよ」
と笑ったアーチャーをよそに、周倉は不敵な笑みを浮かべた。
「あぁ・・・あんたか・・・あんたが私を震えさせるほどの力を持っているやつだね！さぁ！ヤロウカ！！」
と言葉がおかしくなった瞬間、先ほどとはあり得ない速度で鉈を振り下ろした。
「なっ！馬鹿な！これはまるで」
一瞬にして４連激をアーチャーに放った周倉は、まるで獣のごとくアーチャーを見つめていた。
「星！張飛を連れて逃げろ！！死ぬぞ！」
と必死に抵抗するが、あろうことか自分の投影していた剣にひびが入り始めていた。
関羽でさえ、全身全霊を込めた一撃でやっと破壊出来た剣を、目の前の女は連続で次々と破壊していくのだ。
その姿はまるで、バーサーカーの様だった。
「張飛殿・・・立てるか？」
「・・・立てるのだ。それよりもあの兄ちゃん大丈夫なのか？」

「分からん・・・。だが、この結果でこの戦況は一気に変わる」
完全に戦場は一時中断され、全員が二人の戦いを見ていた。
その誰もが感じていたのだ。
あの強者（バケモノ）の次の相手が自分になるのかもしれないと。

「くっ、私の武器もそう大安売りするものではないのだがね」
と次々と干将・莫邪が破壊され、再度投影するという状況が続いていた。
実際、完全にパワーに関しては相手の方が上だ。
聖杯戦争でのあの巨人との闘いがなければ、すでにこの身に斬撃が入っていた。
そしてこの身は既に一度の敗北を犯している。
だが二度目を作るつもりはない。
体は　剣で　出来ている
「―――Ｉ ａｍ ｔｈｅ ｂｏｎｅ ｏｆ ｍｙ ｓｗｏｒｄ．」
イメージするのは、伝説の中に存在する剣。

使い慣れたものではないが、相手のあの攻撃に対処できる剣は限られてしまう。

かの騎士王が手にした黄金の剣の剣の贋作。

その名は、約束（エクスカリバー）された勝利の剣。

戦場に現れた黄金の剣を見たものは、その美しさに息をのんだ。

「なんて見事な剣だ！あれほどの剣、見たことがない」

「すごーく光ってるのだ！あれがお兄ちゃんの剣なのか？」

「いや、あれを使っているのを見たのは私も初めてだ。だが、あれに勝つことができる剣を選んだのだろう。よほどすごい魔力を秘めているに違いないな」

と趙雲と張飛は、少し離れているところから二人の戦いを見ていた。

「やはり、私の手に馴染みはしないか」

と2、3撃放ったアーチャーだったが、やはり普段使っている剣とは馴染み方や戦闘のスタイルがまるで違っていた。

「だが、この剣に敗北は似合わないだろう。そして私も君に負けるつもりはないのでね」

と目の前で殺気立つ周倉に向かって殺気を放った。

「行くぞ、狂戦士（バーサーカー）！覚悟は十分か？」

戦闘に入った両者の状態はまさに最高の状態で拮抗していた。

お互い両手持ちのため、まるで鏡に映る自分の様に相手の武器を破壊しようとしていた。

だが、ただの鉈ではかの騎士王が持っていた伝説の剣に勝てるわけがなかった。

数十回と撃ち合うごとに亀裂が入り始めていた。

その時だった。

「っ！あたいは一体！？」

と周倉が狂気から解放されたのだ。

「狂気がなくなった？もしや・・・おい！今すぐ武器を捨てろ！」

「！？何言ってんだい？武器がなきゃ戦えないじゃないか！？」

「いいから捨てろと言っている。戦いたいのであれば、私が別の武器を渡してやる。だが、その武器は危険だ、今すぐ捨てろ！」

と険しい顔をしていたアーチャーに周倉は少し考えた後武器を地面へと捨てた。

その瞬間だった。

「くくく・・・見事にバレましたか。いやいや、これはこれで楽しむ方法もありますが」

と剣が突然喋り出したのだ。

「誰だ貴様は！？」

「これはこれは失礼。ですが今から死ぬ人にわざわざ名前を言う必要もないでしょう。さぁ、目覚めなさい。天秤の守り手よ！」

と剣が発した言葉とともに召喚陣が形成された。

そこから現れたのは明らかに見覚えがあった。

そう見忘れるはずがない。

自分はあの化け物と一度戦ったことがあるのだ。

そこには本物のバーサーカー、冬木に現れたヘラクレスが立っていた。

「何だあれは？あたいはあんなのを持っていたのか！？」

と周倉は唖然としながら、目の前の巨体を見ていた。

「ーーーその姿、お前はアーチャーか？」と赤い瞳で巨人は目の前の男を見ていた。

「喋っているところをみると、どうやらバーサーカーになっているわけではないな？」

「そうだ・・・と言いたいところなのだがそうでもないらしい。私自身、君と戦うつもりはないのだが、この呪縛にどうやらあがらう事は出来ないようだ」

と新たに真下から現れた巨大な黒い渦に、バーサーカーの体が徐々に飲まれっていった。

「また迷惑をかける・・・すまないな」

と言い残し完全に飲まれた直後、そこに立っていたのは全身黒く染め上げられた狂戦士だった。

趙子龍の成長（後書き）

「何だあれは！？」

「なんか気持ち悪いのだ・・・」

と趙雲と張飛はいきなり現れた巨人が一瞬にして変化したことに驚いていた。

そしてその中でも趙雲は、先ほどから感じていた魔力の正体がアレのことだった事に気が付いていた。

「張飛殿、もう少し離れますぞ」

「これ以上離れたらよく分からないのだ」

「いや、この距離では危ない。おい！そこの黄巾党の部隊長か？今死にたくなければ、こっちに来い！」

「ふざけんな！あたいはアイツに負ける気はないよ」

しかしアーチャーは鋭い目で周倉を睨みつけた。

「星の言うとおりにしたまえ、今の君ではあいつには勝てん」

「ふん。あんたならあれに勝てるって言うんだろ！？だったら、あたいにだってやれるさ！」

「いや、正直あれに勝てる気はほとんどせん。少ない時間かも知れ

んが、私が時間を稼ぐ。早く逃げるんだ」
と本気で言っているアーチャーに、周倉は唖然としながら。
「・・・分かったよ。だけど死ぬんじゃないよ。あんたは私が殺すんだからね」
と後ろを向いた。
「ふっ・・・。さぁ、こちらは準備ができたが！？」
「■■■■■■ー！！」
あたりにいた黄巾党を一瞬にして竦ませるほどの雄たけびを上げた瞬間に、その巨人の姿は消えた。

「何か嫌な予感がする」
と趙雲隊を引き連れて後退していた関羽隊は作戦地点に到達すると、妙な違和感を感じていた。
「しかし、策を無駄にするわけにはいかない。・・・だが、気になる」
と悩んでいると
「何悩んでるの？」

といきなり声をかけられた。

「なっ！何者だ！？」

「私！？私はね・・・」

その時すでにアーチャーたちの知らない別部隊が動いていた。

英雄の力（前書き）

またオリキャラの登場です。
今回はかなりチートなキャラですが、あの人に化け物とまで言わせるほどですからこれくらいかなと・・・
後悔はしない！！

英雄の力

「速い！」

と趙雲が声をあげた時点で、既にバーサーカーは、アーチャーに切り掛かっていた。

手に持つ巨大な斧のような剣は、一降りするだけで、まるで台風のように衝撃波を生み出した。

「■■■■」

雄叫びとともに連続して振りかざされる剣は、すべてをえぐり、すべてを叩き潰す。

それを未だ、対応できているアーチャーの技量は周りから見れば異常だった。

だが、二人の状態の差が裏目に出ていた。

アーチャーはすでに英霊ではない。

この世界に来た時にすでに受肉し、新たな命を持っている。

それに代わって相手は完全に呼び出されたもの。

体力こそ減りはするが供給者がいる限り、致命傷に至らなければ相手は戦闘を続行できる。

しかも厄介なことに、相手の状態はまさに聖杯戦争の時と同様なのだ。

おそらく臆した黄巾党の弓兵が、矢を放ったのだろう。

一直線目がけ巨人に攻撃が成立したのだ。

だが、その強靭な肉体はまるでハエでもとまったかのように、何の変化も見られなかった。

「十二の試練（ゴッド・ハンド）は健在というわけか・・・ならば！」

体は　剣で　出来ている

「ーーーＩ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ．」

イメージするのは深紅の槍。

光の皇子が手にした呪われた魔槍。

「バーサーカー、まずは一つ。貴様の一心臓（命）、貰い受けるぞ！」

その槍の名は

「ーーー刺し穿（ゲイ）つーーー死棘（ボルク）の槍！！」

放たれた槍は、バーサーカーの斧剣とぶつかり拮抗していたかに見えたが、その巨人の動きが鈍った瞬間、胸に一本の槍が突き刺さっ

ていた。

「なんと！あの状態から刺した！？」

「やったのだ！兄ちゃんの勝ちなのだ！」

ととりあえずの勝利に趙雲と張飛は歓喜の声を上げた。

だが未だにアーチャーは戦闘態勢を崩してはいなかった。

それが不思議でしょうがなかったのか、趙雲が少し近づいた瞬間に、状況は一変した。

「■■■ーー！！」

雄たけびとともにバーサーカーは、一瞬にしてアーチャーを吹き飛ばしたのだ。

「馬鹿な！心臓を貫いてまで、動くことができるのか！」

吹き飛ばされたアーチャーは、趙雲の近くの家屋に激突すると、砂煙を上げた。

「やれやれ、どうも私は何かに激突するのが宿命の様だな」

と皮肉を言うが、状態は既に万事休すだった。

最も確実に殺せて、最も魔力の少ない宝具。

それが刺し穿つ死棘の槍（ゲイボルク）の利点と言える。

しかし厄介なことに、投影した物体が剣ではないため、必要以上に魔力を消費していた。

「アーチャー殿、無事か！？」

「ああ、身体に問題はない。さて、どうしたものかな」

「一つお尋ねしたい。あれは不死の魔術でもかかっているのですかな！？」

「いや、あれは不死ではないさ。」

「ですが、未だに立っているのは理解しがたいのですが？」

「あいつには十二の試練（ゴット・ハンド）という宝具がある。その効果が、１１回までの蘇生だ」

「１１回！！あれを後１１回殺さなければ倒せないというのですか！？」

「いや、残り１２回だ、恐らくな・・・だが手を出そうとはするな。君たちの攻撃ではあいつには効き目がない」

「１２回？効き目がない！？それはどういう・・・」

「君も見たかもしれないが、矢が放たれてアレに当たっただろう？だが、アレにとってはダメージ判定すらされていない。それがゴットハンドの厄介な能力の一つでね、私が持っている特殊な武器の中

で一級品を使わなければアレにダメージを与える事が出来んのだよ。実際さっきの槍は一級品ではあるが私自身完全に使いこなせるわけではないのでね、殺すにまで到っていないのさ。だから、君たちがアレと戦うことは不可能というわけだ」

実際ゲイボルクは刺さっているのではなく、バーサーカーの肉体を貫こうと、今も尚胸の手前で止まっていた。

体は　剣で　出来ている

「ーーーＩ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ．」

アーチャーは新たに弓を取り出し、螺旋剣を投影した。

「■■■■ー！！」

と目の前に巨人は胸の前で膠着していた槍を掴むと投げ捨て、一直線にアーチャーに向かって駆け出していた。

「早く離れろ！巻き沿いを食らいたいのか！」

と殺気を込めながら趙雲を遠ざけ、魔力を集中させた。

「ーーー偽・螺旋剣（カラドボルグ）」

一直線に飛んでくるバーサーカーに直撃し、爆風を生み出した。

しかし

「馬鹿な！あれを退けたのか！？」

趙雲の唖然とともにすでにバーサーカーはアーチャーに目の前まで到達していた。

だが、その身体には大穴をあけ、一つの命を減らしていた。

「命と引き換えに突撃するとは、ふっ私も捨てたものではないらしい」

と皮肉を言いながら、アーチャーは既に夫婦剣を投影し、バーサーカーの剣を防いでいた。

その時だった。

「今の話、相違ないのか？」

と趙雲の横で長髪の女性が、獲物を手にしながら、話しかけてきた。

「！？貴様何者だ！」

「控えろ下郎！私はあれを倒すのにそれだけの力がいるかと聞いているのだ！」

と一瞬で趙雲を震え上がらせた声量は、戦場に新たな化け物を呼び寄せていた事に気がついた。

「まさか！そんなはずはねぇ！」

「なんであいつがここに！」

など、黄巾党の兵がざわつき始めた瞬間、状況は一変した。

「大殿！何をなさるつもりじゃ！」

と白髪の女性が慌てて止めに入ったがもう遅かった。

バーサーカーの射程距離内に入った女に容赦ない、一撃が繰り出されたのだ。

その瞬間一斉に皆唖然としていた。

まさに一瞬の出来事だった。

宙に飛んだ一つの首は、そこにいる誰もが地面に落ちるまでその軌跡をたどっていた。

「な～んだ、案外もろいのね」

と笑いながら自らの獲物を肩に乗せ、アーチャーに訪ねた。

「これで一回は殺せたのよね？」

それを見たアーチャーはただ呆然としていた。

振り下ろされたはずの斧剣は、一瞬にしてその進行を相手の獲物によって防がれ、さらに迷うことなく一直線に首めがけ飛んだ少女は、一瞬にして獲物を振りぬくと、何事もなかったかのように着地したのだ。

その速さはまさにランサーとほぼ互角だった。

「ああ、残り１０回だ」

「それまた大変ね～。同じ手は効かないんでしょ！？」

「なぜわかった！？」

「ん～・・・直感♪？」

と笑いながら手にした獲物を構えると、横から飛んできた剣を防いだ。

「大殿！！」

「大丈夫よ、祭。でも、力で私と互角なんてなかなかやるじゃない。敵にしとくには勿体ないわね」

「君の力の方が異常なんだが・・・」

「そう？あなたなら分かるんじゃない？私と同じ力持っているみたいだし」

「成程・・・ならば、もう一度くらいあれを殺せるかね？」

「勿論♪。ただ、後は無理よ。そこだけは覚えておいてね」

と女性は剣をはじき返した瞬間に、バーサーカーの目の前から消えた。

「了解した。ならば君が全力を出せるようにするとしよう」

体は　剣で　出来ている

「―――Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ．」

イメージするのは最強の騎士と歌われた男の剣。

聖剣から魔剣へと姿を変えた、泉の剣。

その名は無毀なる湖光（アロンダイト）

多少魔力は損失するが、今最も効率のいい剣がこのアロンダイトだ。

この剣の特性は、ステータスを全て上げ、龍殺しの属性攻撃を繰り出すことができる代物。

バーサーカーには龍殺しは効果がないが、贋作でもステータスのアップはかなり重宝する。

筋力Ｄのアーチャーが Ａ＋のバーサーカーの攻撃をいなすだけでも、相当の負担がかかるのだ。

「さて、バーサーカー。悪いがまずはその斧剣、とらせてもらうぞ」

まるでバットのスイングのように一直線でバーサーカーではなく、獲物に向かい振り回された剣は、空を斬りながら激しく衝突した。

当然のように、それは跳ね返されるのだが、いくら斧剣でも相手が

悪い。

決して刃こぼれしないと言われた剣が、完全な宝具ではないバーサーカーの斧剣が勝てるはずもなかった。

完全にひびが入った剣は、さらに真横から加えられた新たなアロンダイトの斬撃により、砕け散った。

だが、斧剣を持っていようがいまいが、バーサーカーの強さに歴然とした変化があるわけがなかった。

だが、今回はそれが狙い目だ。

「残念でした。本命はこっちなのよ」

と姿を消した女性はすでにバーサーカーの背後に回り、剣を突き刺していた。

だが、ゴットハンドの能力で、致命傷を与えることはできない。

しかし、その女性は驚くこともなく、手に魔力を込めていた。

「悪いがその前に一つもらっていくぞ」と気がそれたバーサーカーに容赦ない斬撃が繰り出された。

通常のアーチャーならば、完全に防がれていたであろう斬撃は、アロンダイトの効果により、速さと威力が上がっていたため、紙一重で首を切り裂いた。

だが、それでも1回殺すのが限度だった。
真の使い手であろうランスロットならば数回殺しているはずだ。
「やはり、真に迫るものでなくては駄目か・・・」
とアーチャーがバーサーカーに背を向けた瞬間、再生が開始された。
だが、再生も万能というわけではない。
再生する瞬間、バーサーカーの体は一時的に停止する。
そこに完全に魔力のたまった一撃が繰り出された。
「さぁ、南海覇王の威力とくと味わいなさい！」
刺さった切っ先から膨大な魔力があふれた瞬間、バーサーカーの内部から、小さな爆発が起きた。
「なんて出鱈目な・・・だが南海覇王ということは・・・」
「それで、後は何をすればいい！？天の御使いさん？」
と役目を終えた女性は、アーチャーの近くによると、ニヤニヤしながら尋ねた。
「まさか、ここで孫文台を見るとは思わなかった。まして魔術師だったとはね」
「それを言うなら私の方だってそうよ。まさか、私と同じ力を天の御使いが持っているなんて思わないもの」

と孫堅は笑った。

「残り8回・・・後1回アレを殺すことができれば、私はアレを一瞬にして7回殺す術を持っているのだが・・・」

「それ本当!?なら、あと1回殺せればいいのね。あなたの武器で後1回殺せそうな物はあるの!?」

「あるにはあるのだが、それを使った後となると、私自身が動けるかどうかはわからん」

「なら、それを先にやってから考えましょうか」

「私は、なにもできないのか・・・」

いきなり出てきた女性が見事にアレを二回倒し、すでにアーチャーとの息はピッタリであるのを、趙雲は唖然としながら、そして自分の力の無さに嘆きながら見ていた。

「私にも何か、特別な武器があれば・・・あれは！」
戦場に横たわる一本の槍を見た趙雲はそれに向かって駆け出した。
趙雲は既に直感で動いていた。
アレに勝つには、今の自分だけの力では無理だ。
ならば別の方法で戦えばいいだけのこと。
そして趙雲は、その槍を握った瞬間に表情が固まった。

イメージするのは岩に突き刺さった剣。
エクスカリバーを手にすることになった少女の運命を決めた剣
その名は選定剣、勝利（カリバーン）すべき剣
「ずいぶんきれいな剣ね。でもそれで、本当に7回も殺せるの？」
「ああ、すでに私が若い時に実証済みでね。保証はする」

「ふ～ん。なら、私が援護するから、頼んだわよ」
と孫堅はバーサーカーに切り込んだ。
しかし、バーサーカーには分かっていたのだろう。
あの剣を食らえば自分が窮地に落ちることを。
だからこそ、バーサーカーは孫堅が近づく前に、自らの斧剣を地面へと叩きつけた。
その砕けた大地の破片は、孫堅にとっては厄介な代物で、回避に専念するしかない。
「ちっ！さすがに考えてくるか・・・」
その一瞬の気持ちの揺らぎが裏目に出た。
「■■■■ー！！」
全身全霊を込めた一撃が孫堅の間横に突如現れたのだ。
とっさに反応するも、それは防御でしかなく、その力に抵抗することはできない。
「しまっ！」
気付いた時にはもう遅かった。

孫堅は家屋3件ぶんを貫き、吹き飛ばされた。

「万事休すか・・・」

アーチャーの持つ剣で、単身でアレに致命傷を与えることは不可能に近い。

使いなれた夫婦剣だからこそ、完全防御ができ、一撃必殺の宝具を繰り出していたのが現状だ。

しかし、この剣は相手を突き刺さなければ効果を発揮しない。

だが諦めるわけにはいかなかった。

「やれるとこまでやるしか無かろう。それが、私の目指した道の一つになるのだから」

諦めればこの場にいるすべてのものが、この巨人の餌食になるのは目に見えている。

だからこそ、正義の味方であるアーチャーにとってそれは完全に回避しなければならないものだ。

「■■■■ー！！」

「ハアアァァ！！」

ガキンという火花とともに、両者は獲物を振り下ろした瞬間だった。

「ーーーー突き穿つーーーーー死翔の槍！！」

一直線に飛んできた槍は一瞬にしてバーサーカーの肉体を貫いた。

「はぁ・・・はぁ・・・どうだ！化け物め！！」

と遠くで趙雲がニヤリと笑いながら倒れこんだ。

「まさか・・・いや、良くやった星。これで私の勝ちだ！」

ゲイボルクを食らった反動で身体の機能が低下しているバーサーカーに容赦なく剣を突き刺した。

英雄の力（後書き）

「・・・よもや、またその剣に敗れるとはな・・・」

「私ですら、数十分の間に君を倒せるとは思ってもいなかった。私の幸運は低いはずなのだがね。どうやら今回は私の方が運があったらしい」

とアーチャーは笑いながら剣の柄を離した。

「一時だが、私の姉を守ってくれたことを感謝する」

とバーサーカーの前に手を差し出した。

それを見たバーサーカーは笑いながら握り返し

「なに、私の好きでやっていたことだ。感謝されるようなことではない」

「気をつけろアーチャー。世界は君を殺すだろう」

と言い残し、巨人は消えた。

大徳の理想（前書き）

オリキャラ紹介
周倉
史実では架空の人物とされ、関羽に惚れ込んだ武将。

この作品の周倉
性が周、名を倉、字は無し
真名を水香（みずか）
身長１７３ｃｍ
体重５３ｋｇ
髪は長髪で、色は夕焼けの様なオレンジ。髪型はツインテール。
瞳は澄んだブルー。
服装は常に麦わら帽子をかぶり、上着は黒のランニングの上に赤い半そでの上着を羽織っており、下は白のスパッツに、腰のあたりの両脇から稲妻柄の黒の布を垂らしている。
魔力を使用すると髪が逆立ち（その時はツインテールではなく、ただの長髪）、オレンジ色の髪は燃え上がる炎のように変化する。
その祭、麦わら帽子は外している。

大徳の理想

「なんとかなったな…」

とアーチャーは自らの身体を調べ、異常が無いのを調べると、趙雲の元に駆け寄った。

「どうやら無事のようだな」

「…えぇ、なんとか。しかし、さっきの槍に大半の魔力と気力を持っていかれたので少々、動くことは出来ませんが」

「ならば、心配無い。君は気に入らないかもしれないが、私が運ぶので安心したまえ」

「えっあの…」

と戸惑う趙雲をよそに、アーチャーは趙雲を抱き上げた。

だが、一つだけ問題があった。

「何処へ行くつもりだ！」

と一人の黄巾党がアーチャーに向かって、剣を突き出したのだ。

「ーーーーふむ、そういえばまだ戦いの途中だったな。だが、私の出る幕はもう無いらしいな」

とニヤリと笑ったアーチャーに続くように、その眼先では戯志才が、部隊を展開していた。

「全軍整列、一斉射撃の構えのまま、制止！」

黄巾党がいたはずの街から、すでに弓を構えた兵たちが命令を待ったまま制止していた。

「全軍、一斉に構えてください。まだ放ってはだめですよ。現状維持です」

とその反対の方向では、程立が同じように部隊を展開させた。

要は弓兵の挟み撃ちである。

「なんで、俺たちのいた場所に公孫賛軍がいるんだよ！」

「まずいじゃねえか！完全に挟まれてるぞ！」

と黄巾党が混乱し始めるのは目に見えていた。

「それで、まだやるのかね？」

とアーチャーの目線は麦わら帽子をかぶりなおした周倉に向けられた。

「いいや、正直分が悪いからね。あんたとの決着をつけたいところだけど、命を救われた身だ。今は大人しくするとするよ」

とやれやれといった感じで座り込んだ。

「なら、もう大丈夫よね」と孫堅に似た、一人の少女が伸びをしながら近づいてきた。

「君は！？似ているが孫堅ではないな・・・」

「あたしは孫策よ。孫堅の長女。ちなみに、私の軍で足りなかった部分の包囲網作っといてあげたから感謝しなさいよ」と妖艶な笑みを浮かべて笑っていた。

「それで、うちの鬼婆は？」

「鬼婆…まぁ、孫堅の事だろうが、そこにいるぞ」

と孫策の後ろを見ながら苦笑いを浮かべた。

「ずいぶんな言い分ね、雪蓮♪」

「あははは…やばっ！」

と孫策は逃げようとするが、孫堅は容赦なくその拳を頭上から振り落とした。

それから周倉軍は、後から来た公孫賛によって吸収される・・・はずだったのだが。

「全員軍に組み込みたいところなんだけど、さすがの私でもすぐには組み込めないよ」

と公孫賛は、残念そうにアーチャーに話した。

だが、無理もないだろう。

あれだけ膨大に義勇兵の募集をした事によって軍資金が減り、集まった人への給金や食糧による日々の消費。

そして初の黄巾党戦。

本来ならばここで得たいのは兵ではなく、兵糧や軍資金。

だが手に入ろうとしているのは全くの逆なのだ。

いくら領主と言えど、まだ発展させていない以上、赤字はすぐに目につく。

「それなら、簡単な方法が一つある」

と、戦場で知り合った孫堅が壁に寄りかかりながら

「現在、皇甫嵩将軍が張宝のいる陣を見つけてな、私のところに友軍を集めるよう連絡をしてきたのさ」

「成程、そこに行けば兵を養えるだけの財源は確保できるというこ

とか・・・だから君はあの場に姿を現したのか」

「まぁ、私自身が戦いたくなったというのもあるけどね」

とアハハと笑う孫堅を横にいる白髪の女性は呆れていた。

「ところで隣にいるのは君の部下か？」

「ああ、祭の事？」

「そういえばまだ名乗っていなかったのう。わしの性は黄、名は蓋、字は公覆、真名は祭じゃ」

「君が…というよりもなぜ真名を名乗った！？」

「なに、お主の武に惚れてしまったんじゃ。あんな化け物に勝ってしまう者に真名を預けないわけがない」

わははと公蓋は笑っていた。

「おいおい、孫堅はそれでいいのかね？」

「え！？ああ、いいんじゃない？祭が気に入ったんだから私が口出しするようなことでもないし」

と孫堅は物思いに老けこんだ後、いきなり

「なら私のことも天連って呼んでいいわよ」

とアハハと笑った。

「…なぜそうなる」

「まぁ、いいじゃない。私もあなたを気に入ったし。なんか長い付き合いになりそうだから」

「…」

「何でそこで黙り込むのよ。女の勘は結構当たるのよ」

「…はぁ～」

とアーチャーは大きなため息をついた。

「ならば周倉軍は、劉備が引き受けるといい」

とアーチャーが言い放つと、全員が驚愕した。

「考えての発言だと思われますが、さすがに私たちはまだ軍を持つほどの実力はありません」

と関羽が反論した。

「いや、公孫賛軍に君たちが入ると、さすがに統率は取れやすいが、一個小隊の力が弱くなる。まして今は乱世だ。多くの部下を持つことに、君たちは早く慣れた方がいい」

「でも本人たちの希望もありますし・・・」

「それは劉備の腕の見せ所だろ」

とアーチャーは笑いながら、劉備を見た。

劉備は顔を赤くし、あううとか言っていたが、すぐに目に力が入った。

「ーーー私は、戦いたくてこの道に進んだわけじゃないんです。私はついこの前までは、皆さんと同じような生活をしていました。藁を編んだり、商店で買い物をしたり。ーーーでも、今そんな当たり前の事ができなくなっている。それっておかしいと思いませんか？どうして街で人が殺されるんです？どうしてこんなにもたくさんの人が殺しあうんです？私はそんなことをこの大陸から無くしたい。でも、私ひとりの力だけじゃもうなにも出来ないんです。だからみんなの力を貸してほしい。今の王朝に不満があるからこそ、反発するのではなく、よりよい街を、世界を私たちで作りたいんです。お願いします。私に力を貸してください！」

と劉備は頭を下げた。

それを聞いたこの場にいた黄巾党の各部隊長は唖然としていた。

まさか、自分たちに対して頭を下げる人がいたとは思いもしなかったのだ。

今まで欲望のために殺しや略奪をやってきた。

そんな自分たちに対して、誠意をもって頭を下げる者がまだいたのだ。

「頭を上げなよ」

と周倉は声を出した。

「あんたに一つだけ聞く。目指すものは？」

「みんなが笑って暮らせる世界」

「その中にはあたいたちも入っていいと。そうあんたは言うんだね？殺しもやったし、略奪もした。そんな私たちがその中に入ってもいいっていうんだね？」

「もちろんです！」

「ーーー」

周倉はしばらく沈黙した後、机をたたいた。

「ーーー気に入った」

とボソッと呟いた後、大声で笑いながら

「気に入ったよ！劉備！あんたなら私の部下を任せられる」

「じゃあ！」

「だが、私にはもう仕えたい人が決まっているんだ。悪いがあんた

にはついてはいけない」

「そんな・・・」

「だけど、これは私のただのわがまま。それを私の部下にまで付き合わせることはない。だからあんたにに面倒を見て欲しいんだ。生憎、私が主と決めた人は、まだ軍を持つような人じゃないんでね。だからあんたに私の力の一部を受け取ってほしいんだ。もちろん少しの間だけど、私もこいつらがあんたに慣れるまでは面倒をみるつもりだよ。それでもいいかい？」

「周倉さん・・・。分かりました。あなたの力の一部、大切に受け取らせてもらいます」

と劉備と周倉は握手をした。

「では皇甫嵩将軍の援軍についてですが、誰が行くのか決めるのですよ」

と程立が中心に話を始めた。

「この戦いはこれからの黄巾党の動きを止めるのに重要な戦いになります。敵将である張宝は、張角の血の繋がりを持つ者。そのものを捕える、または倒すことにより我らは士気が上がり、敵には焦りと不安が生まれます。まして相手の大半は戦の訓練を受けてはいないただの兵が多数。それをまとめていた者が一人いなくなっただけですぐに崩れが見え始めます」

「そこを、全戦力を持って一気に攻めればある程度黄巾党を倒すことは出来るでしょう」

すると、孫堅軍側から一人、メガネをかけた黒い長髪の女性が手を上げた。

「はい、何でしょうか？」

と程立が無表情で手を上げた女性に発言権を与えた。

「孫堅軍軍師の一人、周瑜だ。それには一つ問題がある。張宝は現在難攻不落の下？城にいる。そして現在、その皇甫嵩将軍との連絡も途絶えた。これでどう攻めるというのだ？」

と鋭い目線で周瑜は、程立と戯志才を睨んだ。

だが、それに答えを出したのはアーチャーだった。

「一つは水攻めだな。城の近くにある川を氾濫させれば実現は可能だろう」

「確かにそれは実現可能な策だな。だが、今は初夏。氾濫させたところで長期戦に持ち込まれてしまえば、今度は我々が苦戦する」

「それがこの策の難だ。今が冬であれば効果は絶大だろうが、これから気温が高くなれば水は飲料ようにもなれば身体を冷やすのにも使える。あえて長期戦をして張角をおびき寄せるというのであればこの策を選ぶべきだな」

周瑜は表情を変えることなく、少し考えた後口を開いた。

「では、もう一つの策を聞かせてもらおうか？」

「もう一つと言っても、策と呼べるのかどうかはわからないが、私が門を開ける」

「それは何かしらの策で内部から開くとでもいうのか？」

「そんな可能性の低いことをする筈がないだろう？まして相手は大群をまとめられる器を持った者だ、生半可な策では看破されるのが落ちだ」

「ならばどうするつもりだ！」

と周瑜の鋭い眼光は周りの者が息を飲むほどの殺気が込められた。

だが、アーチャーだけは何もなかったかのように不敵に笑い

「なに、弓兵の取り柄と言えば射抜くことだけだ。ならば下？の門を射抜くだけさ」

大徳の理想（後書き）

「ふざけるな！」
という周瑜の発言を最後に、軍議はお開きになってしまった。

アーチャーの実力を未だ知らないものであれば、当然の反応なのは仕方がないが、軍議の内容で決まったことがなかったことを考えると、アーチャーは何となく悪いことをしてしまったと後悔をしていた。

結局下？に向かうことになったのは、アーチャー、劉備、関羽、周倉、趙雲、戯志才、程立となった。

公孫賛はさすがに、領内を離れるわけにはいかなかったが、張飛は公孫賛軍の戦力低下を防ぐために残った。

本来ならば行きたいと駄々をこねると関羽は思っていたらしいが、張飛曰く

「あのお兄ちゃんと一緒だと、鈴々が活躍できないのだ。なら公孫賛のお姉ちゃんと一緒にいた方が、面白そうなのだ」

とにゃはは と笑ったそうだ。

また、孫堅軍からも公孫賛の軍に陸遜と周泰を残してくれた。

戦力の偏りもあるだろうが、孫堅軍から人が出せてもらえたことは、アーチャーたちにとってはうれしい誤算だった。

そして一向は下?城へと出立した。

恩恵による成長（前書き）

オリキャラ紹介
孫堅
史実では海賊をたった一人で壊滅（一計を案じ、撤退させた）ことにより、頭角を現し、長沙の太守となった人物。

この作品の孫堅
性は孫、名が堅、字を文台
真名を天蓮
身長１７７ｃｍ
体重６５ｋｇ
髪はピンクの短髪
瞳はブルーでキリッとしている。
服装は、胸と腰に赤い布を巻きつけ、半透明な布を腕にまとわりつけている。
戦闘時には肩と膝に赤いプロテクターの様なものをつけている。
力は冬木のバーサーカーと同格（魔術により力を上げている）
ただし、速さはバーサーカーよりも上のため、まさに生ける化け物。

武器は南海覇王（孫家の栄光）
宝具であり、ランクはＡ
血の契約を交わしているため孫家の者にしか真の力は解放できない。
対人宝具であり、魔力はＤ＋以上で発動可能。
相手に突き刺した時、魔術回路（ない場合は神経）に結合し、回路（神経）ごと破壊する。
発動魔力は少ないが、相手に突き刺すことでしか効果がないため、なかなか使用できないのが難点。
ただし、剣自体にランクＤ程度の魔力破壊の印が組み込まれている

ため、魔術を薙ぎ払うことが可能。

恩恵による成長

ーーーおい、いつまで寝てるんだよ。

ひどく頭が痛い。

ーーーたく、人がせっかく力を分けてやったっていうのにこの様とは仕方ねえな。

そして頭に木霊するこの厭味な声。

ーーーでも俺が力を貸さなかったら、あいつはやられてたんだ。少しは感謝して欲しいぐらいだぜ。

目を瞑るとうっすらと見えるへらへらと笑う全身刺青の男。

趙雲は知らないが、アーチャーがこの世界にやってくるきっかけを作った男。

「おまえはいったい何者なんだ？」

ーーー俺か？世間じゃアンリマユって呼ばれてる男だよ。

話は星がゲイボルクを握った時に遡る。

槍を掴んだ瞬間に、世界が一瞬固まった。

――そんなに力が欲しいのか・・・趙子龍？

「何者かは知らないが、あの怪物に勝てる力が手に入るのか？」

――そりゃ、お前次第さ。けど、アイツを救うには今の力じゃ無理だぜ？

「ならば、一時でもいい！アーチャー殿を助けられるだけの力が欲しい！」

――ケケケ。ほら受け取りな！おまえは既に選ばれた！

趙雲の中で何かが爆発したように、一気に全身の魔力が暴発した。

――さぁ、その槍を解き放ってみな！今のあんたなら出来る筈だぜ！英雄、趙子龍さんよ！

言われるままに、槍を握りしめ魔力を高める。

その瞬間、まるでそれが今まで共に過ごしてきた槍のように、手に馴染んだ。

「成程、理解できた。後はこう使えばよいのだな」

全身の魔力を一気に爆発させ、槍を渾身の力を込めて解き放った。

これが、趙雲が手に入れた力。

聖杯の恩恵を受けた趙雲は、すでにサーヴァントと同格の力を持った。

（分かりやすくするため、サーヴァントデーターにしています）

趙雲

筋力Ｄ　魔力Ｃ　耐久Ｃ　幸運Ｂ　俊敏Ｂ＋　宝具Ａ

宝具「敵陣（長坂の単騎駆け）をかける龍の爪痕」

ランクＡ

長坂をかけた際、自らの獲物を失っても敵将の剣を奪い、たったの一騎で突破したことが由来の宝具。

効果は自らの目で使い方（複数の効果がある武器の場合は、その効果のどれか一つ）を目視した、または使い方もしくは武器の名前をあらかじめ知っている剣または槍のみ、自らの武器として使用可能。ただし剣の場合は一段階ランクが下がる。なお、他人の宝具を自分の宝具として使用可能（剣はランクが一段階下がった状態で可能）。

スキル「常勝将軍の闘志」

趙子龍の戦った戦は必ず勝てるとまで言われた武勇が由来となる。
自らの能力を相手が３つ以上、上回っていることが発動条件。
効果は相手に通じる攻撃手段がなくなった時、その相手に対してその攻撃手段が最高の状態で繰り出される（クリリティカルヒットのようなもの。また自分のキャパシティーを超えるものでも、実現可能。ただし対価は存在する）。

これにより趙雲はゲイボルクを使用することが可能になり、Ｂ＋の突き穿つ死翔（ゲイボルク）の槍はＢ＋の最高出力の攻撃で、バーサーカーを一度殺す事が出来たのだ。

しかし、聖杯の恩恵によって魔力はＣランクまで上がったが、魔力の扱いや慣れなど全てにおいて経験が不足していた趙雲はゲイボルクを放った時点で、魔力がほぼ空になり、動けなくなってしまった。

そのため現在、療養ということで自室で寝ていた。

「そういえば、今日は軍議だったな・・・」

―――そろそろ黄巾の乱あたりじゃねぇか？

「黄巾の乱・・・そういえばたまにアーチャー殿が口を滑らせていたのも黄巾の乱という言葉だったな」

―――ようは、黄巾族を一掃するための戦が始まるってことだよ。
孫堅が来てるんだろ？劉備もいるらしいからな。後は曹操がいりゃ、この賊の暴動はある程度収束にしていくはずだぜ。

「それは、三国志という話の中での事なのだろう？アーチャー殿から聞いたが、すでにその話からかなりずれが生じているようだが？」

―――ああ、戯志才や程立のことだろ？あいつらはまだ表舞台には出てくる前だからな。それを言うなら周倉だって、まだ劉備の仲間にはならなかったな。でも根本的なとこはそうそう変わるものじゃねえからな。まぁ、アーチャーがいりゃなんとかなんだろ。

「貴殿はやはり、アーチャー殿の知り合いか？」

―――知り合いってほどのもんじゃないな。まぁ、アイツからすれば俺は嫌いなタイプなんじゃないか？見た目も性格もな。けど、アイツの知りたい情報はある程度は持ってると思うぜ。まぁ、時期がくりゃ直接話してやるよ。今はこのままの方がおもしれえからな。

ケケケと笑うアンリマユは

―――またなんか困ったことがあったら、そうだな・・・暗黒神様助けて♪ってかわいい声で呼んだら助けてやるよ。

と言い残し、見えなくなった。

「誰がそんなことを言うか！！！」

と枕を思いっきりベットに叩きつけた。

その時

「いや、なんだ。ずいぶんと元気そうだな」
とノックして入ってきたアーチャーに見られた。
「・・・・」
しばらくの沈黙の後、趙雲は顔を真っ赤にしながらアーチャーに慰められたのだった。

軍議の後、出立は2日後に決定され、一行は下?城へと向かっていた。
「これが、事実上の初陣ですね」
と関羽が緊張気味にアーチャーに話しかけた。
「そういえば、君たちにとって自身の軍を率いて戦うというとなるとそうなるのだな。なに、心配しなくても君の判断はそう間違えるものではない。自信を持って行動すればそれなりの結果は出るさ」
「そうだといいのですが・・・」
「心配するなよ、あたいらが付いてるから大丈夫だって、姉御」
「姉御・・・水香、なんだその呼び方は。私の事は愛紗と呼んでい

いといったではないか」

「愛紗よりもあたいは姉御の方が呼びやすいんだ。これだけは譲れないよ」

「はぁ～。どうにかならないのですか？」

「諦めたまえ。この性格は自分をなかなか曲げる事はないぞ」

「分かってるじゃないか旦那！」

とニヤニヤと笑った。

ちなみに、周倉は劉備、関羽、張飛、公孫賛、アーチャー、趙雲、程立、戯志才に真名を預け、劉備と張飛、関羽、公孫賛、趙雲から真名を受け取った。

孫堅たちに言わなかったのは、孫堅自身が気に入った相手としか真名を預ける気もなければ、受け取る気もないらしい。

そのことを知っているのか、配下の者たちも孫堅と同じ意見で受け取ることはなかった。

「そういえば、天蓮たち以外に下？に援軍として来る者はいるのか？」

「え～と袁紹に丁原、董卓、劉表・・・あと最近黄巾党に連勝中の曹操かな？―――誰か気になる人でもいるの？」

「まぁそんなところだ」

―――いよいよ、黄巾の乱が収束に向かうな。さて、この世界はどう動くのか・・・だが、私の存在理由は変わらないだろう。正義の味方として、早急にこの暴動を鎮めるだけだ。

と空を見つめた。

その傍らでは、趙雲が顔を赤くしながらも少し不安そうにしていたのを誰も知ることはなかった。

そのころ、下？城に向かう別の軍がいた。

「さすがの賊も重要拠点の意味ぐらいはわかっているのね」

と金髪の少女は、目の前に広がる死体を見つめていた。

その表情は憐れみこそあるが、決して後悔はない。

自らの行ったこと、そして散っていった者たちの全てを背負うことによって成すべき事を成すために、この少女―――曹孟徳は軍を立ち上げた。

「お疲れ様、春蘭。どう？敵の強さは」
と大剣を持った黒の長髪の女性に、優しい笑みを浮かべながら尋ねた。
「華琳様おっしゃられた通り、敵将の力量は確実に上がっていると思われます。私の剣をかわした者までいましたから」
「やはり・・・そういえば、他の軍の動きはどうなったのかしら？」
すると横にいた少女が
「現在、下？に到達しそうな軍は孫堅、公孫賛、袁紹ぐらいでしょう。董卓は長安に滞在する賊に苦戦中という情報が入ってきていますし、劉表は娘の劉奇が体調を崩したため撤退、丁原は可進の召集を受け、止むなく洛陽に向かっているそうです」
「そんなところね・・・でも桂花、麗羽は来ないと思うわよ。丁原が可進に召集されたんでしょ？可進は麗羽をどう思っているかは知らないけど、麗羽は可進を自分よりも上の存在だと意識しているから、その情報が私のもとに届いている時点で、麗羽は洛陽に向かうはずよ」
「袁紹をよく知る華琳様がそうおっしゃるのでしたら、偵察に行かせた秋蘭が無駄でしたね」
「そういうな、なかなか面白い情報が手に入ったのだ。袁紹の情報ではないがな」
と現れた女性はふふふと笑いながら曹操に近づいた。

「華琳様の思惑通り、袁紹は洛陽へと軍を向けました」

「そう・・・それで、秋蘭。面白い情報ってなんなのかしら？」

「孫堅軍が、公孫賛軍を引き連れていました」

「孫堅が？わざわざ北平まで・・・そういえば、北平の方で天の御使いがいるという噂があったわね」

「はい、その天の御使いが現在公孫賛軍を連れて下？に向かっております」

「はぁ～！？軍を率いているのは公孫賛ではないの？」

「どうやらそのようです。ですが、公孫賛よりも器としては上かと」

「そう・・・なかなか面白いじゃない。なら今度の戦は、その天の御使いから目を離しちゃだめよ」

ニヤリと笑った曹操は、獲物である鎌、絶を前に出し。

「さぁ！この暴動を鎮める楔を打ちに行くわよ！全軍！進軍を始めましょう」

「全軍駆け足！どの援軍よりも早く到着し、我ら曹の旗で敵を脅してやるのだ！」

と春蘭が全軍の先頭に出た。

「華琳様のお気に召しますかな？その天の御使いというのは・・・」

「気に入るわけないじゃない！華琳様は私がいれば十分なのよ！」

といきり立つ桂花だったが

「気に入ればよし。気に入らなくてもよし。どちらにしろ我が覇道に一時の輝きを与える事が出来る。こんなに楽しい日はないでしょう」

と希望に満ちた顔をした曹操を見た瞬間、落胆していた。

恩恵による成長（後書き）

「地和ちゃん、舞台の準備完了しました！」

と黄巾党のひとりが、下？城の展望台から一人の少女に話しかけた。

「いつもありがとうね。後は姉さんたちがくればちゃちゃっと外にいるやつらを追っ払うだけね」

そう、この少女こそが、この暴動の原因の一人張宝その人である。

世間では地公将軍などと言われているが、本人はそのことを知るわけはなく、ただ単に姉妹で歌を歌うために舞台として下？城を占拠しているだけなのだ。

いや、占拠というよりもむしろ用意されたと言った方が正しい。

実際、張宝がやって来たのは5日前であり、ほぼ舞台は完成していたのだ。

これが黄巾の乱の元凶。

張三姉妹によるライブを見たいがために、各町や城を占拠し、舞台を作成。

そして完成間近で張角たちに連絡し、誰か一人に最終確認をしてもらいながら、残りの二人が来る前に完成させ、ライブをする。

だからこそ、各地を転々としているため、張角たちの居場所が突き止められず、朝廷は混乱していたのだ。

だが、今回占拠した場所が悪かったのだ。

この大陸で要所となる下?を占拠すれば、おのずと偵察の数が多くなり、発見されたというわけだ。

「それにしても本当に迷惑なのよね。せっかく完成したのにそれを邪魔するなんて、ひどすぎると思わない?」

と横にいる黄巾族の男に話しかけた。

「ほんとですよね。地和ちゃんたちの歌を聴けば王朝の奴らも態度を変えたりとかしませんかね…」

「あっそれいいかも。今度は洛陽でやってみようかな」

「さすがのあっしらも、洛陽に舞台は作れませんよ」

「でもやってみたいじゃない。洛陽で大勢に囲まれて歌ったら、私たちだって頑張っちゃうかもよ」

「本当ですか!ならみんなに聞いてみますよ」

「お願いね。さて、外の奴らはどうなってるのかな?」

と城壁の上で、外にいる軍を見るのが張宝の日課になっていた。

集う英雄（前書き）

矛盾点を変更しました。
ゲイボルクによるバーサーカーの一回の殺害を無くし、アロンダイトに変更。
趙雲のスキル、ランク一段階上げを、最高出力攻撃に変更。
以上です

集う英雄

「これが下？城。難攻不落と言われるのは見ればわかるでしょう？」

と孫堅が先頭に立ち、小さい丘から見える城は高い城壁に囲まれ、門は頑丈な鉄製で、北と南、西に作られていた。

ちなみに、西側には断崖絶壁と言えるような壁があり、自然の盾が出来上がっていた。

ということは、正攻法でしか、攻めることが出来ないのだ。

「成る程。守るのならば最高の場所だな。北と南は西側に絶壁があるため、必要異常に兵を出しても、大掛かりな動きは出来ない。となると東を攻めるのが中心となるが、その準備をしっかりと相手は行っている。城を攻めるには3倍の兵が必要と言うが、明らかに足りないだろうな」

とアーチャーは城を見つめた。

ざっと見ただけで5万人はいるだろう。

「風。兵数はどれくらいになりそうかわかるか？」

「兵数ですか～我が軍と孫堅さん、合わせて８０００というところでしょうか…曹操さんがいくら兵を集めていたとしても、精々１万が限度でしょうから、他の軍も合わせて２万もいればいい方ですね～」

「成る程。戯志才、攻城兵器はなにがある？」

「投石機が3台、衝車が孫堅軍に1台。後は目立った物はありませんね。火矢に用いる油ならかなりありますが、下？は城下街なので、藁などの燃えやすい家は、ほとんど無いですから使う事は無いでしょう」

「となるとやはり正面衝突しかないな・・・」

「だけど、正面衝突では援軍が来るまでに下？を占拠することは不可能。だからこそ、あなたのいう門を開けるという方法が重要になるわけ」

「それならば問題はない。門を開けるのは私に任せてもらえればいい。今一番の問題はどうやって兵力差を補うかだ」

「そんなに兵が多いの？」

「我々の全兵力の倍以上。ざっと5万はいるだろう」

「「「「なっ！」」」」

皆一斉に驚く中、周瑜だけが冷静に横にいた女の子に声をかけた。

「思春、それは本当か？」

「可能性としてはあり得るかもしれません。私が確認した時は3万ほどでしたが・・・」

「つまり、それだけ大物がいるということ。張宝だけでなく、張角

や張梁まで来るかもしれないわよ」

「それはどうかわからないが、５万は確実にいるということだ。そしてそれを束ねられる将もいる。門を開けたとしても、それだけで勝利する要因にはならない」

アーチャーの意見に納得したように周瑜が口を開いた。

「それはもっともな意見だな。いくら我が軍が奮戦しても、さすがにこの状況では、２万までしか減らせん。曹操と協力しても４万までが限度だ。それを踏まえたうえで、どうするんだ」

と周瑜の鋭いまなざしがアーチャーを睨みつけた。

「まだ今の段階では、どうともいえん。まずは曹操と合流するしかないだろう」

「それもそうだな・・・誰かある！」

周瑜の激とともに、孫堅軍の兵士が一人前に出た。

「はっ！お呼びでしょうか？」

「先に連合軍の陣に向かい我々が到着することを伝えておけ」

「御意！」

と言った瞬間、その兵は駆け足で皆の前から姿を消した。

「それじゃあ、みんな出発だよ♪」

と一人呑気に号令をかけた劉備に、アーチャーたちはため息をつき、孫堅たちはアハハハと笑っていた。

「それで、あなたが天の御使い・・・醜男ね・・・」

と連合軍の陣に入ったはいいものの、まるで待ち構えていたかのように曹操に出くわし、現在に至る。

「「貴様！」」

と同時に起こり出した趙雲と関羽をなだめるようにお互いの肩をつかんだ。

「よせ、どうせただの皮肉だ。それよりも曹操が、外見だけで判断するほど落ちた人間ではないさ」

「あら？意外とわかっているじゃない。どう？私のところに来ない？」

「華琳様！こんなやつ我が軍に入れても何の役にも立ちません！」

と横にいた猫耳フードの女の子が顔を真っ赤にしながら否定した。

「そうです、華琳様には私がいれば十分です！」

とさらに横から黒髪の女性が姿を現した。

「だそうだ。残念ながら、嫌われながら過ごす日々は生憎好まないのでね、遠慮させてもらうよ」

「そう。まぁいいわ、今は見逃してあげる」

今はねと笑った曹操にアーチャーはふと笑った。

「では、軍議を始める！」と仕切っているのは皇甫嵩である。

連絡が取れていなかったため、何かあったのかと思いきや、伝令兵にまともな者がいなかったため、全て黄巾党に捕まってしまっていたらしい。

これだけでも、連合軍の実力が知れてしまうようなものだ。

もちろんこれを知った、曹操はつまらなそうに、孫堅は全く興味なさそうにしていた。

それを見た劉備はあたふたとしながら、アーチャーに助けを求めていた。

「まぁ、双方言いたい事があるだろうが、軍議をわざわざ乱す必要もなかろう？それとも、その程度として見てほしいのであれば、こちらも構いはしないのだが？」

「「あら、言ってくれるじゃない？」」
と見事にハモった二人に火が着いたところで軍議が開始された。
「まずは、我が軍の現状だが、我が軍は３０００、曹操殿の軍が９０００、孫堅殿の軍が５０００、公孫賛軍が２０００、劉備の義勇兵が１０００だな」
と皇甫嵩が次々と喋る中、アーチャーは感心していた。
「合わせて2万・・・さすがは風だな」
「いやいや、これぐらいは当然ですよ」
と横にいた程立は無表情で受け答えた。
「ーーー戯志才、攻城兵器に関して追加事項はあるか？」
「それに関してですが、曹操軍に櫓が少々ありました。投石機と衝車もありましたから兵器自体の運営の幅はかなり広がると思います」
「さすがは曹孟徳と言うところか・・・」
すると、軍議に参加せずにずっとこちらの動向を気にしていた曹操が口を開いた。
「あら、なかなかいい人材がいるじゃない。どう？うちに来る気はない」
「残念ですが、私はお兄さんを気に入ってるので曹操さんのところ

に行くつもりはないのです」

「わっ私もまだ見聞を広めている身ですので・・・すみませんが」

「あら、残念」

「軍議中に勝手に登用しようとしないで貰いたいのだが？」

「あら？軍議と言ってもすでに指揮を執っているのはあなたでしょ？そこの役立たずを気にする必要もないわ」

「なっ！この私が役立たずだと！」

「ええ、伝令兵もまともに使えず、２万もいた兵が今では３０００。これを無能と言わずになんて言うつもりなのかしら？」

「ぐっ！しかし黄巾軍は３万もいるのだぞ！２万の兵で勝つ事はかなり難しいはずだ」

と抵抗する皇甫嵩だったが

「はっ！２万で勝てないから援軍の要請を各地に飛ばしたのでしょう？でも、それを行ったのはひと月も前、それであなたの器が知れる！相手はただの暴徒。その相手にむざむざ伝令を捕えられるほどの人選をしたのは他でもない貴方でしょう！？ましてそれをわざわざ言わないとわからないから無能と言ったのよ！」

それを聞いた皇甫嵩は委縮してしまい、孫堅は爆笑していた。

「では、この軍の指揮は誰が取る？」
と孫堅が発言すると皆一斉に注目した。
もちろん皇甫嵩は既に皆一斉に論外という暗黙の了解が成立していたため、一般兵として、曹操の管轄に組み込まれた。
当然、皇甫嵩は曹操軍に入るはずもなく、洛陽に撤退していった。
これで現状、三国の英雄たちのみで構成された連合軍となった。
それを指揮する人物。
「私はアーチャーさんでいいと思うな」
といきなり爆弾を投下した劉備は一瞬にして全員に注目された。
「あなた何を言ってるの！？これだけの軍、華琳様以外に統率できるわけないじゃない！」
「そうだぞ！華琳様の命でなければ私が従う理由がない」
と曹操軍から反論があったが、当の本人は面白そうに。
「いいわよ。私に異論はないわ」
とさらなる爆弾を投下したのであった。

しかし

「生憎だが、私は辞退させてもらいたい」

「どうして？天下に天の御使いによって黄巾党を撃退。これだけでかなりの名声がつくのだけれど？それをわざわざ断る必要があるの？」

「生憎だが、私の統率力は君たちみたいに高い方ではないのでね。それに私は弓兵だ。軍の長、王の位置につくには相応しくないだろう」

「そう」

と曹操はつまらなそうに返事をした後、指をさした。

「なら、あなたがやりなさい。孫堅文台」

「え～私。正直めんどい」

「あなたねぇ～軍を指揮する立場にいるんだから、そういう発言は軽々しく言って欲しくないんだけれど？」

と曹操は額をピクピクさせていた。

「もう、わかったわよ。その代り曹操軍にはちゃんと働いてもらうからね」

「えぇ、もちろん。推薦した私自身が動かなければ示しがつかないでしょう」

と発言した後天幕からすぐに出て行った。

「さて、どうするかな・・・」

と孫堅は座りながら近隣の地図を見ていた。

すると、アーチャーが立ち上がり

「天連、3日ほど軍を離れたいのだが？」

と言うと皆驚いていた。

「どうして？」

「いや、今回は正攻法に攻めても時間がかかりすぎるだろう？だから、少し敵の様子を見ながら打開策を作りたいのでね」

「ふ～ん。それによる敵軍の看破、および打開策による勝率は？」

「6割。相手の陣に入るほど隠密には向いていないのでね、遠くから眺めるだけだが、ある程度の質や、秀でている者の人数ぐらいはわかるだろう。これだけ分かれば正面から対峙しても、それなりに役には立つだろう」

「なら、思春」

「はっ！」

と横にいた少女、甘寧は、すっと現れた。

「敵陣に潜入、3日後に陣に戻りなさい」

「御意！」

「それから、冥琳」

「はっ！」

「敵軍を3日いなす策を立てなさい」

「御意！」

「これで、あなたが戻ってくるまでにはある程度欲しい情報はあるんじゃない？」

「そうだな。いい人選だ。では、3日後に・・・」

「ええ、楽しみにしているわよ」

と言い残しアーチャーは天幕から姿を消した。

集う英雄（後書き）

「華琳様！どうして軍の指揮をとらなかったのですか？」

「そうです！華琳様意外に出来るはずもありません！」

と反論する二人をよそに、曹操は隣にいた夏候淵に話しかけていた。

「中々の人材ね。確かに天の御使いを名乗るだけはあるわ」

「はい、人望、名声、それに対する力、威圧感。華琳様に匹敵するほどの力の持ち主でしょう」

「もしかしたら、この大陸に龍が潜んでいると思っていたけれど、それを一度に三匹も見つけられるとは思ってもいなかったわ」

「三匹？孫堅と御使い以外に誰かいましたか？」

「義勇軍の劉備とかいうあの子、のちに表舞台に出てくるわよ」

「それほどの人材ですか？」

「えぇ、あの中での発言、そして横にいた従者。王としての人望と度胸がある。まぁ、私と肩を並べられるかはわからないけれどね」

「そうですか・・・。では、劉備にもつけておきますか？」

「えぇ、お願い」

「御意」

と笑った夏候淵は、すぐさま近くにいた兵に指示を出した。

「さて、この戦い。どうやって戦うのかしら？孫堅、劉備、そして、天の御使いさん？」

とニヤリと笑った曹操は自分の陣へと帰陣した。

黄巾の乱　下?城の戦い　前編（前書き）

戦いをうまく書こうとするとなかなか思い通りに進まないｏｒｚ

なんだかんだでダラダラと時間がかかってしまいました・・・

その分いつもよりも長めなので、お楽しみに。

あっアーチャーが全く活躍しないわｗｗ

黄巾の乱　下?城の戦い　前編

「さぁ、行きましょうか！」

と隊群の先頭に立ち剣を掲げた孫堅は号令を発する。

「我々の目的は、敵首領の一角、張宝の首ただ一つ！」

その後方に控えるは、孫策隊、周瑜隊、黄蓋隊、甘寧隊。

「我らの猛虎の牙でその首を食い千切りに行くわよ！全軍進軍開始！」

「「「おおおおーー！！！」」」

雄たけびとともに一斉に兵たちが下?城目がけ、駆け抜けた。

それとほぼ同時に下?城では一人の男が城の中心部目がけ走っていた。

「地和ちゃん、敵が攻めてきました！」

と張宝に声をかけた男に、その場にいた全員が注目した。

「また来たの！？せっかくみんな集まってきたのにー！みんなで追っ払っちゃって！」

「了解でさ！…お前ら！城門にいるやつらを追っ払うぞ！行くぜ！」

その場にいた全員が武器を掲げ

「もちろんでさ！張曼成様！」

という号令とともに城門めがけ走りだした。

「報告します！敵城門開きました！中から出てきたのはおよそ５００の騎馬隊。率いるのは何儀と呼ばれている将です！」

「何儀、聴かない名だな・・・」

と周瑜はふむ、とうなずきながら考えていたが

「どうせ、賊の将でしょ。軽くひねってやりましょう。行くわよ皆！」

「ーーーこら！待ちなさい雪蓮！」

といきなり飛び出した孫策に肝を冷やしていた。

また曹操の陣でも同じようなことが起きていた。

「何儀ねぇ～」

「恐らく陽動だと思われます」

「そうでしょうね。兵もそれほど動かしてはいない。となると次に出てくる部隊が要でしょうね」

「行くぞ！お前ら！我らが曹操軍の力、孫堅軍に見せつけてやるのだ！全軍突撃！」

「あっ！こら待ちなさい！春蘭！」

と筍？が声をかけたものの、すでに時遅し。

「秋蘭。兵２０００で春蘭の援護を。下手に敵を刺激せず、しばらくの間様子を見なさい」

「御意」

と夏侯淵は、すぐさま兵を率いて、夏候惇を追った。

「ほらほら！死にたくなければ道を開けなさい！」

一瞬にして囲まれた孫策だったが、一瞬にして１０人を切り倒した。
「あははは！今まで味わったことのない快感を与えてあげるわよ。一瞬にして昇天しちゃうくらいにね」
と楽しそうに孫策は次々と切り倒していく。
そのすぐ近くではもちろん
「でりゃー」
気合とともに一振りで数人を斬り吹き飛ばす夏候惇の姿があった。
「どけどけどけ！雑兵に用はない！夏侯元譲の首！取れるという猛者はおらんのか！」
「黙れ！女が！」
と一人の黄巾党が突っ込んだが
「遅い！」
とまるで赤子の相手をするかのように一瞬にして、切り倒した。
「ありゃ～。あの二人で戦局が傾いて来たわね。・・・さて、冥琳。敵の動きに変化は？」

と眺める孫堅。

「今はまだ何もありませんがおそらく・・・来ましたね」

「華琳様！敵増援部隊、正門から歩兵隊３０００。率いるのは厳政です」

「厳政ねぇ～」

と曹操は一瞬悩むと、すぐに

「桂花、秋蘭に春蘭をこれ以上進ませないようにと伝令を」

と命令した途端に背を向けた。

「御意！」

「我が本体はこれより後退する！全軍駆け足！」

と曹操が号令をかけた途端、本陣は後退を始めた。

「曹操が退いたか・・・」

と下？の城門の上で張曼成は、戦局を見つめていた。

実はこの男、黄巾党の幹部なのだ。

黄巾党がここまで大きな賊になれたのも、この男たちがいたおかげと言っても過言ではない。

「張曼成様、どうしますか！？」

「少し早いが、策に変更はない。敵の横っ腹にどでかい穴をあけるぞ！合図を」

「了解でさ！」

と下にいた黄巾党の男は、横にあった松明に火をともした。

そのころ、孫策は率いていた兵２０００を１７００に、夏侯惇は３０００を２８００にまで減らしながらも、敵を５０００をすでに半分の２５００にまで減らしていた。

「なんだ、案外弱いじゃない。つまらないわね」

「そうか？賊自体にそれほど力があるわけではないだろう？」

といつの間にか合流していた夏侯惇は、孫策に背中を預けていた。

「それもそうね・・・て言いたかったのだけど、どうやら違うみたいね・・・。全軍転身！前方の敵をいなし、後退するわよ！」

「なっなぜ引くのだ孫策！」

「よく見なさいよ。城門から歩兵が出てるでしょう？」

「むっ確かに・・・だが、騎兵の後ろの歩兵など役に立たないんじゃないか？」

「攻めの戦だとそうなるんでしょうけど、守りでは歩兵は鉄壁の防御部隊。しかも、手にしている盾が通常のものより大きい。何に使うかは知らないけど、余計に突っ込んでも被害が出るだけよ。まぁ、これ以上突っ込んで被害を気にせず突撃したいっていうんだったら、止めはしないけどね」

「私とて馬鹿ではない。全軍後退だ！敵をいなし本陣まで退くぞ！」

と夏候惇が合図した瞬間だった。

「報告します！我が軍の後方に、敵軍が！その数およそ1万。率いているのは波才という将。さらに、敵城下から1万の軍。率いているのは張曼成という将です！」

「しまった！遅かったか～」

と嘆く孫策に

「何が遅かったじゃ、策殿。ほれ、さっさと下がれ。お主の様な猪ではあの軍からは抜けれないじゃろう？」

と黄蓋が兵１０００を連れて援護に来ていた。

「そうだぞ姉者。ここは、我らに任せ、急ぎ華琳様の援護をしてくれ。あの波才とかいう将、なかなかの強者の様だからな」

「任せておけ。全軍！本陣の救援に向かう！遅れるものは置いていくぞ！全軍駆け足！」

「こっちも下がるわよ！祭の弓を受けたくなかったらさっさと下がりなさい！」

「では、夏候淵殿」

「うむ。全軍構え。敵を十分引きつけた後、一斉正射！歩兵には構わず騎馬隊にのみ射かけ、そのまま後退する！」

「わしらは夏候淵殿が放った後、一呼吸おいて正射するぞ！正射後、すぐに策殿を追う！全軍構えよ！」

そのころ曹操の陣では

「ちっ！さすがに兵が多いわね」

と曹操は絶を構え、目の前にいた黄巾党を三人蹴散らしていた。

「桂花！状況は！？」

「はい！現在、波才は我らの陣と、孫堅の陣の両方を相手にしているため、我が軍に来ている兵士の数は、５０００。その後方で夏候惇がすでに突撃を開始。夏候淵部隊も、騎馬隊をいなし後退中の模様。孫堅軍の陣容もほぼ我らと同じような状態です」

「となると、孫堅の援護は期待できないわけね・・・。全軍！夏候惇が到着するまで耐えろ！この一時、耐えれば我が軍の勝利につながる！全軍奮起せよ！」

だが、曹操軍の真横から、一部隊が突撃を開始していた。

「早い！敵軍！陣内に侵入！華琳様！脱出を！」

「そんな事出来るわけがないでしょう！賊に背を向けるなど、我が覇道には不要！押し返すぞ！」

「・・・っ！御意！全軍！守りを固め、少しでも時間を稼ぎなさい！」

と激怒する筍？だったが、さすがに分が悪い。

実際、曹操軍の要は現在、夏候惇と夏候淵のみなのだ。

それ以上に兵を指揮できるものは未だいない。

一人、また一人と親衛隊の数は減っていった。

その時だった！

「でやぁあああ！」

という声とともに5人の黄巾党が宙を舞った。

「曹操殿。我が主の命に従い、加勢させていただく！」

と次々と曹操の目の前で、関羽は黄巾党を蹴散らしていた。

「・・・なかなか、劉備もやるじゃないの。私に貸しを作るなんて」

「ですが、これでこの戦い、勝機が見えました！」

「そうね・・・全軍！反撃を開始するぞ！関羽とともに突撃！夏候惇隊と挟み撃ちにするぞ！」

同じように、孫堅の陣でも、周倉が暴れまわっていた。

「おらおら！あたいの強さ！知らねえとは言わせねえぞ！死にたくなけりゃどきな！」

その横では、孫堅が近づいてくる兵を片っ端から切り倒していた。

「ほらほら、虎の牙味わいたくなかったら下がりなさい。もっとも私から逃げられたらの話だけどね。アハハハハ」

と敵を倒す姿はまさに、獲物を狩る虎のように残虐であった。

「・・・あたいの援軍って意味なかったんじゃ」

と唖然とする周倉をよそに次第に波才軍は兵力を減らしていた。

その時だった。

「行くぞ！長槍隊前へ！敵の横っ腹に風穴を開けろ！突撃」

と通常の槍よりも2倍はあるであろう槍を持った隊が孫堅、曹操の陣を挟むように現れ、突撃を開始した。

「馬鹿な！誰も気づかずに真横からの伏兵だと！？」

と周瑜の額に冷や汗が流れていた。

実際波才の伏兵は、来る途中に森林があったため、そこに兵を伏していたのだと予測してはいた。

だが、今いる場所は平地。

その真横からいきなり兵が現れるなど、どう考えても現実には不可能なのだ。

「全軍！あの兵に無暗に関わるな！まずは波才軍を叩くぞ！」

「しかし、あの槍の兵には！対処しなければ！被害は甚大です！」
と一人の兵が周瑜に助言したが

「わかっている！」
と発した周瑜の顔は焦っていた。

実際波才軍と乱戦状態の現在、無暗に号令をかけてしまえば、完全に兵の指揮が乱れ混乱してしまうのだ。

「完全に手詰まりか、冥琳・・・」

「いいえ、まだ手はありますが、この兵の初撃、防ぐ手立てはありません」

「ならば、仕方ないでしょう。全軍目の前の敵に専念！各個撃破し、槍兵に備えよ！残った全軍で波才の首！取りに行くぞ！全軍奮起せよ！」

「「「おう！」」」

「まずは、初撃でどれほど減らせるかだな」

と張曼成は、突撃した部隊を後方で見つめていた。

「報告します！敵軍、我が軍の策に落ち、被害甚大の模様、曹操、孫堅、ともに２０００近い被害が出ております！」

と報告に来た兵に、張曼成はニヤリと笑った。

「勝ち戦だ！者ども！曹操、孫堅の首を取りに行くぞ！突撃！」

「「「「おおおお！」」」」

と意気込む黄巾党だったが・・・・

「報告します！」

「なんだ！？何かあったのか！」

「波才軍後方に敵増援を確認！」

「何だと！？何処の軍だ！」

「それが・・・旗印は深紅の呂、丁原軍の呂布です！」

「丁原に言われたから来てみたけど・・・なんや、ずいぶん混乱してるやないか」

「ーーーー敵になにかいる」

「敵に何かいるってなんやそれ！？」

「ーーーわからない。ーーーーでも気をつけた方がいい」

「まぁ、恋がそういうなら何かあるんやろ。それじゃあお前ら！わいらは曹操軍に加勢しに行くで！」

と少女は軍を引き連れ、一直線に曹操軍に向け駆け出した。

その場に残ったのはたったの二人。

まるで親子のように身長差のある二人は、お互い戦場を見つめていた。

「ねね、軍旗を」

「はいなのです！」と返事をした小柄な少女は、深紅の呂旗を掲げた。

「遠からず者は音に聞け！戦場で流れた血で染められた深紅の旗を見よ！丁原の一人娘、丁原軍、第一軍隊長。呂奉先、その人なり！」

「お前たちが殺した数多くの命。その精算の時。世を乱す羽虫は死ね！」

と武器を構え単身で波才軍の後方へと突撃した。

「馬鹿が！単身で勝てると思っているのか！？」

と3人の黄巾党は、笑いながら呂布に襲い掛かった。

これが張漫成の軍であれば、このような楽観的に攻めてはいなかっただろう。

元々波才は長沙や建業など、孫堅たちが納めている地方担当の部隊だった。

呂布の活動地域は、洛陽が中心。

当然情報など殆ど入って来るはずもなかった。

呂布に近づいた瞬間、たった一つの風を切る音と共に三人の胴体は真っ二つになり、呂布の後方へと転がった。

「――――嘘だろ！」

と次々と動揺が走る中、呂布は次々と道を塞ぐ敵を一降りで吹き飛ばしていく。

その深紅の道の後ろには、深紅の旗を持った少女しか立っている者はいない。

まさに黄巾党からすれば、悪鬼、鬼神の類を相手にしているような者だ。

しかし、波才がただで黙っているわけがない。

孫堅と互角に戦える将が、たった一人の介入によって覆されるわけがなかった。

「同士たちよ！落ち着くのじゃ！敵はたった一人の少女。孫堅軍の方は最低限の兵で抑え、一気に片付けようではないか！それに我らには蒼天より授かりし天の兵がおる！臆する事はない！」

世が世であれば、この波才と言う人物。指導者になっていてもおかしくは無い。

だが、相手が悪すぎた。

「蒼天は竜が住む場所。故に蒼天の兵とは竜の事なり。羽虫が授かる兵は羽虫のみ。竜と偽るその兵、竜に代わり恋が殺す」

といきなり武器を真横へと振り回した瞬間、一人の男が吹き飛んだ。

その光景を見た黄巾党は膠着した。

なぜならば、そこに人がいるはずがなかったのだ。

だが、呂布が武器を振った瞬間、骨を折る鈍い音と共に、一人の男が現れたのだ。

何が起きたのかわけがわからず、混乱し始めた波才軍。

その波才自身も、

「馬鹿な！見破ったのか！？」と顔が一瞬にして青ざめていた。

「姿が見えなくても、殺気までは隠せない。この程度で恋を倒せると思っているなら笑止。隠れた羽虫は全て叩き潰す！」

正に鬼神。

たった一人の少女の介入によって、一気に乱れた黄巾党は次第に数を減らした。

そして…

「馬鹿な！５０００の兵の中をたった一人で突破したというのか！？」

「恋にとってはたやすい。…世を乱すお前は、死ね！」

「くそっなめるな！」

と波才は武器で防ごうとしたが、呂布の渾身の一撃に堪えられず、粉々に砕け身体を一刀両断した。

「――――敵将、討ち取った」

こうして、意気消沈の黄巾党は、下？城へと撤退。

そのまま戦場は膠着してしまった。

そして3日後、アーチャーは趙雲、程立とともに帰陣した。

趙雲は、アーチャーの護衛のためという名目で、程立は献策の手伝いという名目で同行していた。

「それで、何か面白いことはわかったのかしら?」

「あぁ、それに少しばかり規格外の事をやろうと思ってね」

と孫堅に耳打ちをした。

「何それ!本当に出来るの!?」

「あぁ、すでに準備に入るよう戯志才には伝えてある。後は君たちの軍の動き次第だ。それと、決死隊と言えるかどうかはわからないが、2名ほど、この策に付き合ってくれる者が欲しいのだが…」

「もちろん、私がやるわよ♪」

「…まぁ、君ならなんとかなるだろう」

「なにその間は!ひどーい」

と顔を膨らます孫堅だったが

「随分と面白そうな話をしてるじゃない？」
と天幕の外から、孫拍符が姿を表したとたん、顔色が悪くなった。
「まさか、聞いてたの？」
「えぇ、もちろん♪なんだか面白そうな話じゃない。勿論母様は、私をのけ者にする訳無いわよね？」
「アハハハハ。わかってるじゃない。もちろんお留守番よ」
「冗談じゃないわよ！この前の戦いだって、ちゃっかり敵将仕留めてたんだから今回くらい、私だって活躍したいの！」
ぶーぶーと文句を言う孫策を見かねたのか、程立が
「まぁ、いいんじゃないですか？今回の策は、この作戦に参加する人の個人の部がかなり重要になりますから、風としては孫策さんなら申し分ないはずです」
「でもねぇ～」
と悩んでいた孫堅だったが
「――――なら恋も行く」
と隅の方で立っていた呂布が、前に進み出た。
「ちょっと待ち！恋、あんた今行く言うたんか？」

とその隣にいた張遼に止められた。

「――――（こくん）」

と返事をした。

「気になっていたんだが、誰だ？」

「――――恋は、呂布、奉先」

「なっ！君がか！？」

「なんや、恋は有名人やな。うちは、性が張、名は遼、字は文延や」

と思ってもいなかった二人の介入に、アーチャーはただ呆然としていた。

黄巾の乱　下?城の戦い　前編（後書き）

「それで、どうするつもりですか?」
と程立は陣へと戻る途中にアーチャーに話しかけた。

「それは張宝のことか?」
と真剣な表情をしたアーチャーに対し、趙雲が

「そうですな。普通であれば討ち取るのが定石。しかし、あの感じからすると、恐らく討ったところで黄巾党は混乱はしない」
と断言した。

この3日でわかった事は2つあった。

一つは張宝が女性であること。

その張宝たちがアイドル化していて、その暴走集団が今の黄巾党であるということ。

そしてもう一つは、その黄巾党を率いているのが張角たちではなく、複数の幹部たちだということだ。

だから、波才や張曼成の居所がわかっても、張角たちに繋がることはなかったのだ。

「ーーーだからこそ、彼女は我々が保護する必要がある」

「保護・・・要は人質と言うことですかな?」

「他の軍からすればそうだろう。実際彼女が確保できれば、自然と張角、張梁の居場所が分かる。そうすれば今回と同じように確保出来る機会が生まれる」

「そうですね～。もし、3人を確保出来れば、張角たちが死んだという情報を流し黄巾党は壊滅させることもできますね～。残った賊は、力はあれども、数がいないですから次第に消えていくでしょう」

「では、今回の方針が決まりましたな」
とニヤリと笑った趙雲はアーチャーを見つめた。

「ああ、そのための決死隊だからな。頼りにしているぞ、星、風」

「「御意！」」

と三人は陣へと戻った

黄巾の乱　下?城の戦い　中編（前書き）

明けましておめでとうございます

明らかに更新が止まっていましたが、一身上の都合なのでご了承ください。

本年も亀更新なので気長に待っていただけると幸いです。

本年もよろしくお願いします。

では、中編をどうぞお楽しみください

黄巾の乱　下?城の戦い　中編

「では、軍議を始める」
と孫堅が号令を発すると全員の顔が引き締まった。

孫堅軍からは孫堅、孫策、周瑜、甘寧が、曹操軍からは曹操、荀?、夏候惇、夏候淵が、劉備軍からは劉備、関羽、周倉が、公孫賛軍からは、アーチャー、趙雲、戯志才、程立が、丁原軍からは呂布、張遼、陳宮が参加していた。

「今回はまず、全軍で敵城門へと攻める」
と周瑜が発言すると、曹操軍から不満が上がった。

「攻めるですって！呂布がいるから勝てる戦になったわけじゃ無いのよ！？」
と荀？が猛反発するとそれに便乗するかのように

「そうだぞ。さすがに呂布が加わったところで、あの城門を破る事など出来ないだろうが！」
と夏候惇が発言すると、一斉に全員が驚いていた。

「なっなんだ！？なぜ、みんなして驚いているんだ！？」

「いや、初戦で何も考えずに突撃した人からまともな意見が出るとは思ってなかったからじゃない？」

アハハと笑う孫策に対し、周瑜が

「その突撃したものというのはもちろん貴様も含まれるんだよな？」

とニヤリと笑った。
「いやいや、私はちゃんと考えていたわよ」
と否定する孫策に対し
「嘘だな」
「嘘ですね」
「嘘でしょ」
と孫堅たちから声が上がった。
「あっ皆してひど〜い。ぶーぶー」
と顔を膨らませる孫策だった。
「いい加減進めてもらえるかしら？」
と曹操の額は青筋が走りながらピクピクしていた。
「ああ、ごめんね。それじゃあ、再開するわよ。城門に攻めるといってもそれは策が成るまでの囮。つまりは陽動作戦ってわけ」
「陽動？城門を攻めながら陽動なんてしても効果がないでしょう？まぁ、中に元から潜入している兵がいて、城門を開ける手はずになっているなら話が別だけど」
とニヤリと笑った曹操は、アーチャーを見た。
「さすがは曹操、鋭いところを突いてくる。まぁ、今回は私が献策したものだからな、説明は私がしよう」
とアーチャーは近辺の地図を広げた。

「この戦いで最も重要となるのが、この城の作りだ。背後には断崖絶壁の崖があるため、坂落としが出来ない。となると3つの城門から攻めるしかない。だが、私がこの3日で城門近辺を調べたが、兵器の種類は完璧と言えるものがそろっていた。これでは張角たちが来る前にあの城は落とせん」

「それは本当なの思春？」
と孫堅が尋ねると

「はい、敵には櫓、投石機、油、火薬、剣、弓。全てここにいる軍以上の種類と量がありました。いくら扱うのが黄巾党と言えども、ここまで用意されては、そう簡単に落とせるものではありません」

「成程ね。だからこその囮というわけね」
と曹操はにやりと笑った。

「あぁ、私と数名の者が敵場内に潜入し、中から開ける。これしか短期決戦で開けられる方法がない」

「ちょっと待ってくださいアーチャー殿！ということは、決死隊を作るということですか！？」
と関羽は驚愕しながら尋ねた。

「あぁ、すでに人選はしてある。これは一騎当千の者でなくてはならないからな。私の独断で決めさせてもらった。まずは、この策には私と趙雲は絶対不可欠のため、まずはこの二人。そして孫堅軍の、孫堅、孫策、そして、丁原軍の呂布だ」

「ちょっと待ってください。私もその中に入ってもおかしくはない

はずです！」

「そうだぞ！私だって一騎当千と言われる実力はあるはずだ！」

と関羽と夏候惇は、立ち上がり猛反発した。

「君たちが一騎当千の猛者だということは重々承知しているが、君たちまで付いてきてしまえば、城門部隊の戦力が落ちすぎてしまう。門を開けるのは容易ではないが、その門を開けた後に活躍するのは君たちだと思うが、違うのかね」

「むっそれもそうだな」

「わかりました、アーチャー殿がそうお考えなら、これ以上言うつもりはありません」

と不満を残し両者とも席に着いた。

「ということで、城門の総大将、曹操が担当してくれる？」

と楽しそうに言う孫堅に対し、曹操はため息をついた。

「はいはい、わかったから。それで、決死隊はどうやって潜入するつもりなの」

するとアーチャーはふと笑い

「君の想像もつかないことだよ。楽しみにしておきたまえ」

と言い残し、軍議は終わった。

そして、明朝。

あたりは朝日とともに次第に景色を取り戻し、さまざまな色彩が鮮やかになり始めたころ、空になびく旗の下、さまざまな色の鎧を着たものたちが、たった一人の壇上に上がった少女を見つめていた。

「では、これより私が総大将となり、全軍を率いる！不満があるものは直ちに去るがいい！」

曹操が言い放った後、誰ひとりとして動くものはいなかった。

「ならば結構。では、これより進軍を開始する！先鋒！夏候惇！」

「はっ！」

「城門を目指し、その道を塞ぐすべての敵にその大剣の威力を味合わせてやりなさい！」

「御意！」

「副将、周倉！」

「おう！」

「夏候惇軍の横から攻める軍をいなし、勢いが止る事がないよう、その豪勇を轟かせなさい！」

「御意！」

「中軍、劉備！」

「はい！」

「夏候惇軍が広げた道をさらに広げ、攻城兵器が置けるよう、陣を確保なさい！」

「わかりました」

「副将、関羽！」

「はっ！」

「劉備軍の補佐を。状況に応じては夏候惇軍の加勢にも向かいなさい。だけれど重要なのは攻城兵器の完成。それを頭に入れながら臨機応変に回りなさい」

「御意！」

「左翼、黄蓋！」

「おう！」

「右翼、夏候淵！」

「はっ！」

「劉備軍の援護、及び横から攻めるであろう敵をその神弓で全て射止めなさい！」

「「御意！」」

「遊撃、張遼」

「おう！」

「その神速の牙で、敵軍の戦意を削ぎなさい」

「了解や！」

「本陣、曹操、副将に筍？、戯志才、程立」

「「「はっ！（は～い）」」」

「敵軍の動きを読みながら献策をしなさい、攻城兵器完成ののち、二人はその指揮を取りなさい」

「「「御意！（了解です）」」」

「さぁ、狩りを始めましょう」

と曹操は自身の獲物の鎌、絶を掲げ、進軍を開始した。

「どけどけどけ！夏候元譲、まかり通る！」

城門から打って出てきた兵を片っ端から薙ぎ払う。

後の魏の重臣、夏候惇は、すでにこの黄巾の乱で頭角を現し始めていた。

その横では周倉が夏候惇の討ち洩らした敵を確実に撃破していた。

その光景を城門で眺めていた2人の男がいた。

「どうしますか、張曼成様・・・」

と不安そうにする優男の隣で、張曼成は悩みながら口を開いた。

「さすがに呂布がいると迂闊に兵は出せん、しかし呂布だからと言って攻城戦が得意と言うわけではない。すでに兵器の準備はできているのだろう？」

「はい、各城門には衝車対策用の弓、櫓対策用の油、火矢、投石機、及び落石用の大岩も準備万端です」

「ならば、各隊に伝えろ。城壁まで敵を誘い込み、そこから弓兵は敵が見え次第一斉正射。のち隙を作らぬよう投石機の運用。その後敵兵器が確認でき次第潰して行けと」

「御意！」

と優男が下がると、戦場に変化が表れ始めていた。

すでに夏候惇が開けた道を指示通り劉備隊が広げ、そのすぐ後方に

は夏候淵、黄蓋隊によって各門からの兵の増員を見事に防がれていた。

そして半刻後、連合軍側には攻城兵器が作成された。

「では、これより攻城兵器の運用は私が指示を出します」
と戯志才は各兵器長を集め、指示を出し始めていた。

「まずは敵城壁の上に投石機が確認されています。これを破壊をまずは第一の目的とします。ですがこれは我らがする必要はありません。我らがしなければならないのは敵の意表を突くための前座。破壊を明らかに目的としていることを見せつければいいということです。分かりましたか？」

「はい、ですが我らの攻城兵器の意味がなくなるのではないのですか？」

「そうなの！しかも攻城兵器以外で投石機を破壊するなんてそう簡単にはできないはずなの」

「それについては問題はありません。破壊方法については機密事項としておくため話すことはできませんが、確実に破壊できることは保証しておきます。問題なのは破壊後の行動についてです。その準備はできていますか？」

「それはもうバッチリや！いつでも行けるで。でもあれをどこに置くんや！？いくらうちの傑作でも飛距離に限度はあるで？」

「それに関しても問題はないと確認してありますので問題はありま

せん。その設置場所ですがこれからでるであろう櫓の半里先にします」

「「「わかりました」」」

「では、まずは楽進さんの投石隊から一斉正射。その後、迂禁さんの櫓の進軍。恐らく敵は櫓を破壊すると思いますので、その時に李典隊による兵器の設置及び護衛で行きます。投石機の運用はその後、程立の指示に従ってください。では、各自よろしくお願いします」

と三人の少女は指示を受けると各持ち場に戻っていった。

「では、行こうか」

と劉備の陣に入っていた決死隊の面々は静かに戦場に姿を現した。

「まずは、投石機の破壊か・・・」

とアーチャーは城壁の上を見つめた。

「はい、その後すぐに発射にかかりますが、お兄さんの足ならあの距離で問題はないでしょう？」

と程立は飴をくわえながら、その隣に立っていた。

「ああ、問題はない。・・・星、覚悟はいいか？」

とすぐ後ろにいた趙雲に話しかけた。

「もちろんですよ。緊張はありますが、程よい程度。むしろ万全の状態です。アーチャー殿こそ、投石機の破壊頼みましたよ」

「任せておきたまえ、弓兵の実力その眼でしかとみておくがいい」
「なら、行きましょうか。投石機の運用が始まりそうだし」
と孫堅が前に立つと全員の顔が一瞬にして変わった。
「さぁ、ここからが本当の開戦だ。行くぞ！」
「「「「「おう」」」」」
空中に無数の岩石が飛び交う中、城門ではすでに小競り合いが続いていた。
「ちっさすがに兵が多く中々開けられんか」
と夏候惇の表情が曇るのと周倉もまたあまり芳しくない表情で
「こりゃ、決死隊を待つしかないみたいだね」
と城門を見ていた。
その時だった。
黄巾党がざわつき始めていたのだ。
「・・・敵に動揺？いったい何が？」
と夏候惇が疑問に思う中、周倉は後ろを振り向いた瞬間にやりと笑ったのだ。
「・・・成程。そういうことかい。さすがは旦那だね」

敵から見ればそれはあまりに異常な光景だった。

たった一つの櫓があろうことか城門から1里以上も離れ、ぽつんとたたずんでいるのだ。

そしてちょうどその手前1里のところには投石機に似たようなものが置かれているのだ。

明らかにみれば攻城兵器としては意味がない。

だが、連合軍、まして曹操、孫堅がいる陣であんな愚直な行動をする者がいるかどうかと言われるといる筈がないのだ。

ということにはあれには意味があるということだ。

それを見ていた張曼成は、内心不気味で仕方がなかった。

「何を考えている・・・誰か！」

「はっ」

「あの兵器、動く様子があるかはわからんが、動きしだい最優先で破壊しておけ。何か特別な仕掛けでもあるのかもしれん」

「わかりました」

と保険をかけた張曼成であったが、この判断がこの戦いに大きな穴

をあけた。

そう、たった一人の弓兵によって・・・

黄巾の乱　下?城の戦い　中編（後書き）

それは趙雲たちが見たいつかの光の矢。

それは見たことのない天からの襲撃。

初めて見た者は、自分が立っていることも忘れるほどの一瞬の出来ごと。

各門に2つずつ用意されていたはずの投石機が6つの天からの光に直撃した瞬間、爆撃音を上げ、倒壊したのだ。

「何だあれは！いったい何が起きた！」

と張曼成の激とともに、近くにいた兵から報告が上がった。

「申し上げます！何かの襲撃により全投石機が破壊！城門自体は完全に無傷ですが、完全に混乱状態です。また、襲撃の元凶はあの櫓にあるかと」

「くそ！長遠距離からの攻撃方法を持っていたのか！ぬかった。どんなものか確認は出来たか？」

「それが、櫓には一人の男が上ったことを確認した以外には何も変化はなかった模様」

「なんだと・・・」

（一人の男・・・光による爆発・・・連合軍・・・まさか！）

「確かあちら側には公孫賛軍がいたな？」

「はい、旗印は確認済みです」

「ならば、そこの領土から逃げたやつの話を覚えているか？」

「たしか・・・流星のような光とともに爆発が起きたと・・・！」

「その男に間違いない！全弓兵を投入する。そいつに向かいうち放て！城門の敵は落石によって防いでおけばいい！」

完全に後手に回った張曼成の目の前ではすでにアーチャーが大手をかけ始めていた。

黄巾の乱　下?城の戦い　後編（前書き）

ここで黄巾の乱の折り返し地点です。

何かうまく書けている気がしないのだが、まぁ、黄巾の乱さえ終わればその後は多少出来ていたりするので何とかなるかなと・・・

では後編をどうぞ

黄巾の乱　下?城の戦い　後編

「やはり、門は壊れないか・・・」とアーチャーは投石機を目指しながら思案していた。

本来ならばこのような策を取る必要がないのだ。

アーチャーがこの時代の鉄で出来た塊の門を壊す事など容易い。

しかし、それができないことが先日に判明していた。

元々、張宝を確認した時点で、確保する意思があったアーチャーは、2日前に城門に向かい矢を放っていた。

しかし、その門は爆破することはなく、剣が扉に当たった金属音のみが鳴り響いただけであった。

そう、あの城全体に対魔術用の結界が張られていたのだ。

それも、完全に魔力を吸収してしまうほどの密度の高い結界が。

だからこそもう中に潜入するには一つの方法しかなかった。

「誰かは知らんが、勝算に値する。これがなければ苦労はしなかっただろう。だが、詰めが甘かったな。この時代の人間には出来まいと踏んでいたのは浅はかだ」

とニヤリと笑ったアーチャーは既に投石機の手前に到達していた。

「星！準備はいいか！？」

「もちろんですぞ！アーチャー殿！」
と投石機の上に乗った趙雲たちは意気高らかにアーチャーを待っていた。

「君は集中していればいい。そうすれば失敗はないだろう。後のことは私に任せておきたまえ」
とアーチャーも投石機の上に乗り込み、城の方向を向くと弓を投影した。

「承知！」と趙雲は目を瞑り、意識を高めていく。

「李典！」

「おう！・・・今や！落とせ！」

その合図とともに強引に引っ張られていた縄を斧で叩き斬った。

その瞬間一斉に五人は乗っていた台とともに空中へと浮き上がった。

そしてアーチャーは近くに合った縄を束ねると投影したカラドボルグへとくくり付けた。

「全員、しっかりと捕まっておけ！」

その言葉を聞いた孫堅、孫策はアーチャーの肩を、呂布は趙雲の肩をしっかりとつかんだ。

狙うのは城の上空。

魔力を集中させ飛んでいるスピードが生きているうちに、解き放った。

「ーーー偽・螺旋剣（カラドボルグ）」

轟音とともに城の上空へと目がけ放たれた剣は空間を切り裂かんばかりの轟音とともにアーチャーたちを引っ張っていく。

元々、縄自体にはアーチャーが強化の魔術をかけていたため、そう簡単には壊れることはなかった。

ましてすでに勢いに乗っているものをさらに遠くに飛ばすための加速装置のような役割のため最後まで縄を耐えさせる必要などない。

城の上空1kmの地点に到達した瞬間、全員は飛び降りた。

「意識を集中させろ星！安心したまえ、私が必ず受け止める！先に行くぞ」

と孫堅と孫策を支えながら一気に加速したアーチャーは城の中心部目がけ墜落していく。

着地地点目前に迫った瞬間、重力を魔術により操作し、無事に着地を成功した。

「・・・大丈夫。お前ならやれる」と呂布は趙雲を真剣な表情で見つめた。

「ふっ！猛将呂布殿に言われては、我が力存分に振るわなくてはなりませんな！」

一気に魔力を高め詠唱する。

「Ｅｓ　ｉｓｔ　ｇｒｏｓ，（軽量、）Ｅｓ　ｉｓｔ　ｋｌｅｉｎ（重圧）……！！」

自身にかかる重力を最小限にし、着地までの時間を稼ぐ。

そして着地地点に到達した瞬間、暖かい温もりとともに、両者は無事に着地に成功した。

「よくやった。君の才能には驚かされてばかりだよ。趙子龍」

「ふふふ、では、その才、さらに披露することにしましょう」

その一部始終にだれもが驚愕し、口を開けていた。

まさか、空から人が降ってくるとは夢にも思わないだろう。

まして敵陣のど真ん中に、たった5人と言う少人数をみればただの自殺行為でしかなかった。

だが、それ以上にこの光景を見た者には恐怖が宿っていた。

そう、降り立ったのが、天の御使いと江東の虎、江東の小覇王、常勝将軍、そして人中の呂布なのだから。

「それじゃあ、始めましょうか！」
と周りを囲む黄巾党たちの中に笑いながら突撃していく孫堅。

「あっ！母様、ずるい！」
と孫策も後を追いかけていく。

黄巾党は初めて恐怖しただろう、そこは人が通ってはならない血の道が出来上がっていたのだから。

「あいつらは、ちゃんと分かっているんだろうな・・・」
と呆れるアーチャーに対し呂布が

「ーーー大丈夫、孫堅たちは馬鹿じゃない。ここは恋に任せて進むといい」

「おや？私たちの目的を知っているのか？」
とキョトンとした趙雲に対し呂布は首を横に振った。

「知らない、けど意味のあるものだと思う。だからこいつらは恋が引き受ける。だから行くといい」

「ふむ、ならば行かせてもらおう。ではまた後でな」
とアーチャーは笑うと城を目指し歩みを進めた。

「ご武運を」
と趙雲もまたアーチャーを追いかける。

その姿を見た黄巾党たちは狙いが張宝だと悟り、後を追いかけようとした。

しかし、呂布の横を通り過ぎた瞬間に地面へと転がった。

「ここから先には行かせない。通りたければかかってこい！」

その気迫に押されたものは一歩も動けず、ただ剣を構えるのみ。

その気迫を乗り越えたものはその蛮勇ゆえに散っていく。

まさに深紅の呂旗のごとく呂布の周りには赤い地面が広がっていた。

一方連合軍の方でも動揺が走っていた。

その中でも一番衝撃を受けていたのが金髪の少女、曹孟徳であった。

「桂花、あれを我が軍でやれと言ったら出来る者はいるのかしら？」

「・・・我が軍で出来る者はいないでしょう。いいえ、この大陸のどこを探してもいる筈はありません。恐らくあれが天の御使いの力なのかと・・・」

と悔しそうに筍？は城を見つめていた。

「そう・・・ふふふ」

と笑った曹操は満面の笑みを浮かべ

「面白い！アレを手に入れてもよし、アレを我が覇道の最後の敵にするもよし！どちらにせよこれほどの華は無いでしょう！・・・桂花！全軍に通達！これより一斉に突撃を開始すると」

「はっ！」

ここからはまさに快進撃であった。

孫親子の活躍により城門付近の敵は全滅。

城壁に敵がなくなれば当然攻城兵器も動きはしない。

よって連合軍は衝車により門が破壊、全軍の突撃により完全に混乱した黄巾党は大敗。

ここに下？城の戦いは終結した。

「それで、君はどうするつもりかね？」

とアーチャーは目の前の少女、張宝を睨みつけていた。

「どうするもなにもないわよ！私たちはただ歌いたかっただけなのにあいつらが勝手にやっただけじゃない！第一暴動が起きたのも今の皇帝が悪いんでしょ。その責任はそっちにだってあるじゃない！」

「それは否定はしない。むしろ私自身がこの時代の上に立つ者はど

うかしていると思っているくらいだ」

「じゃあ」

と表情が明るくなった張宝だったが

「だが、君のやったことは決して正しいとはいえない。ただ歌いたかった。それ自体の行為は間違ってはいないだろう。だがもうすでに過程から崩れている。歌いたいのであれば自分たちもしくは代理人によって場所を作り行うべきだ。客に任せるようなものではない。そして初めの暴動はここまで大きくはなかったはずだ。君たちにも十分に止められるほどものではなかったのか？」

「ーーーうっ！」

とひるんだ張宝は、気まずそうに下を向いた。

「その積み重ねがこれだ。君たちのやりたかったものは歌なのであろう？だがこれは殺し合いだ。君の歌いたいという願いが生んだ殺人なのだよ。それを考えてなお、君は殺し合いをした上で歌いたいと言えるのかね？」

と鋭い眼光のアーチャーに対し、張宝は涙を浮かべていた。

「私だって、こんな事をしたかったわけじゃないのよ。初めは確かに自分たちを認めてくれた事がうれしすぎて舞い上がっていたのかもしれない、これがいけないことだって言うのは分かっていた。だけど築いた時には遅かったのよ！すでに統率者の中に盗賊、山賊の棟梁たちが紛れ込んでいるの！ーーーー一度抜けだそうと張梁と決めたことがあったわ。でもその時現れた男に言われたのよ」

『去りたいのであればいつでもどうぞ。その代りあなた方のお姉さん、張角の命もこの世から去ることになりますがね』

「そうか、ならば手を貸そう」

「え！？」

アーチャーの発言に戸惑いを隠せない張宝は涙を拭くことを忘れたままただ立ち尽くしていた。

「君の姉を助ければ、この暴動は治まるのだろう？ならば私が手伝ってやると言っているのだ。もちろん決めるのは君だが？」

「うそよ・・・嘘に決まってるじゃない！何で敵の言葉を信じなきゃいけないのよ！」

「ならば君はどうするというのだ！この連鎖を繰り返すつもりか！君の行いに私は怒りたいだろう。だがまだ私は救う余地があると思っているのだ。この連鎖を止められるのは私でもなく、漢王朝でもない。それは君たちなのだ。だからこそ手を貸そうと言っているのだ。それでも君は拒むのかね？」

「ーーーなら、あなたの真名を教えて。もちろん私のも教える。この約束が本当ならば真名に誓って！」

という張宝に対し、アーチャーは

「残念だが、私には真名がない。いい案だと思うが、すまない」

と表情が曇ったが、後ろにいた趙雲が

「ならば、私の真名をかけましょう。それにアーチャー殿もまだ真の名を誰も知ってはいません。ならばそれを真名とすれば良いので

はないのですかな？」

「しかしだな・・・」

と不満そうに言うアーチャーに対し、張宝が

「それが本当ならば私は構わないわ。あんたの名前をその人も知らないみたいだし」

「ならば、私はアーチャー、本名を衛宮士郎という」

「性が衛、名が宮、字が士郎？」

「いいや、君たちの言い方でいえば性が衛宮で名が士郎だ字はない」

「そうなの？なら士朗って呼ぶわね。私は性が張、名が宝、字はあなたと同じでないわ、真名は地和よ」

「我が名は張、名は雲、字を子龍、真名が星だ。よろしく頼むぞ地和」

「星ね。ならこの真名にかけて約束を誓うわよ。破ったりしたら一生の恥だからね！」

と三人は手を合わせた。

黄巾の乱　下?城の戦い　後編（後書き）

「では、とりあえず私と供に来てもらおうか」

「それはいいけど、どうするのよ?私が行ったら確実に処刑されるんじゃない？」

と張宝が開き直ったかのように床に座った。

「それならば問題ないでしょう。地和殿には私の妹としてこれから同行してもらいます。ちょうど性も同じですし、髪の色も似ている。さすがに名は変えなければなりませんが、他のものからすればさすがに違和感がありますまい」

「成程ねー」

と呑気に構えていた張宝に、一本の弓が飛来した。

深々と刺さったそれは血しぶきを上げる。

「「「なっ！」」」

と三人はそれぞれ驚愕した。

「ーーーどういうつもりだ、厳政!貴様!手元が狂ったなんていう言い訳はさせねえぞ!」

と矢が突き刺さった張曼成は、眼前にたたずむ厳政を睨みつけた。

「ちっ!余計なことを。裏切ろうとした者を殺そうとしただけではないか。それの何が悪い!貴様こそ、我らを裏切るのか張曼成！」

「裏切る?はっ!裏切ったのはてめえらだろうが!天和ちゃんに裏

から圧力をかけているというのは知っていたが、まさか人質になっていたとは思わなかった。貴様らだけは生かしちゃおけねえ！」
と歩み出す張曼成の顔はまるで般若のごとく怒りに満ちていた。

「くっ！ならば貴様も死ね！」
と弓を射る厳政に対し、張曼成は突撃をした。

すでに初撃で自分の腹を貫通したこの矢がすでに致命傷であることを知っていた張曼成は、避ける気などない。

死という結末に終ろうとも、目の前のこいつだけは許すことができなかったのだ。

「やめて！もういいわ！張曼成」

「初めて呼んでもらえたな。嬉しいよ地和ちゃん。最後に言っておくよ、いつか大陸中の人間を集めた前で歌ってくれ。これが俺の願いでもあるんだ」と笑った張曼成は、最後の矢を受けるとその場に倒れこんだ。

「はっ！死んだか！何が生かしちゃおけねえだ、ほら殺せるものなら殺してみろよ、張曼成！」
と倒れた張曼聖に近づいた瞬間、アーチャーの容赦のない神弓が体を貫いた。

「貴様！」
と言う言葉とともに厳政は崩れるとその場で息絶えた。

「・・・なぁ・・・そこのあんた」
と微かだが、張曼成の声がしたためアーチャーは駆け寄った。

「・・・もう前がかすんでてな・・・最後の頼みだ、聴いてくれるか？」

「ああ、私でよければ聞こう」

「・・・この首を・・・張宝として・・・持って行ってくれ」

「ダメよ！それじゃあ、あなたが！」

「いいんだ。・・・多少の時間稼ぎにでも・・・なるだろう。頼む」

「ーーーああ、必ず行うと約束しよう。だからもう眠れ、君のこの先に幸がある事を願おう」

「へへ・・・御使いに言われたら・・・いい・・こと・・・あるかも・・・な・・・」

と張曼成の手が崩れ落ちた。

その後、張宝の首が掲げられ、下？の戦いは完全に終結した。

連合軍は解散し、各地に散らばった。

アーチャーたちも無事に公孫賛の元に帰還し、宴が開かれた。

だが、三人の中では弔いの酒宴になったことを他のものが知ることはなかった。

決意する者、去り行く者（前書き）

今回は特に進展はありません。

まぁ、黄巾党の乱の最終戦へ向けての小休止という感じです。

では、どうぞ

決意する者、去り行く者

「こいつが張宝ねぇ～…」
と公孫賛は、張宝をまるで珍しい生き物のように見ると
「それで、こいつはどうするんだ？」
とアーチャーに尋ねた。
「それなのだが、匿う事にした」
「匿うって…いやいやいや、流石に無理だろう」
と驚きながら言う公孫賛に対し、趙雲が
「もうすでに、曹操軍、孫堅軍、丁原軍に知られております、諦めなされ」
とニヤニヤと笑った。
「あぁ～もう、わかったよ。お前たちにはかなり助けられているから、許可しよう。ただし、なにかあったら責任は取ってくれよ」
と行って公孫賛は退室した。

「それで、名はどうしたのだ？」
とアーチャーは張宝に訪ねた。
「とりあえず性は星と一緒の趙で、名は私の真名から取って和、字は雨竜よ。まぁ、あなたには真名で呼んでもらうから、これが必要なのは軍議の時ぐらいじゃない？」

「そうだな、ところで、君たちは何で我が軍について来たんだ」
と目の前に立つ三人の少女にアーチャーはため息をついた。

「なんでと申されましても・・・」
と傷だらけの少女、楽進と

「まぁ、兄さんについて行った方が早く乱が収まりそうだったし」
となぜか関西弁の李典と

「天の御使いの知識にも興味があったの～♪」
メガネとそばかすが目立つ迂禁が立っていた。

そう、下？城の時に攻城兵器の隊長を任されていた者たちだ。

実際、あの人が乗れる投石機を短時間で作れたのも、ここにいる李典のおかげなのだ。

「確かに君たちには世話になったが、私についてきてもいい活躍は出来ないと思うのだが？」
と言うアーチャーに対し楽進が

「いえ、私たちは活躍して名を上げるというよりも早く乱世を終わらせたいのです。そしてそれを出来る人物。初めは曹操様のところに行こうと思いましたが、あなたと出会い、その力、人徳、名声、全てにおいて上回っっていると思いました。ですから、私たち三人は、貴方に士官したいと思いついて来たのです」
と誇らしげに言った。

「――――決意は揺るがないか？」

「「「勿論です！（や！）（なの！）」」」
と三人は力強い眼差しでアーチャーを見つめた。
「――仕方ない、わざわざ私を選んでくれたのだ、君達の期待に添えないと思うが、よろしく頼む」
「「「やった！」」」
と互いに手を取り喜んでいた。
「では、そろそろ風も決意する時が来たようですね」
と飴をくわえながらアーチャーに近づいた程立は、ひざまずいた。
「風、何を！」
と戯志才は慌てたが、程立は真剣なまなざしでアーチャーを見つめた。
「お兄さんに一つ問います。この乱、鎮めた後どうするつもりですか？」
「――そうだな、私にとって一つだけやらなければならないことがある。それをやるだけだ」
「やらなければならないこと？それを話すことは可能ですか？」
「あまり大それた物ではないが、いい機会だから話しておこう。私が以前どういった経歴があるのかを・・・」
アーチャーはこの場にいた趙雲、程立、戯志才、楽進、李典、迂禁に自らの過去、正義の味方として行った事を手短に話した。

「正義の味方・・・なるほど、お兄さんらしいといえばお兄さんらしいですね。ならばあの夢はお兄さんに関係あるのかもしれません」

「夢？」

「はい、天高く昇る太陽が、漆黒の闇に蝕まれ、大地を燃やしつくした夢です」

「ーーー君は本当にそれを見たのか？」

「はい、最近のことですが、どうも誰かの記憶の様な気がしてならなかったのです。その驚き様・・・やはりお兄さんの過去の話に登場する場面なのですね」

「あぁ、この私が生まれた場所でもあり、正義の味方として歩む事になった原因だ・・・」

アーチャーの表情は次第に曇り始めていた。

元々他人の夢は聖杯戦争時代、マスターである遠坂凛の過去を見た事はあった。

しかしそれは同時にマスターと言う繋がりがあったからだ。

目の前にいる程立と深い関わりは未だ持ってはいない。

それが意味するものをアーチャーはまだ気がつく事は出来なかった。

「話がづれましたが、結論は獲ました。私はお兄さんを主としてこの乱世を生きていきたいと思います」

その表情は今まで見たことも無い真剣な表情でアーチャーを見つめていた。

「――――ふむ、私の何がいいのかわからんが、君ほどの人物が決意したことを私が崩すことは不可能だろう」

「では、それに伴い風は名を変えようと思います。まぁ、お兄さんのことを裏切らないという証と、決意として覚えていただければいいかと」

「成程。では新たな名を聞こうか」

「はい、先ほどの夢の黒い太陽。それはまるでお兄さんの心の様なものです。その太陽を風は明るい本当の太陽にする事を誓い、新たな日を立てるから名を？と変えます」

その時、この少女が魏の重臣、程？へと変わった瞬間でもあった。

そして、もう一人の魏の重臣、郭嘉にも新たな決意が芽生えていた。

「本当に行くのか？」

と公孫賛は場外で旅支度を終えた戯志才を見送っていた。

程？が決意した3日後、戯志才は自らの名、郭嘉を全員へと教えるとともに、決意したことを話した。

「はい、我が主は曹孟徳しかいないと。この前の下?城の戦いでそう思いました。公孫賛殿には申し訳ありませんが・・・」

「そんな事はないさ。私は元々主ではないしな。それを言うならアーチャーに言うべきだろう」
と横にいたアーチャーを小突いた。

「私も別に主というわけではない。だが、一人の友だとは思っている。その友が決めたことを揺るがすような真似はしないさ」

「ふふふ、まさにあなたらしいですね。・・・風、短い間だけだったけどあなたと過ごした日々は私の中では、十分すぎるほど幸せな日々だった」

「それは風も同じですよ。わかっているとは思いますが」

「えぇ、むしろ全力を尽くさなければあなたには勝てない。そうならないことを願いはするけど、容赦はしないわ」

「それでこそ凛ちゃんです。さようならではなく、ありがとうで別れましょう。いつかまたお互いが隣で並んで過ごせるように」

「もちろん。ありがとう」
そして郭嘉奉考は、曹操の元へと去っていった。

そしてもう一人の英桀、劉備玄徳にも別れの時が迫っていた。

「まさかこんなにも早く桃香までいなくなるとは思わなかったよ」
と公孫賛は親友が旅立つ事を残念に思いつつ、決意したことに対して嬉しく思っていた。

正直、公孫賛の領で人材が集まりすぎていたのだ。

太守と言っても公孫賛の幽州啄郡の財源の限度は低かった。

実際、開拓すればそこまでひどくはないのだが、黄巾党による農村への襲撃、それに加え、北からの五胡の襲撃もあるため、なかなか内政に目が向けられず、財源が確保できないでいた。

アーチャーが入ってきた当初は、小規模の黄巾党に連勝し、物資と名声を得ていたため、それなりに財源が増えていったこともあった。

しかし、周倉が介入した辺りから連戦を続け、支出の割合が高くなってしまった。

そして下?城で戦火を上げたものの得たのはまた将だったため、ついに財源の底が見え始めていたのだ。

「本当だったら、路銀やら、物資やらをあげたいところだったんだけれどな・・・すまない」

「大丈夫だよ。今まで稼いでた分とかで何とかなりそうだし、これ以上白蓮ちゃんに迷惑はかけられないよ」
と笑った劉備は手を出した。

その手を公孫賛はしっかりと握った。

「次逢うときはどうなってるか楽しみだな」

「次は白蓮ちゃんを追い抜いちゃうかもよ」

「私だって今よりも高い場所に行って見せるさ！」

そしてお互いはしっかりとお互いの決意した表情を目に焼きつけながら、分かれていった。

そしてそれから1週間ほどたったころ、公孫賛のもとに慌てて駆け寄った伝令がいた。

決意する者、去り行く者（後書き）

「申し上げます！冀州が賊の手に落ちました！」

「なんだと！袁紹の馬鹿は何やってるんだ！？」

と公孫賛は激怒していた。

実際陥落したのは仕方がなかった。

下？城での戦いの際、洛陽に向かった袁紹は、それ以降可進に媚を売ろうと、軍師として何進の下に留まっていた。それも袁紹軍の８割の兵とともに将軍全員という何とも言えない状態だったのだ。

それに対し冀州に向かった黄巾党は約２０万の大軍。

まさにイナゴの大群のようにあっさりと決着がつき、伝令が飛んできたというわけだ。

しかし問題は次にあった。

「敵は、我が軍へと進行中。恐らく張宝の仇打ちが目的かと」

そう、張宝は公孫賛によって討たれたことになっているのだ。

当然仇打ちは予想していた。

しかしまさか全軍で来るとは思ってもいなかったのだ。

「急いで全将を集めろ！軍議を開くぞ！」

そして公孫賛の一世一代の大戦闘の幕が開いた。

黄巾の乱・易京攻防戦（前書き）

久しぶりの投稿です。
お待たせした分書けているかと言うと、書けていませんｏｒｚ
ちなみに作者に地震の影響は仕事以外ではありませんでした。
まぁ、仕事でバタバタしてたら書く意欲が減ってしまったというのが本音なんですが、最近また書きたくなって書こうかどうしようか悩んでいると、欲しかった資料が手に入ったので、書く気になったという次第です。
すみません。

今回攻防と言いますが、実際はあまり戦いません。
まぁ、前哨戦ですからどう書いたらいいのかわからなかった＆リハビリ的なものを含めて、軽い気持ちで見ていただければ幸いです。
では本編をどうぞ。

黄巾の乱・易京攻防戦

「では、軍議を開きましょう。まず我が軍の兵力ですが、お兄さんたちの活躍により、現在約３万の兵がいます。ですがこちらに向かってきている兵は、伝令さんによると１０万と言う大群です。まぁ、袁紹さんみたいに蹴散らされることはないと思いますが、勝つことも難しいと思われます」

「せやな。さすがに倍以上の戦力は何とかしないと勝てる気が全くせんわ」

「でも、徴兵もこの前行ったばかりなの」

「それに、徴兵をしたとしても兵としては使えません。現在我が軍の精鋭と呼べるのは２万。残りの１万はまだ訓練不足。下手に使えば逆に戦局が悪くなるかもしれません」

「風、敵の進軍経路はどうなると思う？」

「そうですね～。現在敵は南皮を落としたばかりですから進軍経路は二つですね。まず距離の近い河間から易京を通りこの北平に至る経路です。この経路を使用した場合この北平までは速くて８日くらいかかるでしょう。次に少し遠回りになりますが、界橋から鉅鹿、易京を通る経路ですね。この経路を使用した場合１２日ほどかかると思われます」

「なら、話は早いな。敵は河間を使ってくるだろう」

と自信満々に言う公孫賛に、程？は何とも言えない表情をしていた。

「残念ながらそちらは下策ですね」

「え！？そうなのか！！」

「はい。簡単に言っちゃいますと河間と易京の間には川があるのですよ。その橋は１０万の大軍にとってはかなり狭く、思うように動けないのです」

「そういえば下？に向かう時、確かに橋があったが、人が１０人ほどしか通れなかったな」

「なら、敵は界橋を通るか・・・」

「いいえ、恐らく公孫賛さんの言った経路で来るはずです。何せ相手は賊ですから、一々進軍経路を話合わず、最短経路で来るでしょう」

「なら、何で否定するんだよ」

「それはもちろん、相手の策の隙間を皆さんに教えるためですよ」と笑った程？はアーチャーを見た。

「というわけで、お兄さんと凪ちゃんに頼んでもいいですか」

「妥当な線だな・・・だが、楽進まで付いてくる必要はないだろう」

「いえいえ、敵の足止めが中心ですから、お兄さんが敵を討ちこぼした時の保険ですよ」

「ふっならばその保険はありがたく受け取っておこう。ならば足止

めに専念しよう。後は任せた」
とアーチャーがその場から去ると、楽進は何だかわからない様子だったが、アーチャーについて行った。
「で、兵は何人連れて行くんだ？」
と公孫賛が心配そうに程？に訪ねると、程？は当たり前のように
「もちろんお兄さんと凪ちゃんの二人だけですよ」
と言った。
「「「「「はぁ～！？」」」」」
と全員が慌てふためく中、趙雲はニヤリと笑い、程？を見つめると
「となると、援軍ですな」
「さすがは星ちゃんです」
「援軍・・・しかし我が軍に恩があるのは孫堅ぐらいだな？だが、時間がかかりすぎてしまうぞ？」
「ですから、？の劉焉さんにお願いしましょう」
すると公孫さんが驚きながら
「いやいや、私と劉焉は相当中が悪いぞ！？」
「それを承知の上です。いくら相手が皇族崩れでも、この北平が落ちれば次に狙われるのは自分だというのはわかるでしょうし、それぐらいの知力はある方だと聞いています。公孫賛さんの不可侵二年契約でも結べば簡単に兵ぐらい貸してくれるでしょう」

「不可侵って・・・まぁ、私もあいつを攻める予定なんかないから別にいいけどな」
と不満そうに言ったが、許可が取れたので、程？は1枚の紙を取りだした。

「なら、星ちゃんと紗和ちゃんは、劉焉さんに兵を借りてください。その後のことはこの紙に記してありますので、兵を借りることができたら読んでその通りに行動してくださいね。

「承知！」
と趙雲は紙を受け取ると、そのまま走り去っていった。

「ちょっ！紗和を置いて行くなぁ～なの！」
と于禁も急いでその後ろを追いかけて行った。

「さて、我が軍はこれで4人の将がいなくなった状態で3万の兵を動かさなくちゃなりません」

「・・・そういえばまだ兵は誰も率いていないんだな。だんだん私にはわからなくなってきたぞ」

「大丈夫ですよ。後、真桜ちゃんに頼んでおいたアレが出来ているかどうかなんですけど・・・」

「あぁ、アレやったらもう出来てるで、最短で作ったから軍事用としてはきついかも知れんが使えることは使えるで・・・ってまさか！」
と何かに築いたように李典が驚いくと、程？はそれを笑顔で返し

「はい、そのまさかですよ。さぁ、黄巾党殲滅作戦、開始と行きましょう」

それから5日が過ぎた。

場所は易京。

この南に少し行ったところに一人の男が立っていた。

「おい、兄ちゃん。俺たちゃ急いでんだ、そこを退け！」

「ふっ！退けと言われて退くほど私は利口では無いのでな、通りたければ好きに通るがいい」

「馬鹿かおめぇは！俺たちが通るのに邪魔だから退けって言ってんだよ」

「馬鹿なのは貴様らの方だ、もうすでに貴様らの間では広まっているだろう、私がどういう人物なのか？」

とニヤリと笑ったアーチャーに対し何人かの賊が気付き始めていた。

「まさか、貴様が張宝ちゃんを・・・」

「あぁ、そうだ。私が貴様らの言う天の御使いさ」

もうその言葉で賊にとっては十分だった。

まさにイナゴの群れとも言える大量の人間が一人の男に突撃を開始

していた。
だが、いくら進んでもその男に到達できるのは１０人という少数。
しかも飲み込むはずだったそれはまるで壁のように一向に倒れる気配がない。
その姿はまさに鋼鉄で出来た盾のようになんの攻撃も通すことは無い。
そして彼の手からは無尽蔵に作り出される剣。
そのことからのちに、この大陸で彼はこう呼ばれた。
錬鉄の身使いと・・・

「はっきりと言える」
とその姿を見ていた少女、楽進は橋の後方でアーチャーの戦いを見つめていた。

「私が一人で食い止める」
とアーチャーが軍議後に言った言葉に楽進は激怒していた。

アーチャーの力は知っていた。
実際下？での戦いも、彼による戦果がかなり高かった。
しかし今回の相手は１０万の大軍。
それに一人で挑むというのだ。
どう考えても馬鹿げている。
「ふざけないで下さい！！相手は１０万の大軍です。それをあなた一人で止める！？いったいどうやってその１０万と戦うというのですか！！少しは落ち着いてください！！」
「落ち着くのは君の方だ！！君は風が何を言っていたのかわからなかったのか？」
「風様が言っていたこと？」
「そうだ、さすがに私でも１０万の大軍に勝つことは出来ん。だが、１０人であれば勝つことはできる」
「！！まさか橋の上で戦うのですか！？」
「そうだ、そこでは最大で１０人しか通ることは出来ん。そして、相手は賊、見方が目の前で次々とやられていけば士気は下がる」
「そうすれば進軍が止まる・・・これが私たち二人に命じられた策」

そして今それが行われている。

「私などでは１０人ですら完全に打ち洩らさずに守りきれるかと言われれば不可能だ。だがあの御方はそれをこなしている」

次々と黄色が赤く染まっていく橋に次第に黄巾党の群れには動揺が広がっていた。

「そして、黄巾党を鼓舞するために将が出てくる」

「貴様ら！相手はたったの一人だ！なぜ倒せん！」

と馬にまたがった男が進み出た。

「ならば貴様が出てきてはどうだ！？なに、すでに１００人は切ったが、貴様の相手くらいは造作もないぞ！？」と笑ったアーチャーに対し

「ふざけるな！貴様の首、この楊奉がとってくれるわ！」

と勢いよく進んだが。

「残念だが、この首そう安くはないのでな、それに貴様は知っているか？私が弓兵であることを」

一騎打ちであればこの方法はまさしく罵声を浴びても仕方のないやり方だ。

だが、その罵声を持ってしても、この大軍を一人で退けることができる方が重要であり、世に広まる偉業になる。

「――偽・螺旋剣（カラドボルグ）」

一瞬で光に包まれた瞬間、その男が見る橋の先にはまるで陥没したように大きな地面が広がっていた。

「そう、はっきりと言える。私がこの人に付いてきて間違いではなかったことを」

黄巾の乱・易京攻防戦（後書き）

「大変だよ！愛紗ちゃん」

そう言って桃香様は私のところへと駆け出してきた。

「そんなに慌ててどうなさったのですか！？」

「南皮が、黄巾党の手によって落ちたって！、今、朱里ちゃんの放った斥候から連絡があって」

その瞬間、私の体は動きだしていた。

そう、初めて私は軍規を乱した。

今まで注意するはずだった立場の私が、初めて軍規乱したのだ。

だが、後悔はしていない。

もうこの身は彼を放っておく事など出来なかったのだ。

今こそ、我が力を発揮する時。

前方に賊軍が見えた瞬間、すでに自分は叫んでいた。

「関雲長！押して参る！！」

黄巾の乱・清河の戦い（前書き）

今回もオリキャラが登場します。
まぁ、序盤で長く使うオリキャラはこのくらいで終わりですのでご了承を。
ちなみにまた強いように感じますが、力は馬岱とほぼ同等です。

では、どうぞ。

黄巾の乱・清河の戦い

「完全にやられた」
と南皮から少し離れた平野にある陣の中、張梁は頭を抱えていた。

「易京にいる人物にすでに2日足止めを食らっている。それについさっき、後方の1万の軍の中に一人の武将が切り込んできてすでに混乱が広がり始めている。地和姉さんの仇と意気込んできたのはいいものの、１０万と言う大群に私一人では指揮することなんて出来ない。今までは波才や、張曼成にほぼ全軍預けていたから、私は策を考えるだけでよかったのだけれど、すでにこの大軍を指揮できるのはこの中にはいない。これじゃあ、仇どころか天和姉さんの命が危ない」
と張梁が嘆きながら天幕へと入り、ため息をついた瞬間、空気が一瞬にして凍りついた。

「っ！なんの用？まさか、私に前線に出ろとかいう話じゃないわよね」

張梁が誰かに話しかけるかのように喋ると、不気味な声が次第に聞こえ始めた。

「ーーーお前が行ったところであの御使いには勝てる可能性はない。そして数を持ってしても殺せないことが分かった今、上からの命令で私がやることになった」

「そう・・・なら前線の兵は下げるわよ。あなたに殺されてはかなわないから」

するその声はクツクツと笑いながら

「あぁ、それがいい。後はせいぜい後方の猪武者の相手でもしていろ。ただし兵の無事は保証はせんぞ。何せ、やつに勝てるかと言われれば分からないのでな」

と言い放つと凍りついた空気が次第に暖かさを取り戻していった。

「これで戦局が動く。だけど、あいつが勝てない？それだけあの御使いは実力を持っている・・・」

張梁が悩んでいると一人の女性が中へ入ってきた。

「お悩みのようですね」

「ええ、でも橋の上にいる御使いの方は何とかなりそう。後は後ろから来てる将を倒せばいいだけ」

「しかし、その後方からすでに援軍らしき軍勢が確認されていますよ？」

「それに対しては兵5万を差し向ける。いくらなんでもあの呂布じゃないから、5万もいれば大丈夫でしょう？」

「犠牲は問わないですか・・・あまり美しくはありませんね」

「本当なら2万ぐらいの軍で抑えたいんだけど、贅沢は言ってられないわ。実際私が指揮できるのは5千人が限度。あなたでも1万ぐらいが限度でしょ？」

「まぁ、そうですわね。でも、私に5万の軍なんて他の方から恨み

を買いそうですわ」

「それを承知でお願いしてるのよ。実際、韓忠に残りの5万の兵を預けているけど、趙弘、孫夏から不満の声が出ている。でもあの二人に軍を指揮する能力がないのは私が知っている。勝つためなら、だれでも利用するわ。もう私には後がないから・・・」

「心中お察ししますわ。・・・でも、本当に最後になったらあなただけでも逃げてもらいますわよ。人和さん」

「その気持ちだけでもありがたくもらっておくわ。久々里（ククリ）、武運を祈っているわ」

「では、出陣いたしますわ。人和さんも無理はなさらずに」

とその女性は天幕から出て行った。

一方、関羽は後方から突撃し始めてから、すでに30分が経過していた。

「くっ！数が多い。だが、ここで退くわけにはいかん！アーチャー殿を救わねば！」

しかし、どんな猛将でも疲れという敵には勝つことは不可能だった。まして関羽がいたのは北海に近い場所だ。すでに体力を消費した状態で戦っていたのだ。

そしてそれがついに牙を向いてしまった。

賊の一人が剣を振り下ろした瞬間、防御したのだが、そのすぐ後ろから、剣を振り上げて来た男によって武器が宙に浮いてしまったのだ。

「しまった！」

「よっしゃ！ようやく手ぶらになったな姉ちゃん！野郎ども！捕えて身ぐるみ剥いでやれ！」

「「「「おう！」」」」

いかに軍神と歌われた関羽と言えど、手に獲物がなければこの人数相手に抵抗するすべはない。

だが、決して関羽は諦めなかった。

一人でも多くとそのこぶしを握り、一人を殴り付けた。

だが、その後ろからすでに何人もの男が関羽目がけて武器を振り下ろしていた。

「では、そろそろ真打登場と言うところですかな」

とニヤリと笑った一人の少女は、一瞬で関羽の後ろにいた敵を蹴散らすと、背中を預けた。

「趙雲殿！？なぜここに！」

「アーチャー殿にお熱な少女の想いがいかほどのものか、高みの見物をしていたのですよ」

「なっ！私は別にそんな理由では・・・ってもしかして貴様、何処かで見ていたな」
と顔を真っ赤にしながら関羽は趙雲を睨みつけた。
「ははは、当たり前ではないか、我が槍はここぞという時に一番の輝きを見せますからな」
と近くにいた敵兵を次から次へと吹き飛ばしていく。
「さて、背中は任せてもよろしいかな？」
と趙雲は偃月刀を関羽に手渡した。
「ああ、任せておけ！」
と関羽はそれを受け取った。
「天の御使い、アーチャーが一の家臣、常山の趙子龍、参る！」
「劉玄徳が一の家臣、関雲長！押して参る！」
まさに台風の目と言うのがその状況にはあっていた。
二人を中心に敵兵は次々と吹き飛ばされていく。
次第に黄巾党の士気は下がっていた。
その時関羽は思った。
この趙雲という女、これほどまでに力があったのかと。
確かに、趙雲とは一度公孫賛の下にいた時に手合わせをし、力量を見測ったつもりだった。

その時の趙雲は力というよりも、速さと技術で相手を制する戦い方をする人物だった。

この貧困の時代に、技術力を高めることができる事が出来るのはほんの一握りの者だけだ。

実際関羽でさえ技術はあれどもそれは粗削り。

それを力で補うのがこの時代の将がほとんど行なってきた方法だ。

それを趙雲は全く逆の方法で名乗りを上げていたのだ。

手合わせしてなんと勉強になるのだろうと思ったのと同時に、もしこれにさらに相手を圧倒するほどの力を手に入れたら、あの呂布と同等になるのだろうと思っていた。

その兆しを今後ろで戦っている趙雲は見せていたのだ。

「これは、負けていられんな」
と関羽は気合を入れなおした。

「それで、この状況ですか・・・なんともまぁお粗末ですわね」
と長身の女性は黄巾党の中からゆっくりと歩いた来た。

「ほう？貴殿なかなか武に自身があるようだな」
と趙雲はにやりと笑った。

「まぁ、それなりにですけれど。ですがあなたたちみたいに5万の

兵と戦おうなんていう猛者ではありませんので、足止めが私の役目です」

「では、私が「いや、私が相手をしよう」関羽殿？」

「悪いが今回は譲ってくれ。あれほどの差を見せつけられては、私とて落ち着いてはいられん」

「私としては、お二人でかかってくるものだと思っていましたから、好都合ですよ」

「貴様の相手など、私一人で十分だ！我が名は関羽雲長！貴様を倒し、この戦の終止符を打たん！」

「我が名は廖化元倹！あなたの首、取らせていただきますわ！」と両腰に差してあった双剣を抜いた。

「むっ！？何だあの剣は」

ーーーへぇ、珍しいじゃねえか。ありゃククリ刀だ。

と嫌な声とともに、久しぶりの登場にあくびをしながら答えた。

「アンリ殿か！？・・・ククリ刀、どんな武器なのだ？」

ーーーまぁ、見りゃわかるが、刀身がくの字に曲がった武器だな。

「くの字？曲がっているのはわかるが、その表現はよくわからん。だが、あれでは攻撃しにくいのではないか？」

――あぁ、元々は万能ナイフってこの意味じゃわかんねえんだよな・・・分かりやすく言えば何でも刃物だな。

「何でも刃物？ということは別に武器として秀でているわけではないと？」

――そうなるな、だが今回ばかりは苦戦しそうだぜ。

と話しこんでるうちに関羽は偃月刀を振るっていた。

その瞬間、アンリの言ったことが分かった。

あの関羽の渾身の一撃を、あの廖化という将はその両方の剣で完全に受け止めていた。

これが、双剣との違い。

趙雲が今まで見てきたものはみな刀身が細かった。

ゆえに関羽ほどの将が放った一撃では刀身の強度が持たず、砕けてしまっていただろう。

「うまい・・・だが、防御に秀でても」

――そりゃ、ちげえよ。あのままなら関羽は死ぬぜ。

「なっ！どういう意味だ」

――関羽の武器は大ぶりの偃月刀、それに対しククリ刀は片手剣、小回りが利く分、防御した後の攻撃の繰り出す速さが違う。それに

あの姿勢からの攻撃はまずいぜ。

廖化の体制は防御した段階で耐性を低くし、体をひねっていた。

「関羽殿！」

と関羽に手を伸ばそうとしたが。

――わりいが説明してる暇わねえな。ちょっと借りるぜ。

と言われた瞬間、趙雲の意識は飛んでいた。

黄巾の乱・清河の戦い（後書き）

「何をする！」
と私を吹き飛ばしてきたのは、趙雲だった。
確かに相手にはすぐに攻撃できる態勢だった、だが決して防げないわけではない。

「わりいが、今回は受けちゃいけねえんだよ。まったくどうなってんだ？この時代にククリ刀を使いこなす奴がいやがるなんてな・・・まったくどこの英雄だよ」
と皮肉を込めて趙雲殿が言っているが、明らかに口調がおかしい。

「我が一撃、避けたのはあなたが初めてです。名を聞いておきましょう」
と廖化は趙雲殿を睨みつけていた。

「わりいがちょっとした事情でな。この体は趙雲なんだが、俺は趙雲じゃねえ」

「何をわけがわからないことを言っている！」

「まぁ、訳がわかんないならそれでいい。・・・っち！もう安定しなくなってきやがった・・・仕方ねえ、まだ実験段階だしな。今日はこれくらいか」
と言い放った瞬間、趙雲殿の雰囲気が変わった。

「わ・・・私は一体！？」
と戸惑う趙雲殿だったが何やら独り言を始めていた。

そして何かを決心したかのような瞳で

「関羽殿には悪いが、あの者の相手私に譲っていただきたい。どうやらこの者、剣術に関してはあなたより上だ。そういった相手には力技では勝てん」

「・・・それではお前は勝てるというのか？」

「あぁ、一々時間をかけていてはアーチャー殿に負担がかかりすぎる。我が槍にて終わらせる」

「・・・分かった。だが、余裕で勝てよ。周りは敵だらけだ」

と関羽はタッチすると少し後方へ下がった。

「それで、結局あなたがやるんですの？」

「あぁ、我が名は常山の趙子龍。そして天の御使いアーチャーの一の家臣にして一番弟子。天の力を手に入れた我が槍、とくと見るがいい！いざ！」

と趙雲が構えた瞬間、場の空気が一変した。

黄巾の乱・清河追撃戦（前書き）

軍の動かし方がなかなかうまくいかない・・・
うまく書けているかわかりませんが、とりあえず今回は影の薄い人が少し頑張りますｗｗ
では、どうぞ

黄巾の乱・清河追撃戦

「わ・・・私は一体！？」

ーーーわりいが、ちょいと体を借りた。今、関羽に死なれるとちょっと困るんでな。

「体を借りた？」

ーーーあぁ。まぁこっちも魔力相当消費するし、聖杯の恩恵が一時的に無くなるからほとんど使う事はねぇから安心しな。正直お前の体じゃ、俺の武器は使えねえから楽しめねえしな。

ケタケタとアンリマユは笑った。

正直、寝起きのような倦怠感に襲われたが、すぐに元に戻った。

十分戦える。

ーーー正直、今の関羽じゃ荷が重すぎる。お前が相手してやんな。

「・・・仕方ありませんな。そろそろアレを使わねばなりません故、場所の確保も必要。そしてあの武将を倒せばここにいる賊ぐらいは退くでしょう。ならば」

と関羽を見た趙雲は口を開いた。

「関羽殿には悪いが、あの者の相手私に譲っていただきたい。どうやらこの者、剣術に関してはあなたより上だ。そういった相手には力技では勝てん」

「・・・それではお前は勝てるというのか？」

「あぁ、一々時間をかけていてはアーチャー殿に負担がかかりすぎる。我が槍にて終わらせる」

「・・・分かった。だが、余裕で勝てよ。周りは敵だらけだ」

と関羽はタッチすると少し後方へ下がった。

「それで、結局あなたがやるんですの？」

「あぁ、我が名は常山の趙子龍。そして天の御使いアーチャーの一の家臣にして一番弟子。天の力を手に入れた我が槍、とくと見るがいい！いざ！」

イメージするのは風。

この短期間で最も身に付いた魔術の一つそれがこの魔術だった。

「Ｂ（解放）ｅｆｒｅｉｕｎｇ　Ｄ（風）ｅｒ　Ｗ（圧）ｉｎｄｄｒｕｃｋ」

「何を企んでいるのか知りませんが、集中しすぎで反応が遅すぎますわよ！」

と完全に間合いに入った。

たが、入った瞬間それは失敗だったと後悔した。

「爆ぜろ！風神槍！」

趙雲が繰り出したのはただの突き。

だが、その威力はただ突いただけではありえないほど高いのだ。

ククリ刀で槍の突きを防ぐには、槍の軌道を反らすしかない。

もともとそのつもりで間合いに入り、片手ですでに槍の矛先を払おうとしていたのだ。

だが、その槍に触れた瞬間、まるで高速に回転するドリルに触れ弾かれたかのように、武器が宙に舞ったのだ。

「バカなっ！」

だが、その余波は武器にとどまらず、身体まで圧迫するかのように、潰されていく。

次第に体自身が耐えきれなくなり、趙雲の前方へと思いっきり体が飛んだ。

ドサリと落ちた廖化に、さらに趙雲がとどめの一撃をその喉元へ加える。

「なぜ殺さない・・・」

「私は殺すのが目的ではない。だが、利用価値はある」

「利用価値？この私にどんな利用価値があるという」

「お主、張梁と対等、もしくはある程度話せる立場か？」

「それを知ってどうするというのです？」

「それだけ答えればよい。返答次第で面白いことを聞かせよう」

「面白いこと・・・。まぁ、良いでしょう。どの道あなたには勝てる気はしませんし。状況にもよりますが、ある程度対等に話せますわよ」

「ふむ、では」

と耳元で趙雲は喋ると、槍の柄で思いっきり廖化を吹き飛ばした。

そして、槍を高らかに掲げ

「貴様では相手にならん！我こそはと思うもの！潔く名乗りでよ。この趙子龍！貴様ら全員相手にしても後れはとらんぞ！」

まさに、敵から見ればまさに猛将。

確かに、全員でかかれば倒せるだろう。
だが、最初の何人かは確実に殺されるのは目に見えている。
これが正規の軍であれば状況が変わるが、相手は賊の寄せ集め。
わざわざ命を捨ててまであの猛将と戦い、名乗りを上げようという
者がいるはずもなかった。
そして、その中で特に臆病なものがいれば
「じょ、冗談じゃねえ。こんなやつと戦えるか」
と逃げ出してしまう。
そうなってしまえばもう手の着けようがない。
次々と逃げていくものを誰も止められるはずもなく、どんどん兵が
減っていく。
「やれやれ、やはり賊は賊か・・・まぁいい。さて、そろそろだな」
と趙雲は懐から玉を取り出し、地面へと思いっきり投げつけた。
その瞬間、ボンという音とともに大量の煙が上がった。
そして、趙雲はにやりと笑うと、廖化がいた場所を見つめていた。

一方、その煙を見た者たちが一斉に動き出していた。

「よっしゃ、合図やで」

「う～緊張するの」

「そんなん気合で何とかせい！それじゃあ行くで！全軍突撃や！」

「本当だ、煙が上がったぞ！」

「さすがは星ちゃんですね。では、全軍進軍を開始しましょう」

「愛紗ちゃん、大丈夫かな？・・・」

「今は、無事を祈るほかありません。ただ、敵は現在退いたとの事ですから、討たれたということはないと思います」

「愛紗がやられるはずがないのだ。相変わらず桃香お姉ちゃんは心配性なのだ」

「もう、鈴々ちゃんまで」

ぶーぶーと劉備はほほを膨らませた。

「では各軍、私の指示通りに動いてもらってもいいですか～？」

「「「「応！（なのだ！）」」」」

「まず、我が軍は現在、楽陵港にいます。そして于禁隊は界橋にいます。そして敵は現在清河から南皮に撤退中。これを我が隊と于禁隊により挟撃します。まず先陣は公孫賛さん」

「おう！ってわたしか！」
と驚愕する公孫賛に対し程？はにこやかにほほ笑むと

「はい、騎馬に長けているのはこの中では公孫賛さんだけなので」
と言い放った。

「あ～確かに愛紗ちゃんがいないから、私の軍で騎馬使えるの鈴々ちゃん以外いないもんね」

「でも鈴々は馬には乗れるけど、馬乗りながら指揮するのは無理なのだ」
にゃははと笑う張飛に対しその横の少女もまたアハハと笑っていた。

「次に左翼を張飛ちゃんに担当してもらいます。張飛ちゃんは公孫賛の騎馬が敵に攻撃を開始したのを確認後、その敵の軍の先頭は見逃し、中間あたりで突撃してください」

「おうなのだ！」

「次に右翼を劉備さん。劉備さんは張飛ちゃんが突撃したのち敵後

方が一時停止しますのでそこへ弓兵で一斉に攻撃してください。その後はそこにいる軍師の子と臨機応変に動いてもらって構いません」

「りょうかい♪」

「わかりました」

「そして風は切り離された後方の敵にさらに横から歩兵で切り崩します。これで敵の半分くらいの兵は倒せるでしょう。それでは出陣しちゃいましょう」

「本当に私が先陣でよかったのかな・・・」

「何をおっしゃられます公孫賛様。我らの騎馬の威力、敵にとことん味あわせてやりましょう！」

「ーーーそうだな。よし、敵前方を確認後、攻撃を開始するぞ！」

これが公孫賛と他の軍での騎馬の錬度の違い。

「全軍構え！ーーー放て！」

一斉に放たれた弓は敵先陣の兵の数を減らしていく。

「そのまま突撃はせず、敵横へと逸れろ！全軍、間断なく撃ちこめ！走射だ！」

本来ならば突撃した方が有利ではあるだろう。

だが、敵は約５万の大軍。

いくら撤退中と言えどもその中に突っ込めば被害は甚大となる。

だが、公孫賛の白馬義従はこの時代では珍しい騎射を、全力で駆けながらも、一矢一殺が行えるほどの者を寄り添って集められた部隊なのだ。

公孫賛軍最強の騎馬隊と言っても過言ではなかった。

そこへさらなる攻撃が黄巾党へ襲いかかった。

「ーーーへぇ、やるやないか。お前ら！公孫賛なんかに負けるんやないで！全軍突撃や！」

「皆行くのだ！突撃！粉砕！勝利なのだ！」

まさに完全なる挟み撃ちで黄色かった大地に大きな緑と紫の断裂が生まれた。

「なっ！あれは丁原軍の張遼じゃないか！何であんなところに・・・まぁ、私が気にしたところで分かるわけがないよな・・・。でも完全に敵が浮足立ってるな！全軍今度こそ突撃するぞ！敵に公孫賛の白馬義従の威力とくと見せ付けてやれ！」

「「「おおお！！！！」」」

完全に分断された黄巾党にさらに天から降り注ぐ矢が一斉に降り注いだ。

「全軍一斉正射後、抜刀！この機を逃さず突撃してください！」
と少女の声とともに劉備軍が一斉に後方の軍を押しこむように突撃した。

「全軍突撃なのです！于禁隊とともに敵の横っ腹にどでかい穴をあけてやるのですぞ！」
とその逆方向ではもう一人の少女が声を上げて敵の側面に歩兵部隊を突撃させていた。

「それでは、我が隊も突撃しますよ。ただし、深追いはせず確実に数を減らしてください」

「全軍突撃なの！的側面にぴったりと張り付き、逃がさないように包囲するの！」

完全に包まれた黄巾党の陣計は上から見ればまさに水のあふれたコップのようだった。

そこへ最後の強力な一撃によってその水は蒸発する。

「ふっ。敵は完全に策にはまったな」

「ああ、完全に我らがすすむべき道が出来ている」

「今度は恋も戦っていいのか？」

「もちろんだ」

「もう姉御一人でなんか行かせないからな」

「あぁ、水香。頼りにしているぞ」

後方に立つのは４人の将。

その旗印は趙、関、呂、周。

どれもが目の前にいる黄巾党の心に深い恐怖とともに植えつけられた文字。

その後方に控えるのは５千の兵。

完全に水に満たされたコップに今、大きな石が落とされたのだった。

黄巾の乱・清河追撃戦（後書き）

ーーー完全に敵軍は我が策に落ちましたねぇ。

関羽さんの暴走は思わぬ誤算でしたが、いい感じに敵を引きつけてくれたので助かりました。

おや、みなさん風の策が知りたいと？

しかたありませんねぇ。

今回だけ、特別ですよ。

まず真桜ちゃんに頼んでおいたアレとは、船のことなのです。

北平には港がなく、最も近くにあるのが安平だったのですよ。

せっかく公孫賛さんの領地は海に近いのですから、船を使えば策も広がるというわけです。

次に星ちゃんたちのことですが、１２日かかるはずだといいましたがあれは実は星ちゃん達には関係ないのですよ。

何せ二人は騎馬に乗って２人で？に向かったのです。

黄巾党たちとの速度が違いすぎますからねえ。

それに？の劉焉さんと晋陽の丁原さんはお互い少し前まで争っていた中という情報が入ってきていました。

この南皮が制圧された時点で、劉焉さんも丁原さんも争ってはいられません。

しかし、劉焉さんはかなり強情な人だと聞いています。

となると先に黄巾党壊滅までの和睦の使者を立てるのは丁原さんだと思ったのです。

そう、ここで？の兵と、丁原軍の協力が得られるわけです。

そして最後に、劉備軍。

元々水香ちゃんをこの軍にとどめておいたのは、劉備さんと連携が取りたかったからです。

私が南皮制圧の伝令を聞いた時、劉備さんは北海にいました。

そう、南皮制圧の報を届けたのは紛れもない風なのですよ。

これで易京のお兄さんと凪ちゃん、北平の真桜ちゃん、で黄巾党包囲網の完成です。

後は張梁さんがどう動いてくれるかですね・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4098m/

Fate/無双

2011年6月4日08時23分発行